100号発行記念特大号

UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER
UFO・超能力・宇宙哲学
コンタクティー

UFO問題とアダムスキー

富士山二合目から目撃したUFO

私はこうして超能力を開発した

アメリカの不思議な土地

〈連載第3回〉

UFO-宇宙からの完全な証拠

SPRING
1988

100

UFO contactee　100号

UFO問題とアダムスキー——久保田八郎　1
富士山二合目から目撃したUFO——遠藤昭則　4
私はこうして超能力を開発した——坂本正廣　8
〈写真〉岡山県に出現した葉巻型UFO——15
超低空で飛んだ鉄カブト型UFO——清水　正　16
空中に「8」の字が出現——安藤澄雄　17
アメリカの不思議な土地——水野和彦　18
科学——SCIENCE——24
〈書評〉ピラミッド・ミステリーを語る——28
GAP短信——29
UFO-宇宙からの完全な証拠〈連載第3回〉——ダニエル・ロス　30
〈投稿欄〉ユーコン広場——44
〈報告〉福岡支部大会／山形・仙台合同支部大会／長野支部大会——46
「アメリカ東部西部・メキシコの旅」に参加して(2)——47
〈広告〉エジプト・イスラエル・イタリアの旅——48
〈予告〉仙台・山形合同支部大会／秋田・青森合同支部大会／旭川・札幌合同支部大会 49
〈広告〉アダムスキー全集／英文版ユーコン——50
全国月例研究会案内——51

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

UFOs and George Adamski

UFO問題とアダムスキー

科学的に立証される方向に動いているが、大国政府の隠蔽もある?

●久保田八郎〈日本GAP会長〉

本誌は本号でついに百号に達した。大慶至極だが、これは筆者個人の力だけではなく、創立以来多数の会員の方々のご支援の賜物であり、衷心より感謝する次第である。

昭和二十八年九月に島根県の田舎町の書店でアダムスキーの第一著である Flying Saucers Have Landed の邦訳『空飛ぶ円盤実見記』を発見して内容に驚嘆し、ただちにアダムスキーと文通を開始して以来、今年で三十五年目になる。昭和三十六年にはアダムスキーの示唆により日本GAPを設立し、当時十数カ国にわたって確立していた世界GAP網の一翼を担い、手書きの貧弱なガリ版の会報第一号を十数名の方に送った。それが本誌創刊号である。

ジョン・グレン中佐の傍証

ジョージ・アダムスキーは他の惑星の文明に関して驚くべき実状を伝えた。それを〝実状〟と言えるのは、彼の報告の内容が科学的に実証される方向に動いているからだ。たとえば彼が別な惑星から来た大母船に乗せられて宇宙空間を丸窓から望見したとき、暗黒であるべきはずの空間にホタルのような火が無数に散在しているのを見て驚いたとある。この件は一九五五年にニューヨークのアブラード・シューマン社から刊行された彼の第二著 Inside the Space Ships（邦訳アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』の第二部『宇宙船の内部』）に述べてある。そしてこの記述は嘲笑の的になった。

ところが七年後の一九六二年二月二十日、米海兵隊のジョン・グレン中佐は有人宇宙船マーキュリー6号（フレンドシップ7）に乗り、改造型アトラス大陸間弾道ミサイルでケープカナベラルから打ち上げられて、アメリカ最初の宇宙空間有人飛行の輝かしい業績を残した。といっても別な惑星へ行ったのではなく、地球を回る軌道に乗って四時間五十五分の航行をしただけで、三周回を終わったあと安全に着水したのである。

しかし地球へ帰還後、彼は驚くべき報告を行なった。暗黒の宇宙空間に、〝ホタル火〟のような現象を目撃したというのだ。これは大問題となり、アダムスキーの記述の正しさを実証するものとして当時わが国の週刊誌までが大きく報道した。

狼狽した米政府はそれ以後打ち上げられた宇宙飛行士たちに厳重な箝口令をしいたと伝えられている。

月面でUFOを見た宇宙飛行士

一九六九年から七二年にわたるアメリカのアポロ月着陸計画で、月にむけて九回の探査飛行が実施され、そのうち六回が月面着陸に成功し、十二人の宇宙飛行士が西は嵐の海から東はタウルス山脈まで月の表側の諸地点に到達した。このときの模様はテレビで全世界に流されたが、辻褄の合わない場面が時折見られた。紙面の都合で具体的な事例は省略するが、詳細は本誌に連載中の『UFO—宇宙からの完全な証拠』の第六章から出てくるので期待されたい。

奇怪な事柄が一つある。一九七一年七月二十六日から八月七日まで月飛行に挑戦した勇敢なスコット宇宙飛行士とジェームズ・B・アーウィン中佐は月着陸船ファルコンでアペニン山脈の麓に降り立った。上空には司令船でアルフレッド・M・ウォードン少佐が周回している。

このとき月面を探索していたアーウィン中佐はUFOを目撃したのである。

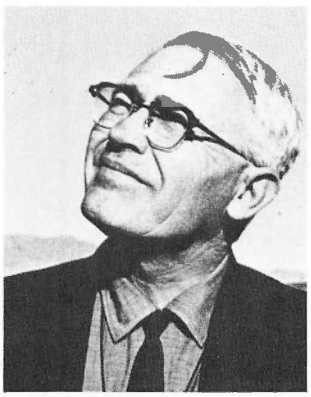
「目撃したのである」と断言できるのは、彼が数年前来日してテレビに出たとき、「自分は月面でUFOを見た」とはっきり語っていたからだ。もちろん英語でしゃべるので日本語訳の字幕がその都度画面に出るのだが、どういうわけか右の言葉を発したとき、その部分だけは字幕が映し出されなかったため、オヤ！と思った記憶がある。この画面を見た年月日とチャンネル数は忘れたが、アーウィン氏が明瞭に「UFO」と発言したことは間違いない。字幕を出さなかったのが意図的なものか、それとも翻訳者がUFOという語を知らなかったのか（知らないとは思えないが）、どちらかだろう。

天文学者もUFOを見ている

アダムスキーによれば、地球の衛星である月には、すでに別な惑星から来た〝人類〟によって都市その他の施設が建設され、彼らの宇宙基地になっていたという。この詳細も『宇宙からの訪問者』に出てくるが、実は月面に怪光の動きが観測されたという報告は、アポロ計画よりはるか以前に、地球から天文学者の望遠鏡観測によって、しばしば報告されていたのである。

天文学者でUFOを見た人はいないと言うUFO否定論者があとを絶たないが、これも知識情報不足である。

一九四九年八月、米ニューメキシコ州ラスクルーセスで一天文学者が六個ないし八個の不思議な光体群を見たと報告した。まるで夜間の電車の窓みたいに長方形の光る物がずらりと並んで空中を飛んだというのだ。この人こそ一九三〇年一月にローウェル天文台で冥王星を発見した大天文学者、クライド・W・トンボー博士である。



◀UFOを見たトンボー博士

むかし京都のUFO研究家M氏がトンボー博士に質問状を送って丁重な回答をもらったことがある。それを筆者にも見せてくれたので、博士がUFOを目撃したことを確認できた。

大体にこの頃はニューメキシコ州によくUFOが出現した。特に〝緑の火球〟として知られる特殊なUFOが四八年から四九年にかけて頻繁に空中を飛ぶので、隕石の権威者であるリンカーン・ラ・パス博士が軍の要請で徹底的に調査し、自分でも火球を目撃した結果、隕石ではないとの結論に達したのだ。

UFOは別な惑星から来る宇宙船

このUFOがどこから来るのか、となると、さまざまの推測が流れてきた。

高度に進歩した別な惑星から来る宇宙船というのから、四次元世界から来る霊的物体で、地球の大気圏内に入って物質化するのだという説など入り乱れて流れ、なかには「巨大な昆虫が操縦している宇宙船」という病的な憶測をしたフランス人研究家もいた。

ところがアダムスキーによると、戦後しきりに目撃されるようになったUFOは、わが太陽系の地球以外の惑星群から来る超高度に発達した宇宙船だという。しかもこれに乗っているのは地球人と同じ体形の〝肉体人間〟であるが、科学的精神的にわれわれの想像を絶した進歩をとげているのであって、地球だけが落ちこぼれ的な落第惑星であり、危険をはらんでいるために、観察と救援に来ていると主張している。

大体アダムスキーによると、わが太陽系の惑星は九個だけではなく、全部で十二個あり、しかもその全部に人類が居住し、大文明が存在しているけれども、地球人はそのことに全然気づいていないのだという。

この別な惑星群の人類は科学の超絶した発達もさることながら、精神的にも高度な成長をとげており、テレパシー、遠隔透視など、地球では超能力と呼ばれて、ごく少数の人しか持ち合わさぬ特殊な能力を、みな持っており、これを駆使して天国のような生活をすごしていると述べている。

多数出てきた科学的傍証

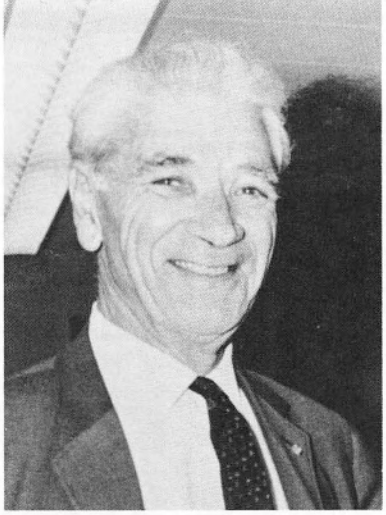
これがたんなる創作でないことは、アダムスキーの主張を裏づけるような事象が多方面で見られることでわかるのだ。アダムスキーが予言したバンアレン帯の発見、未発見の三惑星の内、十番目の惑星の存在を惑星探査機パイオニアのデータが示唆している等々、科学的裏付けを列挙すると枚挙にいとまがない。

結局どのように客観的に見ても、アダムスキーの説が正しかったことが立証される方向に科学が動いていると称して差し支えはないだろう。

最大の問題は、太陽の放射エネルギーは距離の二乗に反比例して弱まるので、地球以遠の惑星群にまで地球と同じ熱と光が与えられるはずはないから、アダムスキーの言う全惑星群の文明の存在はあり得ないと考える人が大半を占めるという点だ。

物理学の既知の法則からみればたしかにそのとおりなのだが、これに対してアダムスキーはテレビのブラウン管を引用して次のように説明している。

ブラウン管のグリッドとアノード（陽極）の正の高電圧はカソード（陰極）



◀ジョージ・アダムスキー

から出る電子を引き寄せる。すると電子は高速度でアノード（陽極）の方へ引っ張られてこれを通過し、次のアノードの方へ直進する。こうして理論上では種々の異なるアノード（陽極）と正の高電圧を用いることによって負の電子を非常な遠方にまで直進させ得るのである。

太陽放射エネルギーもこれに似ている。正負が逆になるけれども、カソードの役目をする正の太陽から放射されるエネルギーは火星と木星間にある負の第一アステロイドに引っ張られ、加速されて通過し、次に海王星と冥王星間の負の第二アステロイド帯に引っ張られてこれも通過し、最後の十二番目の惑星の外側にある第三アステロイド帯に引き寄せられる。こうして非常な遠方にある未発見のXYZ惑星群にまで地球と同じ熱と光が配達され、カリフォルニア州のような穏和な気候の中で人間が快適に暮らしているというのだ。

証拠がない？　いや、それらしいものがある。一九七二年に打ち上げた外惑星探査機パイオニア10号と七四年に送り出された同8号が太陽風の測定を行なった結果、木星あたりで急速に加速された事実が判明したのである。別冊『サイエンス』第42号の『太陽風』（ゴスリングとハンドハウゼン執筆）によると、「木星は電子銃として働き、電子群を百万電子ボルトから一千万電子ボルトに及ぶエネルギーにまで加速している」とある。これはアダムスキーの反逆二乗現象説を裏づけると思われる有力な科学論文である。

（注＝太陽風とは太陽のコロナから放出される高速度のプラズマ流。主に陽子と電子とから成る。風速は地球軌道近傍で秒速三百五十ないし七百キロメートル）

次に問題となるのが摂氏四百八十度という金星の表面温度である。こんな焦熱地獄では細菌のような生物さえ生きられないと一般に考えられている。たしかにこの高温が実在するものならばそのとおりだろう。しかしソ連の金星探査ベネラ計画とアメリカのマリナー探査機による観測結果の大幅な相違点その他の要素からみて、何らかの発見事の隠蔽が行なわれたと筆者はみている。おそらく地球世界で大パニックが発生するのを恐れて、表面温度や大気圧に関し、〝大本営発表〟をやったのだろう。こうした宇宙開発には軍事目的がからんでいるだろうし、その他政治的謀略が渦巻いているこの惑星で、真相がすべてそのまま正確に伝わるとは考えにくいのである。

政治は科学よりも強し

アダムスキーが自分の宇宙的体験を発表したのは一九五〇年代前半である。だが四八年十二月二十九日には米国防長官ジェームズ・V・フォレスタルが『地球衛星航行体計画』を発表し（ランド、ダグラス、ノースアメリカン航空機各社参加）、大気圏外へ人工衛星を打ち上げる計画を明らかにしているし、四九年四月にはソ連ゴロドムリャのドイツ人科学者団が三千キログラムの弾頭を三千キロメートル飛行させるR14ロケットの設計準備にはいっている。その前の二月二十四日には米ニューメキシコ州ホワイトサンズ実験場から二段式V2－2／WACコーポラルロケットが打ち上げられて、高度三百九十三キロメートルの記録を樹立した。

こうした宇宙開発の胎動をアダムスキーは知らなかったどころか、むしろ彼は月惑星探査によって自分の体験が確証されることを期待していたのである。また世間の耳目も大気圏外への進出により、いずれはアダムスキーに白黒いずれかの決着がつくものと考えていた。狂人ならいざ知らず、このような趨勢を百も承知していたアダムスキーが、根も葉もない創作を事実として発表するとは常識上考えられないことである。

しかし結果的に米ソの宇宙開発はアダムスキーを不利にした。金星の表面温度が摂氏四百八十度、月は空気も動植物もない死の世界という印象を大衆は植えつけられてしまい、これを絶対的真実だと思い込んでしまった。

だがこの世界では科学よりも政治が強いことを忘れてはならない。科学者の純粋さはときとして為政者の権謀の中に葬り去られるのだ。そして科学の名のもとに偽りの情報が公表されるのを大衆は神の御宜託のごとく信じて疑わないのである。

筆者の推測だが、いつか世界に人為的な大変動が発生し、それが鎮静化して平穏になった来世紀に、アダムスキーの体験が事実であったことが立証されるようになり、別な惑星の文明との交流が日常茶飯となるだろう。

アメリカでは一部の高級公務員はわが太陽系の他の惑星群に高度な文明が存在していることを知って知り抜いているが、現状では発表しようにもどうにもならないのだと筆者はアメリカで聞いたことがある。世の中はそんなものなのだろう。

〈アダムスキーの体験と哲学についてはアダムスキー全集（全八巻）がある。本号50頁を参照〉

UFOs Witnessed From Mt.Fuji

富士山二合目から目撃したUFO

出現とテレパシーとに重要な関連がある

●遠藤昭則

昭和六十二年十一月七日（土）午後十一時、標高千三百メートルの富士山二合目の展望台で春川正一氏と久保田先生、齋藤庄一氏、そして私の四人はUFOの出現を待っていた。まだ新しい展望台に立って前方に広がっているであろう森林を思うととても気持ちが良い。

周囲は濃い霧に包まれ、三メートル離れた所にある木々もうっすらと見える。風がなく、そのためか十一月に入ったというのに寒さはほとんど感じられない。しんとして時々ザワザワと木々の葉のこすれる音がする。こんなに霧が出ているので、少しは濡れてきたかなと服にさわってもなんともない。全く不思議だ。

春川正一氏（仮名）は本誌93号より五回にわたって連載された驚異的記事『私は別な惑星へ行ってきた！』の主人公である。久保田先生から春川氏へ「UFO観測に行こう」と誘いかけたところ、春川氏が快諾し、氏の主宰するグループの幹部である齋藤庄一氏が自家用車で参加した。この車に四人が同乗したのである。

齋藤氏は十数年前、中学生の頃、東京タワーの展望台の望遠鏡からアダムスキー型円盤が接近するのを目撃した人で、この体験は当時、久保田先生が経営しておられた出版社のUFO専門誌に大きく掲載されたことがある。テレパシー超能力者としても知られている方だ。

ふと春川氏がこのような霧が出ることは珍しいと話し始めた。以前一人でオートバイで来たときにはこのような時があり、コンタクトが行なわれたそうだ。霧によってこの場所を周囲と隔絶し、そこに円盤が降下して来るということであった。

珍しく深い霧がたちこめる

展望台から後ろの広場を見ると、右側には奥深い森が広がる富士の裾野への道があるが、そこは柵に鍵がかけてあって入れないようになっている。また左側には所々に木が植えてあり、広場となっている。

十分ぐらい立っていたであろうか、霧があまりにも濃いので齋藤氏の車の中で晴れてくるのを待つことにした。齋藤氏も百数回ここに来ているが、このような天気は珍しいと驚いていた。車中で軽く腹ごしらえをする。

私達が都内の渋谷駅を出発したのは午後八時二十分を少し過ぎた頃であった。小雨がぱらついていたので内心、今日の観測はできるのかなと思っていたが、春川氏は観測が行なえることを確信しているようであった。

齋藤氏が運転する車が東名高速の小田原にさしかかった時、それまでリラックスしていた春川氏が身をのり出して前方の空を見ていた。この辺りは波動が良いと齋藤氏と話している。すると齋藤氏も、この辺で光体を見たという話を友人達からよく聞くと答えていた。私も内部のフィーリングに注意を向けていたが、やはり東京とは違うものを感ずる。

そこで右側の車窓を見ていると、少し上の方に銀色の光が見えて来て前方の山に隠れた。何しろ車は時速八十キロものスピードを出しているので、あっという間の出来事である。UFOだったのか何だったのか分からない。運転をしている齋藤氏に右側の地形を聞くと山がかなり連なっているという。さっき銀色の光が見えたことを言うと、春川氏が、右側にではなく左側から波動を感ずると言う。落ち着いてよく感じてみるとそのようである。なるほど私の見たのは山の明りだと分かってくるとともに、氏の感受力が素晴らしいものであることに感銘を深めた。

途中足柄のサービスエリアに寄って休憩をしたが、この頃になると雨もあがり、雲の間から月が顔を時々のぞかせていた。雲の流れは早い。

御殿場の料金所には約二時間半ぐらいで着いた。運転の齋藤氏は疲れた様子もなく領収書を受け取り、係の人に「ありがとう」

と答えていた。氏はどの料金所でも感謝の言葉で係の人に答える。私などは係の人の態度によって感謝をしたり、つっけんどんだとこちらもプイと行ってしまうこともあるのでとても参考になる。聖書に、

「自分を愛してくれる人を愛したとしても、どんな恵みがあろうか」

という言葉があるが、まるでそれを実践しているかのような人である。

御殿場のインターチェンジからは約三十分ぐらいで目的地に着いた。何しろ霧が濃くて視界が悪く、路面の両脇には水が出ており、それが凍結しているかも知れず、車はゆっくりと走る。ここは小動物も多く、時々前を横切って行く。演習場の近くで駐屯している人達の中には夜間UFOを見る人が多いと春川氏が話していた。

五合目の筒状の霧

展望台の霧はなかなか晴れてこない。これはある目的にしたがった上空のスペース・ピープルからの操作であるようだった。約三、四十分待っていたであろうか、春川氏と齋藤氏が話し合って新五合目へ行ってみることになった。

時々雲の晴れた場所に出ると富士山が星空をバックに黒々と浮き上がって見える。五合目の森が切れる所に橙色(だいだい)の光がポツンと一つ見えるので、春川氏に尋ねると、新五合目の灯火だということであった。

表富士周遊道路の曲がりくねった道を車で登って行くと、霧はもう遥か下の方に見えている。月は木々を照らし出し、私達四人がこれから何か素晴らしい体験をするかのような気持ちが生じてくる。中学、高校と天体観測が好きで、弟とほとんど毎晩庭に出て望遠鏡をのぞいたり、天体写真を撮ったりしていたが、その頃のようなわくわくするようなしかし心は静まっているような気持ちである。

数分が過ぎた頃であろうか。春川氏が何か発見したようだ。車は坂道の途中で停止して氏は急いで外に出て行く。私達三人は車の中でじっと待機していた。すると齋藤氏も「あっ」と声を出して外に出て行った。先生と私も何事かと外に出る。

光が垂れて来て前方数十メートルの所にある松林の所で消えたそうだった。前方の松林を春川氏が指さしている。

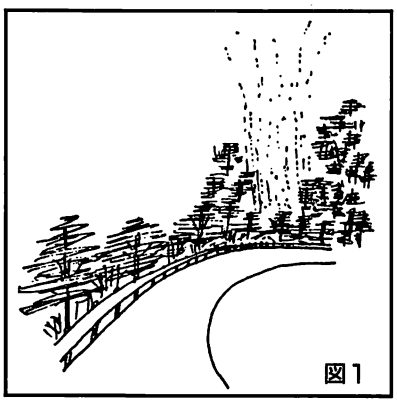


図1

そこからは霧が筒状に出ていた。あたかもそこに小型円盤が着陸していて急発進したためにフォースフィールドによって霧が生じたようにも見える（図1）。春川氏は慎重に、何かのサインであろうと言っていた。私はこのような体験は初めてなので驚いてしまった。春川氏と齋藤氏はよくこのように至近距離で円盤に関係のある現象を見るのであろうか、それ程驚いていない様子である。

UFOからの波動キャッチが重要

それから、何かが起こるかもしれないとしばらく皆で空を眺めたりしていた。春川氏は右手を軽く上げて上空からの波動をみているようである。やはり上空からの波動を敏感にキャッチすることが大切であるのだ。

天頂付近には薄く雲が広がっており、そこには易で使う算木を組み合わせたときにできる紋様のような形ができていた。あとで春川氏もそのことを言っていた。また雲の切れ目が十字になっていたと言う。やはり上空に円盤がいて、われわれにサインを送っていることは確かである。

これまで見て来て感じたことは、春川氏は見たものをすぐに興奮して言わずに、しばらくして慎重に言うことがよくあるということだ。私などは何か見えるとすぐに

「あっ、あれは？」

などと言ってしまうが、やはり氏は目からの情報だけではなく、自分の内部のフィーリングを重視しているように答える。UFO観測に行ってよく目がキョロキョロと動いたり、ちょっとUFOのようなものが飛んでいるとどよめき立ったりするものであるが、落ち着いて考えて見るとこのような状態の時には想念をうまく送れるものでもなく、ましてスペース・ピープルからの波動の感受などできる状態ではないことが分かるはずである。飢えたオオカミのように空をキョロキョロと見ていてもしようがないのではないだろうか。これはとてもよい勉強になった。

再び車に乗り込んで五合目の駐車場へと向かう。登って来る時に見えたオレンジ色の照明が一つ駐車場を照らしているだけで他に明りはない。奥には宝永山の標識が見える。

ここで春川氏は一人で外に出て行った。寒風が強く、氏は髪をふり乱して戻って来た。うっすらと細長い雲が見えているが、そこに何かいるようだということだった。

時間はもう八日の午前一時を過ぎていたので、そろそろ二合目に戻ることになった。伊豆沖に光が時々見える。なんであろうか私にはよくわからなかった。円盤は富士山と伊豆近海の調査をかなりしているということで、この地域からは様々な情報が得られるということである。富士山を調べれば日本列島の色々なことが分かってくると言っている学者もいるということであった。

途中、文字のような雲が出ていたので齋藤氏はそれを停車して見ていたが、春川氏は感じないようで、安全に降りて行くようにと言っていた。なるほど路面の端に出ている水が凍ってスリップしないように注意せねばならない道であった。しかし齋藤氏の運転はうまいもので、何の不安もなく二合目に二時頃着いた。あとで聞いたところによると車のA級ライセンスを持っているという。それで東京からの車も快適であった訳だ。

まず山腹に光体が出現

展望台で再び観測が始まった。霧も少し晴れてきたり、また濃くなったりというのを繰り返している。風が時々

吹いている。

私は広場の方に行って空を見上げてみた。月が霧の動きによって見え隠れしている。しかし十一時頃の印象とは違う。明らかに何かが起きるような印象が強くなってくるとともに、自分の中に、霧が晴れて行くことを思念せよという気持ちが湧き起こってきた。そこで、

「霧が晴れる、晴れる、晴れる……」

と唱えていると胸のあたりが暖かくなってきたので、よしと調子にのってさらに唱えた。手を出して上空からの波動を感じてみる。霧がどんどんと晴れてきた。胸が暖かくなってきて自分の中に充実感が感じられてきたのは初めてなので、これはすごいと思っていると、後ろを春川氏が

「宇宙船……」

と唱えながら展望台の方へと早足で行った。そうか氏のパワーに同調してパワーアップしたのだなと感じた。

皆それぞれ思い思いの所に歩いて行って観測をしている。春川氏と齋藤氏が富士山の頂上の方を見始めたので先生について行ってみると、新五合目の右側にある宝永山の道路のない所に光体が一つ現れていた。小型円盤が着陸しているとのことである。

先生と私は早速双眼鏡を取り出して光体を確認してみた。車のヘッドライトとは違う消え入りそうな光である。道路がない所で、しかも双眼鏡で確認しても光体と分かるものである。車が一台道路を登って行くのが見えたが、明らかに車と分かる。やはり小型円盤は富士山に着陸して調査をしているのだ。私はそれを見ながらなんとかその着陸している近くへ行ってみたいという気持ちにかられたが、そのうち次第に可能になるだろうと自分にいい聞かせてはやる心を抑えた。

円盤は展望台広場に着陸していた

それから展望台に皆で行ってみた。私はこの展望台の方に春川氏が重点を置いているように感じた。氏の話によると、コンタクトした時は円盤が遠くに見える箱根の山の方から地上低く飛んで来て、展望台の上を越えて広場に着陸したということである。

話を聞きながら私はわくわくしてくるとともに、ここなら着陸することができるだろうと思った。

また三メートルほど先の木の先端近くまで小型円盤が降下してきたことがあり、そのときには円盤の周囲が回転しているのまで確認できたそうである。齋藤氏も一緒にいたそうで、氏も同じことを言っていた。全くすごいという他はないが、しかし私たちもそのようにならなければだめだということを痛感させられた。

私達はアダムスキー氏が伝えてくれた宇宙哲学を本当に生かしているのであろうか。ただ本の感想を述べているだけであったり、アダムスキー氏が好きなだけであったりするのではだめで、要するに宇宙哲学によって学んだことを身体で覚えていることが必要なのだ。

『生命の科学』には

「相手の生命力を見よ」

ということが書かれてある。しかしその生命力とはどういうことなのか。生命力を見るという、その見るとはどういうことなのか、それらについて現実的に考えようとすることを果たして私達はしているであろうか。現実からの逃避の手段として、また神秘的な考えによって考察を進めていくことがないであろうか。

生命力は各個人を生かしているものであり、各個人を通してそれぞれの才能をあらわしてくれている。つまり才能は各個人の生命力の現れなのである。私達は人と面と向かい合っている時に、その人の才能を見つけることができるであろうか。また才能という程でなくてもその人の良さを見つけることができるであろうか。アダムスキー氏は相手の目の中にその人の幸福を見つけようとしていたという。私は今までこのようなことをそれ程考えたことがなかった。しかし今回の観測で改めてそれを考えさせられた。そして宇宙哲学を生かすことによって私たちはスペース・ピープルを海外から船でやって来る人々と同じように明るく迎えることが必要であると感じた。

UFOが次々と出現！

さて展望台にいると時間がすぐにたつようで、もう午前三時である。だいぶ寒くなってきている。出現がないのでそろそろ帰る話をしていると齋藤氏と春川氏が

「あっ、ストロボ光だ！」

と突然空を見てそろって言ったので慌てて見たが、もう光っていない。遠く箱根の山の上に細長い雲があるが、春川氏はその中を二機の円盤が飛び回っていると言うが、よく分からない。海中から円盤は雲の中に入り、レーダーにかからないようにその雲の中を進んで来るそうである。春川氏は久保田先生にもうあと十分時間を延長して良いかと聞かれていた。皆に山の上を見ていて下さいと言って、

「大丈夫、大丈夫……」

「スペース・ピープル、スペース・ピープル……」

「光って下さい、光って下さい……」

というような事を氏は唱え始めた。固苦しさは全くなく、リラックスして思う存分に呼びかけている。

私達は周囲で山の上をじっと見ていた。三段ある欄干の二段目に足をかけ、身体をゆさぶりながら一心に唱える氏の姿は時には子供のようであり、時には念力を使う偉大な人のように見える。

十分がすぎた丁度そのとき、氏が力を抜くとオレンジ色の光体が山の上にスッと現れて右に移動して消えた。二回出現したと思う。観測をさらにあと三十分延長することになった。

空が少し明るくなってきている。先程の雲はまだ山の上だ。しばらくしてまたオレンジ色の光体が出現した。さらに山の中腹の手前前方の空中に強烈に輝く銀色の光体が出現し、少しくにゃくにゃと動いて消えた。これには全く驚いてしまった(図2)。銀色の光など車が放つはずがなく、まして空中に、それも山の中腹の高さにあれ程の光を放つ地球の物体がいるなどとは考えられない。

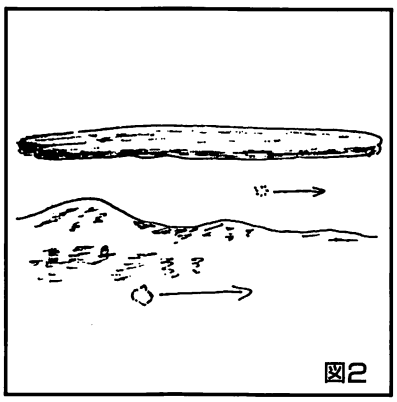


図2

春川氏と先生が話し始めた。少しするとまたオレンジ色の光体が現れて今度はじっとしている。そしてだんだんと光が消えて行くので、よしここは一つ試してみようと、こっそりその物体に目を通して(と言ったらよいのであろうか。何も考えずにただ念力でつり下げた紙を回転させるような気持ちで)働きかけてみた。

するとその光体の輝きが強くなった。やはり私達の放つ想念に反応しているようである。本当にスペース・ピープルは素晴らしい進歩した人々である。私達の想念を読み取る装置を持っているのである。ということは私達は円盤を見るということによって想念のコントロールができるということでもある。春川氏は展望台で、気が抜けた時に出現すると言っていたが、含蓄のある言葉である。

観測には想念のコントロールが重要

つまりスペース・ピープルはオープンマインドを持つ地球の人々に、本人が持つべき良き想念の状態を教えてくれているのであり、コントロールの方法をも練習させてくれているということになる。やはり自分から進んでスペース・ピープルを歓迎するように、どんどん観測に出かけなければいけないのかも知れない。それも上空の波動を感じながら——。

そうすることによってどのような印象がスペース・ピープルからのものであるかがわかるようになるのではないかと思う。なぜなら波動を感ずるということは、ある波動とある波動との違いを見分けることができるということであり、そこにはこれがスペース・ピープルの円盤が出現するときの波動であるということが分かっていなくてはならないからである。その開発にはアダムスキーの『テレパシー開発法』が最高であると思う。

春川氏と齋藤氏はここで母船を見たこともあるという。母船の両端から空へ向かってサーチライトが発射されて、それをくるくると回転させているのを見たことがあると言うのだ。そこで春川氏は

「サーチライト、サーチライト」

と手で棒の形を作りながら送信していたが、今回は出現しなかった。

そうするうちに雲がまた天頂付近から空全体にかかってきた。春川氏が指さすので見ると、展望台の近くの雲に、箱根の山の方から天頂へと垂直に筋が入っていた。これは円盤が通過して行った軌跡であろうということである。雲も厚くなってきた。円盤はもう内陸に移動したのだろうか。私達は車に乗り込んで冷えた身体を暖め、帰路についた。

途中春川氏の言葉を思い出していた。氏はコンタクトが近付くとイライラすることがあるという。それでもう少しリラックスしなくてはと言っていた。私は春川氏ほど感受力はないが、それよりも次元の低い、自然の変動の印象を感ずる時がある。するとイライラしてくることがあるのだ。やはり身体のリラックスがうまくできていないからイライラというものが出てきてしまうのであろうか。そのような事を考えているうちに、いつのまにかうとうととしていた。東京に着いたのは午前七時を少しすぎた頃であった。

編者付記

このUFO観測行は私(久保田)が春川氏に提案したもので、氏は快諾して齋藤庄一氏に同行を求め、富士山行きをセットしてくれたのである。

私自身、夜間山中での観測は数十回の経験があり、無数のUFOを見ているし、ときには壮絶な光景を目撃したこともあるが、春川氏との合同観測はこれが最初なので多大の関心があった。場合によっては眼前に円盤が着陸して四名が乗り込む事態に至るかもしれないと考えていた。

八日朝の三時頃から展望台より箱根方面に強烈に輝くオレンジ色の光体が出現するのを私は五回ほど確かに見た。春川氏はこちらの広場へ飛んで来るようにとしきりに声を出して呼びかけていたし、私もテレパシーで発信していたが、今回、大接近は実現しなかった。これは或る理由によるものと思う。賢明なスペース・ピープルに感謝し、またの機会に捲土重来を期したい。テレパシー能力の重要性を腹の底から感じさせられた観測行であった。

私はこうして超能力を開発した

『生命の科学』徹底実践の驚異的成果

●坂本正廣

本誌97号掲載『驚異の書〈生命の科学〉と円盤大接近』の主人公・坂本正廣氏は愛媛県松山市の日本GAP会員。『生命の科学』を反覆熟読し、手を見つめる練習を徹底的に続けた結果、オーラ透視、遠隔透視、テレパシーなどの素晴らしい超能力を開発したことはすでに右の記事で概要が紹介されたが、編者は六十二年四月二十九日、松山市で本人から直接に詳細をうかがった。以下は編者（久保田八郎）と坂本氏との対談。場所は同市三番町四丁目の料理屋『新浜作』の静かな一室。

不遇な幼少時代の宇宙への憧れ

――今日はあなたの体験をできるだけ詳しくお聞きしたいと思ってやってきました。まず生い立ちからずっと話して頂いて、後に『生命の科学』にふれるようになった動機とか、それを猛烈に読みまくったことや、手を見つめる練習をやったこと、オーラが見えるようになった経過などを、なるべく詳細に話して頂けませんか。

「私の生い立ちは環境がよくなかったんです。生まれて気がついた時点では家がかなり貧乏でした。どん底でしたね。三歳か四歳の頃に頭にケガをしました。鉄道線路の踏切を渡ったときにころんで頭を打ったのです。今でもその傷跡が残っています。親父が驚いて病院へ自転車でつれて行ってくれましたが、そのときの医師の顔をよく覚えています」

――お父さんのお仕事は何だったのですか。

「親父は戦争で負傷して帰ってきたもんで、これという仕事はなかったんです。東京の陸軍病院で三年間ぐらい意識がなかったそうです。シンガポールで部隊が全滅して帰ってきてから、入院して快復し、松山へ帰ってからおふくろと結婚して、職業は臨時雇いのようなものでした。しかし後頭部から弾丸が入っていたので半身不随でした。ずいぶん苦労していたようで、私の環境はよくなかったんです。

子供の頃は自分で料理を作って食べていました。そんな苦しいとき、七歳ぐらいの頃でしたか、月に対して非常な憧れとロマンを抱くようになったんです。月面に素晴らしい建築物があって、そこには地球上で見かける飛行機とは別な物体が飛んでいるのではないかと空想していました。数年前に自分の家を壊したときに、子供の頃、壁にそのような絵を描いたのが出てきました。

そして月は何で出来ているのだろうかとか、月の表側や裏側はどんな状態なのだろうかと思ったりしたものです。

小学校時代は親父とおふくろのどちらかがいつも入院していたために、寂しくて、友達もなく、勉強する意欲もなく、病院でウロウロしていました。ですから子供の頃は全く悲惨としか言いようがありませんでしたね。

小学校五年生のときに同級生で石を集めるのが好きな子がいて、水晶などを見せてもらううちに、しだいに科学的な事に関心を持つようになり、六年生のとき、相対性原理という言葉を知って、そのときから『宇宙』の問題にひかれるようになりました。生来宇宙的な物事に興味を持つような性質だったのかもしれません。子供ですからむつかしいことはわかりませんでしたが――。そして宇宙の広大さを思い浮かべると心がなごやかになるのです。

中学へ入ってからもあまり勉強は好きではなく、理科と数学はまあまあでしたが、あとはもう（笑）。

自然が好きで、城山へ行ってはボーッとしていたり、絵を描くことが大好きでして、絵で特選をもらったこともあります。それで中学時代は絵に夢中になって、画家になろうと思ったこともありました。

独学で磁気を学ぶ

中学を卒業して高校へ進学したかったのですが、親父が貧乏なもので、すぐ就職することになり、学校から推せんの形である電子部品の製造会社へ入りました。だいたいに親父は戦前、広島県の呉市で百貨店を経営していて、かなり金があったのに、戦争に行くときにそれを他人に預けて、バカ正直なものですから、それを取られてしまったんです。

それはともかく、その電子部品の会社では中学出の能力ではだめだといわれて、もっと勉強せよということで、定時制の高校に行ったんです。しかし勉強はあまり好きではなくて、さほど熱心にはやりませんでした。その学校は愛知県豊田市の学校です。昼間働いて夜間に通学したんですが、あまり勉強にはならず、そのかわりに一年ぐらいは磁気に関して勉強していました。

磁気に関して最も強い国は当時ドイツとソ連で、その関係の本を買ってきて翻訳を試みたのですが、よくわからないので、名古屋の丸善書店で磁気に関する本を購入し、みんなに教わりながら磁気を勉強したんです。

私の部署はテープレコーダーのヘッドで、磁気の発生する所なのです。その開発をやっていました。会社は豊田市のM電子工業株式会社というんです。

高校でも磁気のことは教えますが、レベルが低いので、私は自分で高度な勉強をしました。夜間はときどき望遠鏡を持ち出して宇宙をながめるんです。

会社には四年間いました。四年目にメキシコへ出張に行けという話があったんですが、そのときに会社がつぶれたんです。社長がガンで亡くなったんです。当時会社は相当な伸びを示しており、給料も良くて、ボーナスは十カ月分も出ており、私はビデオのヘッドの開発に従事しておりました。

しかし会社がつぶれてはどうにもならず、学歴も頭もないものですから、松下のような大会社へ入ることもできず、そのあと大阪へ出て二年ほどすごし、それから松山へ帰ってきたのですが、ここには職がないんです。大阪で就職した会社もつぶれました。私が行く会社は次々とつぶれるんです（笑）。

仕方がないので松山では水商売に入ったり喫茶店に勤めたりしました。そしてずいぶん難儀な目にあいながらも、一方では宇宙、原子、空を飛ぶ鳥などに関心があって、ときどき図書館で本を借りて読んでいたのです。

図書館で『生命の科学』を発見

六十年の九月だったと思います。図書館へ行ったら、宇宙コーナーにアダムスキーの本があったんです。アダムスキー全集の『宇宙哲学』と『生命の科学』です。

それを見たときにびっくりしましたね。そのとき『生命の科学』を三時間ぐらい読みまして、さらに借りて帰って、本当は二週間で返さねばいけないのですが、二カ月ぐらい借りていました。

ところがいくら読んでも内容がむつかしくて、よく理解できません。すると、ある日、店に来た人が日本GAP松山支部というのがあり、毎月月例会をやっているというのを聞いて、出席したんです。そして話を聞いたところ大変素晴らしい内容なのに感心しました。

そのとき『生命の科学』などについて基本的なことをいろいろ聞いて、それから自分で練習を始めることにしたんです。その当時は心が荒んでいました。ですから練習を始めても『こんなことができるのかな』と疑問を持っていました（笑）。

幸いなことに私が勤めていた深夜喫茶は暇な時間が多く、お客さんがいないときはマンガ本を読むか人としゃべることぐらいで、他にすることはないんです。

両手を見つめる練習を猛烈に続ける

しかし私はそんなことはせずに自分の両手を見つめる練習を続けました。『生命の科学』の第十課にある説明にしたがってやったのです。

その店はヤクザが多く来る場所で波動の悪い店でした。ガラが悪くて勤めるのがイヤでたまらなかったんです。しかし『生命の科学』を信じて練習を続ければ必ず良い結果が出ると思い、手を見つめる練習を猛烈にやりましたね。

最初はその本を読むと頭が痛くなるんです。マイナスの想念で一杯だったからでしょう。拒否反応が出たのだと思います。

その頭の痛いのを通り越した頃に、中沢さんという人と知り合って、その人がアダムスキー哲学のことをいろいろと話してくれましたので、二人で勉強を続けることにしました。

私は毎日六時間も七時間も手を見つめる練習を続けました。ただしぶっ続けに六時間も続けたという意味ではなく、暇をみてはときどき練習した時間の正味合計がそれぐらいになるということです。

すると、ある日、手を見つめていると、タバコのケムリみたいな白いモヤのようなものが出るのが見えたんです。『これは何だろうか？』と思い、目がおかしくなったのか、それともついに頭にきたのかと思ったんですが、そのときはオーラが見え始めたということに気がつかなかったからでしょう。

さらに手を見つめていますと、手から湯気が出ているんです。私は興奮して熱が出たのかと思いました（笑）」

――手を見つめる練習を始めてから、白いモヤが見え始めるまでにどれぐら

▲熱意をこめて語る坂本正廣氏

いの日数がかかりましたか。

「だいたい一週間ぐらいだったと思います。ただしそれまでに毎日六時間から七時間ぐらいは手を見つめる練習を続けました。

それまでに『生命の科学』はうんと読んでいましたし、第十課に、手を見つめる練習をすれば、やがて手の中の構造やエネルギーの運動がレントゲンで透視する以上に見えてくるという説明を読んで、よし、これは一カ月ぐらい練習をすれば必ず見えるようになると思いましたね。

これは漠然とした気持でいい加減に始めたのではなく、固い決意のもとに始めたんです。『絶対に見えるようになる！』という自信がありました。これが成功しなかったら自分は本当に救われない人間なのだという気がしていました」

オーラが見えてきた！

――手を見つめる練習を続けるときに何が見えてくると思いましたか。手の中が透視できるようになると思ったのですか。

「とにかく何かが見えてくると思いましたね。オーラのことは考えず、何かが見えると思いました。

すると最初は川の流れのように粒子が見えたんです。その粒子の流れは最初空中で見えるもんですから、タバコのケムリかなと思い、火事になったらいけないと考えて、あたりを見回しても火の元は見えません。

そのときは薄暗い所で見えたんです。明るい所では見えません。それで粒子の流れが見えたあと、薄暗い所で手を見ますと、白いボーッとしたものが立ち昇っているのが見えるんです。

あっ、見えたぞ！　これだ！　と思って喜びました。中沢さんも、これがオーラではないかと言ってくれました。それから急速に私の意識が高まってきたんです。

中沢さんは大変熱心な方で、店へ来ては約一年間二人で『生命の科学』について語り合いました。お客さんが来たときだけ注文の品を出して、あとは二人で話し合うのです。中沢さんから『生命の科学』の話を聞くのがとても楽しかったんです。

それからオーラがしだいにはっきりと見えるようになったのですが、あるとき音楽を聴いたら頭がおかしくなったんです。頭の中がグルグル回転するような気分です。そんな非常に奇妙な状態が一週間ぐらい続いてから、同じ音楽を聴いたら、すごく高揚感が起こりました。背筋がジーンとくるような高揚感です」

――どんな音楽ですか。

「ポピュラーではなくてクラシックで、ベートーベンの『田園』みたいな感じの曲です。こんな音楽がもともと好きなんです。

いまはそんな音楽を聴くと無重力状態で宇宙空間をただよっているような爽やかな状態になります。ジャズっぽい音楽はだめです。

テレパシー能力が出てくる

それから私の内部に急速な意識改革が発生しました。暗黒の中に一点の光が生じて、そこからパーッとすごい明かりが広がったような感じです。いろいろな事が瞬間的にパッパッと発生し、それまで私の内部で眠っていたものがいっせいに目を覚ましたという状態です。

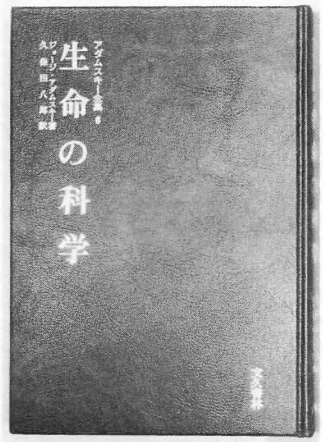
頭の中で考えなくても、いろいろな事を感じるのです。いままで考えていたことがまとまって融合されて新しい考え方になったり、自分でも考え及ばなかったことがフト浮かんできたりするんです。どんなむつかしい本でも理解できるんです。

『生命の科学』によって自分が整理されたような気がして、大学の学生さんに生物や化学の話をすると相手が驚くんです。私は生物のことは知らないんですが、考えなくても解答や説明が頭の中から出てくるんです。不思議なことでした」

――テレパシックな感知力が発達してきたのでしょうね。

「もともと勉強がきらいで、むつかしい本は読まなかったのですが、いまは違います。いろいろな分野に興味を持って本を読みます。植物、魚その他の物など――。もっと『生命の科学』をよく理解すれば、自分の意識が開発されてくると思うんです。

私は本来貧乏だったので考えることも小さかったのですが、それは自分の想念が貧乏だったと思うんです。『生命の科学』で言う〝意識〟というのは普通の人間の意識とは違って〝神〟そのもののパワーを意味しますが、人間の心をその宇宙の意識と一体化させれば、自分自身がものすごく広がると思うんです。私はその基礎段階にあるのでしょう。しかしあせってはいけないと思っています。まだ私は『生命の科学』に書いてあることを千分の一も理解していないのですから――」



◀『生命の科学』(アダムスキー全集第6巻)

色つきのオーラと虹のような色光

――いまは人間のオーラに色がついて見えますか。

「見えます。たとえば最初に黄金色に近いオーラを見たのは外人でした。その人がふと『オーラが見えますか』と聞くもので『見えます。あなたは金色のオーラです』と一言答えますと、その人はすぐ店から出て行きました。

そのあと、またその人が訪ねてきて、宗教哲学を学んでいると言いました。牧師さんのようでした。

普通の人のオーラで多いのは白っぽい色、ブルー系統で、グリーンの人は多くいません。まだ私のオーラの透視力は弱いんです。もっと見える人がいるようですね。

自分がリラックスしたときにはよく見えるんですが、緊張したときは全然見えません。

実はオーラよりももっと強いものが見えるんです。光が物体にあたって反射すると、そのスペクトルが虹になって全部見えるんです。いま先生の腕時計に光が反射している部分から、やはり虹が放射しているのが見えますよ。

二十ワットのハダカ電球が輝いているのを見ますと、その周囲に青いオーラが見え、それがしだいに赤色に変化して、そのうちに球の内部の発光する部分が見えてきます。まるで透き通った球を見るように内部が見えるんです。

このあいだは自分の手をジッと見ていましたら、手の中の血管が浮き出て見えてきました。

いまは自分で吸うタバコの味を柔らかくするために、タバコを見つめるんです。すると柔らかくなります。見つめているとタバコからパッと光が出ることがありますが、そうすると吸ってもスカスカになって味は全くありません。ですからタバコの味ぐらいは自分の思いどおりにコントロールできるんです」

――テレパシーのほうはどうです?

「テレパシーは相手が考えていることが少しずつわかるようになりました。

また何か良いことをやろうとするときに、これは実現すると思うと、その方向に動いてゆきますが、逆に悪いことだとそれをかぶることになります。だから自分が何かの野心を起こしてやろうとすると、反対に悪い結果をかぶります。その反応はすごいものです。

たとえば、むかしパチンコをかなりやったことがあります。以前は、今度はうまくゆくぞと思ったら確実にそのとおりになったものですが、いまはだめです。

このあいだお客さんから競馬の予想を頼まれたので、翌日の大穴の出るレースは何番かなと思い、目をつむっていたら『5』という数字がダブッて見えましたので、5の連勝だと教えてあげたらそのとおりでした。しかしこれを自分で買ったら、逆にひどいことになるでしょう。だからいまは自分ではやりません。むかしはパチンコに毎日行ったものですが、これもいまは面白くなくて全然やりません。『生命の科学』を学ぶと、パチンコなどはすごく次元の低いことに見えて、つまらないんです」

遠隔透視と過去世透視を行なう

――ほかの超能力、たとえば遠隔透視などはどうです?

「自分が意識による旅行でフランスへ行ったりニューヨークへ行ったらどうかなと実験をやったことがあります。そうしたら全然知らない光景がパッと目に浮かんできたんです。

そのときは最初に電球を三十分ぐらい、目が疲れるほど見ていました。そうすると残像がすごく長く残ります。目をつむっても残像が残ります。その中に映像が浮かぶんです。自分が行きたいフランスらしい光景がテレビでも見るようにボーッと見えるんです。と

きどきドーンと鮮明な画像になることもあります。カラーで見えることもありますし、白黒の場合もあります。

過去世を透視する実験もやりました。するとピラミッドが見えてきましたね。中国らしい場面が見えたこともあって、和風の服を反対に着た女性が自分の姿で映って見えました。それもはでな赤い色の、いままで見たこともないようなスタイルの服です。たぶん中国だろうと思うんですが、正確な国名はわかりません。

目をとじて電球の残像を見つめていると、その中に吸い込まれるような感じがして、そこがパッと開けたと思うと、そんな光景が展開するんです。最初は恐ろしかったですね。もう時間と空間のない、渦を巻いたブラックホールの中へ吸い込まれるような状態でした」

――電球を見つめていた時間はどれぐらいですか。

「オーラが見えるようになったあと、一カ月ぐらいは毎日電球を見つめる練習をやりました。毎日、五分か十分間ぐらい見つめるのを最低五回はやっていました。しかし最初は自分の生命が断たれるのではないかと思うほど恐ろしい思いをしました。

先にお話ししましたように、空気中に粒子の流れのようなものが見えてから二、三カ月たたないうちに、いろいろな現象がドッと発生するようになったんです。

あるとき窓ガラスに銀色の桟があるのを見ていますと、虹みたいな光が三重にも四重にも放射しているのが見えて、これはすごくきれいでした。いまは自動車のヘッドライトを見ても、光が虹になって見えますから目が痛くありません。ですから目に光がパーッとあてられても全然痛くないんです。ただし太陽はだめですね。太陽は強すぎるので一秒か二秒ぐらいしか直視できません」

手を見つめる練習がよかった

――そうすると、オーラや遠隔透視などの超能力が出るようになった直接の原因は手を見つめる練習をやったことにあるわけですか。

「そうです。手を見つめる練習が最大の原因になっています。しかもそれを信じて、『必ず出来る！』という強烈な信念を持ったのがよかったと思います。これしかないですね」

――手を見つめる練習を始めてから色のオーラがはっきり見えるようになるまでの期間はどれぐらいですか。

「よく覚えていませんが、一カ月はかからなかったと思います。日記帳に記録しておけばよかったのでしょうが、最初に白いモヤのようなものが見え始めたのはかなり早く、それから急速に色のついたオーラがしだいに見えるようになりました」

『生命の科学』を毎日六時間以上読む

――『生命の科学』も最初は一日に六時間ぐらい読んだそうですね。

「ええ、六時間以上読んでいますよ。喫茶店の仕事が十二時間勤務で、そのうち実際の仕事は正味三時間ぐらいですから、あとは店番で座っているだけです。それで仕事の合間に読んだのです。ですから六時間ぶっ通しに読んだのではなく、仕事の合間に少しずつ読んだ時間を合計して六時間またはそれ以上になるという意味です。

いま考えてみますと、私が深夜喫茶で働くようになったのも、何かの理由があったのだろうという気がします。自分がこの方面の自己訓練をするために何かの〝力〟が私をそこへ引き入れたのかもしれません。

当時、深夜喫茶ともう一つ別な仕事もやっていましたので、一日の睡眠時間は三時間ぐらいでした。二種類の仕事を昼夜交替でやっていたんです。食事も極力減らしていました。これがよかったようにも思います。

しかしいまはもう深夜喫茶の仕事をやめて、もう一種類のバイトでやっていた仕事が本職になっています。その仕事も初めは面白くない部署についていましたが、もっと良い部署に変わりたいと思い続けていたら、本当にそのとおりになりました。

偉大な信念の力

私は『人間は信念のとおりの人間になる』というアダムスキーの言葉は本当に正しいと思いますね。信念の力は偉大です。

ですからこの問題は自分だけのものにせずに、もっと広めて多くの人々に良い意味での能力を発揮するような人がふえるとよいと思っています。

私の会社は身体障害者を救済する関係の会社で、普通の営利会社とは違うんです。ですから仕事のやり甲斐があります。社長も黄金色に近い立派なオーラを発する人で、良い会社に入ったと思って喜んでいます。

私はいったんどん底に落ち込んだのですが、そういう時期に『生命の科学』を見つけたのが良かったのかもしれません。恵まれているときに『生命の科学』を読んでも熱がこもらなかったでしょう。むしろ金儲けに走っていたと思います。

もう何をやってもだめだという絶望的なときにアダムスキーの本にふれたからこそ、がむしゃらにやれたのだと考えています。毎日三時間ぐらいしか寝ないで武者修行みたいにやったために能力が開発できたのでしょう。

しかし一方では必ず超能力が開発できるのだという強烈な信念がありまし

た」

リラックスして練習するのがよい

――目の視力が落ちるということはなかったのですか。

「そんなことはありません。少しは目が疲れましたがね。風呂に入ってリラックスしながら練習するのが最高によいのです。風呂場に二十ワットの電球がありますので、それをジッと見つめて、それからネジの所を見ますと色がズーッと出てくるんです。それから手を見たりします。

だから毎日五分とか十分とかの練習どころではないんです。時間的余裕がある限り、瞬間瞬間に手を見つめたりしていました。ほかのことを考えてもいいんです。とにかく手を見るんです。草木でも見つめていると、しだいにオーラが見えてきます。

山などを見ますと、すごいですね。オーラというよりも力強い生命の息吹きみたいな波動が渦巻いているように見えます」

――手を見つめる練習では手の甲を見たのですか、それとも掌(てのひら)のほうですか。

「私は手の甲を上にして指の間を見るようにしました。甲を見ると血管が浮き上がって見えてきますが、これはあとから出てきた能力です。

女性のはいている下着まで透視したこともあります。その色まで見えるんですが、いまはイヤらしいから見ないことにしています。

女性が持っているバッグの中まで見えることもあります。あるとき十六歳の女の子がバッグの中にコンドームを入れているのが見えました。ピンクのコンドームです。

『あんた、ピンクのコンドームを入れているが、どうしたの?』と聞くと、『えっ、いつ見たの?』といって相手が驚いていました。

私の意識(普通にいう意識)が何かに興味を持つと、そのほうに集中するんです。いまはそんな興味がありませんから、イヤらしい物は見えません。そんなことよりも、うんと高いレベルに自分を持ってゆこうと一生懸命になっています。

私が喫茶店をやめる半年ぐらい前に店へ来た婦人のお客さんの体を見つめていたら、その人の体内に子宮筋腫のタマが三つほど見えたんです。内臓が荒れて胃が悪いこともわかりました。

まず一つのことを理解する

私の考えでは、何か一つの物事が理解できなくて全部が理解できるはずはない。一つの物事がわかれば全部わかってくるということなのです。何か一つの物事に成功してそれを増幅すれば全部がわかってくると思うんです。

だから地球のレベルが低いのはあたりまえです。だれもが一つの物事もわかっていないんです。闇の中をはいずり回っているのですが、それは自分の意識がない状態ですよ。

私は一つの物事を知って、それから多くの事柄が少しずつわかってきました。

たとえばUFOのエンジンにしてもパッとわかりましたね。なるほど、こういうシステムなのかと」

――どういうシステムです?

「円盤の底に三個の球型コンデンサーがあるでしょう。あれがないとエンジンは回らない。あのエンジンはたぶん単極磁気プラス一つのエネルギーを入れて永久的に回転するもので、いまやっている超電導体を合わせたようなものだと思います。その高度のレベルのものだと思いますね。地球でもいずれ超電導体の永久モーターが出来るでしょう。まだセラミックが開発されていませんがね」

――円盤を見たことがありますか。

「一回だけ見たことがあります。二十年ぐらい前の十六歳の頃です。そのとき望遠鏡で空を四人で見ていたんですが、あのような奇妙な動き方をする物体は地球のものではないと思いました。名古屋の近くの山の中です。防衛庁から出しているデータを発表する雑誌がありますが、それは四十一年頃で、それを見たときに、UFOの飛んだ航跡について書いてあり、私たちが見た物体がちょうどそれに該当するらしいので、あれは確実にUFOに間違いないと確信しました。

近頃はUFOを見ません。大宇宙の無限の空間に思いをめぐらせながら、われわれから最も近い星雲のアンドロメダ星雲にも、すごい発達をとげた人類がいるのだろうと考えて、そのアンドロメダの方向をジーッと見ていますと、その星雲の渦巻状がはっきりと見えてくるんです。ボヤけたり鮮明になったり、またボヤけたり鮮明になったりするんです。

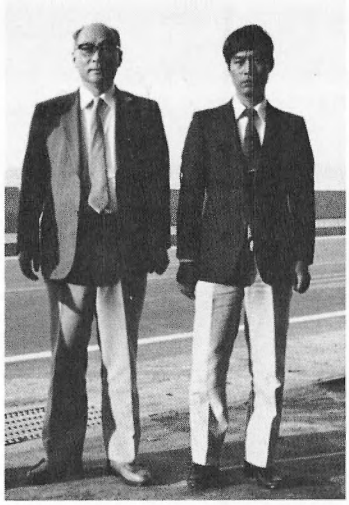
その星雲の中までは入って行けません。渦巻状が見えるだけです。生命体の動きがあるような感じです。そこには科学や精神が想像を絶して進歩している惑星もあるでしょう。それからみれば今頃『生命の科学』で学んでいる私たちのレベルはまだはるかに低いものなのかもしれません」

――スペース・ピープルらしい人に会ったことがありますか。

「私は会っていません」

――オーラでわかるでしょう?

「いや、まだそんなすごいオーラを出している人に出会ったことはありませんですね。以前、私のいた店に外人女性が来たことがありますが、その人は光り輝くような素晴らしいオーラでした。しかしアメリカのカリフォルニアの生まれだと言っていましたから、あれは違うでしょう。



◀坂本氏(右)と編者

その店ではゲーム機で一晩に五十万円も金を取られる人がいるんです。怒り狂っているその人のオーラを見ると、頭のてっぺんから赤い炎のようなものが渦を巻いてパーッと出ていました。その人が店に来なくなったもんで、どうしたのかと思って目をとじますと、もうこの世にいないことがわかりました。

ある人のイメージを描いて目をつぶっていますと、その人がどこにいて何をしているかがわかるんです。ただし意識を集中させますから、あまりやると疲れます」

――未来予知についてはどうですか。たとえば東京大地震の発生などは？

「未来を予知することはあまり好きではないんです。他人の未来の運命などもなんとなくわかりますので、この人はもうまもなく死ぬんだなという気がしますと、本当にそのとおりになるんです。人が死ぬのを予知するというのは怖いですよ。

東京大地震は発生しないと思いますが、暴動みたいなものがいつか起こるような気がしますね。世界の核戦争も避けられないと思いますが、日本は大丈夫だと思います。また日本列島が海に沈むこともないでしょう」

熱意のこもる坂本さんの興味深い話は長時間にわたって続いたが、『生命の科学』を徹底的に読み、超能力は必ず開発できるという確固たる信念をもって、毎日最低二時間は手を見つめる練習を続けるならば、だれでも必ず成功すると何度も力説するのだった。

幼少時から数奇な運命をたどり、三十歳なかばで素晴らしい超能力者になった氏の実話こそ、アダムスキー哲学の正しさと偉大さをこよなく立証するものだろう。

坂本さんの体験談で重要な点が三つある。一つは氏が逆境にもかかわらず子供の頃から宇宙に対する憧れを抱いていたという点だ。これはおそらく過去世から宇宙的なカルマを持って今生に転生してきたことを意味するのではないだろうか。

したがって、次に考えられるのは、氏の超能力開発に至る途上でスペース・ピープルがそれとなく指導または援助の手をさしのべた？という点である。十二時間勤務の深夜喫茶に入ったのも遇然とは思えない。何かの導きの手によって、読書が毎日正味六、七時間もできるような環境に引き寄せられたとも考えられるのだ。こんな仕事はざらにあるものではない。一見どん底のように見えながらも実際は最高の職場であったといえるだろう。

もちろん時間がいかに与えられても本人が真剣にヤル気を起こして猛烈な読書と手を見つめる練習を続けなければ成果はあがらない。したがって究極には坂本さん自身の強烈な信念と実行力がものをいっているのである。常人のまねできない荒行を徹底的に遂行したのだ。

三番目に重要なのは「一つの事が理解できれば、すべてがわかってくる」という氏の言葉である。これはテレパシックな能力が一つでも出てくれば、他の超能力が続々と出てくるという意味にもつながるだろう。氏の場合は手を見つめることによって、まず白いモヤのようなものが見え始め、続いて色のついたオーラの透視、遠隔透視、テレパシーなどの能力がいっせいに開花した。だから或るレベルを突破すれば広い世界が開けるという意味の真理の言葉といえるものだ。

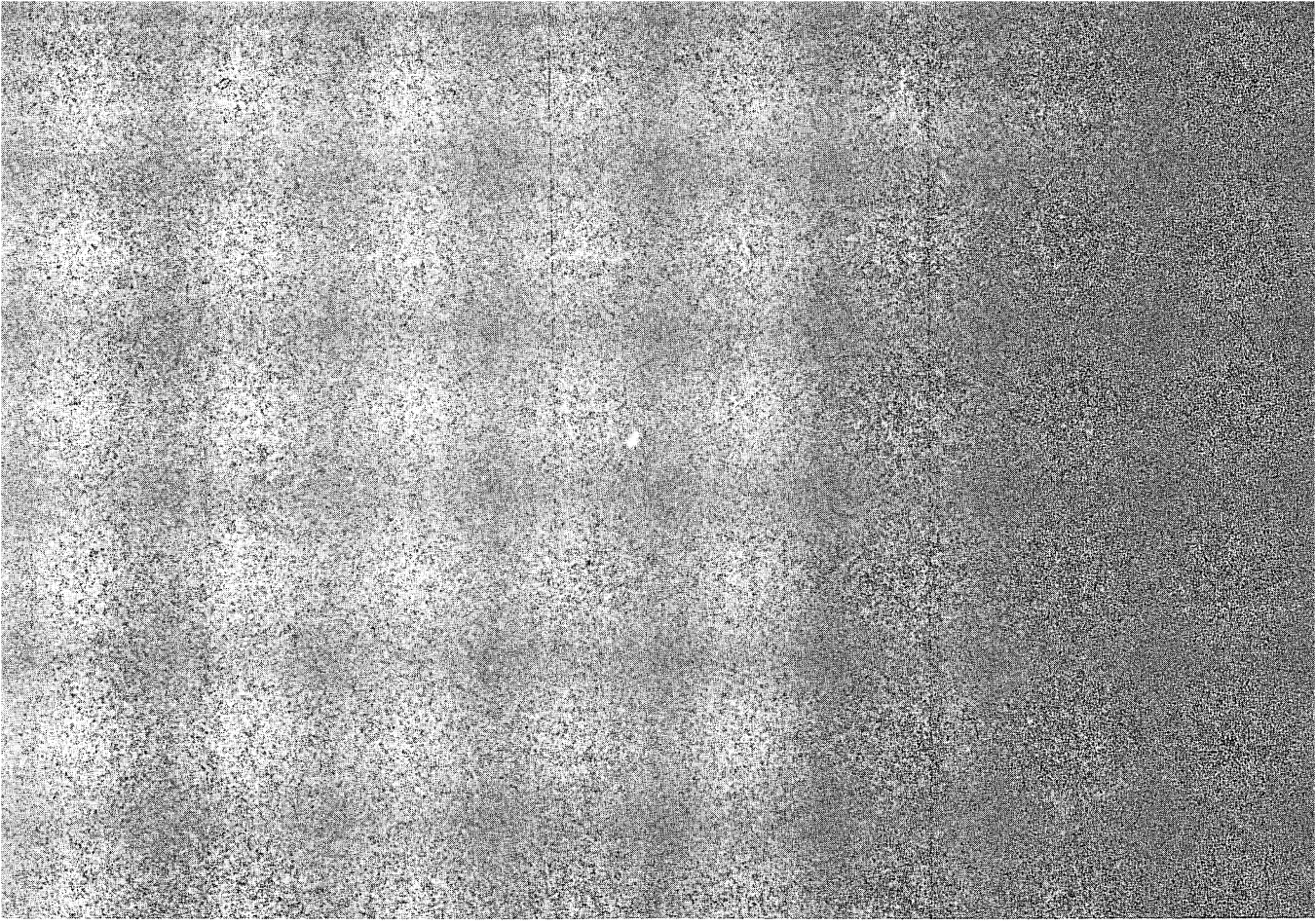
これは外国語学習の場合にもあてはまる。英会話なども最初、自分が英語で話すことのできる小さな世界をまず作ってしまうようにする。簡単なおしゃべりでよいから自分だけの〝小さな英語圏〟を築くのだ。これを可能にすると、あとは俄然、何でもしゃべれるという広い世界が展開する。超能力開発もこれと同様である。最初から多くを望まぬほうがよいだろう。

坂本さんは超能力を生かして他人を助けている。本物の超能力者だ。

近来超能力関係の書物が氾濫し、第二次の超能力ブームが静かに発生しつつあるようだ。これは歓迎すべき傾向だが、心霊的な危険な方法を説いた本もあるから注意を要する。

また小手先だけの超能力をつけることに汲々として、大宇宙の創造パワーとの一体感を全く起こすことなしに、ただ手さえ見ていればよいというものでもないだろう。アダムスキーの『生命の科学』や『テレパシー開発法』は、たんなる超能力開発指導書ではなくて、人間と大宇宙の魂（アダムスキーはこれを「宇宙の意識」といっている）との一体のフィーリングを起こし、宇宙的感覚を高度に発達させる方法を述べたもので、われわれはこれらを総称してアダムスキー哲学と呼んでいるが、哲学というよりも自己開発の書といってよいものである。

これを実践して自己のフィーリングを高揚させるのは並大抵ではない。猛烈な忍耐力と不屈の信念を要するのだが、歯をくいしばって続ければ、それなりの成果はあるだろう。カルマの法則（原因と結果の法則）はいかなる場合でも厳然と働くからである。



A Cigar-Shaped UFO Appears over Okayama

岡山県に出現した葉巻型UFO

昨年6月24日の夕方，仕事の帰りに岡山県浅口郡鴨方町をドライブ中の斉藤俊徳氏（39歳，広島県福山市在住）は，瑤照山の展望台に登り，台上から空の美しい雲を見ていた6時52分頃，突然左前方から葉巻型の物体が空中を飛ぶのを見た。すぐに手持ちのカメラで撮影。その物体が右手南方の雲間に消えようとするとき，もう1枚撮った。

物体は両先端のとがった円筒形。銀色で金属性と思われる表面があちこち太陽光を反射して光り，中央横1列に窓状のものが並んでいた。見かけ上の大きさは太陽の2〜3倍。翼はなく，無音で直線状に斜めに移動していた。目撃時間は約5分間という。見終わった午後6時59分頃，頭上を飛行機が通り，翼があるのを見て，「しまった。さっきのはUFOだったかもしれない」と思ったという。

斉藤氏は現代美術作家，大学講師，会社社長の肩書きを持つ人。翌日，氏は運輸省大阪航空局岡山出張所に連絡し，当時UFOと誤認する飛行物体が飛んでいなかったことを確認している。氏は日本GAP会員。

A Helmet-Type UFO Flying over a Rice Field

超低空で飛んだ鉄カブト型UFO

阿武隈山系のUFO基地から来た?

清水　正

一昨年（昭和六十一年）八月十五日より十七日まで日本GAP山形・仙台両支部主催で、福島市の岩瀬書店ギャラリーにて第一回のUFO写真展を開催した。

準備期間の短い状態であったが、福島日報、読売、河北新報などに紹介記事が掲載され、テレビ、ラジオでも放送された。地方都市としては三日間で入場者三百五十名と少なめだったけれども、東北地方最初の写真展が開かれたことは意義深いことであったと思う。

会場には多くのカルマのある人が見えて、アダムスキー問題に深い関心をもって本誌ユーコンやアダムスキー全集を購入した人が少なくなく、また自分のUFO目撃体験を話す人も多く見えたが、そのなかに、黒っぽい円盤が超低空で眼前を飛ぶのを二十年前に見たという人がいたので紹介したい。

▼写真上は福島市の岩瀬ギャラリーにおけるUFO写真展。下は目撃体験を語る丹治さん（左手前）。

鉄カブト型円盤が出現

この方は市内黒岩の丹治信太郎さん（五十七歳）で、現在は不動産業だが当時は農業をやっておられた。

昭和四十一年八月三日、午後三時頃、暑い日盛りの中を丹治さんが自転車に乗って自宅付近をゆっくり走っていたとき、突然ビュルビュルという音が空中から聞こえてきた。

ひょいと空を見上げると、左の方向から田んぼの上空を約十メートルの高度で、鉄カブト（旧日本陸軍のヘルメット）型の黒っぽい物体が左方から飛んでくる。縁の下部にはオレンジ色の炎のようなものが出ており、上部には窓らしいものが二、三見える。

驚いた丹治さんが自転車を止めて見つめると、物体は時速約四十キロメートルのスピードで水平に右の方へ飛び、約五百メートル移動してから、杉林の所の農家の上で急に見えなくなった。

林の向こう側へ行って隠れたのか、それとも物体自体が消滅したのかはわからない。とにかく瞬間的にパッと消えたという。数十秒間の出来事だった。

呆然として立ちすくんだ丹治さんは、当時、周囲は一面の田んぼで、見たのは一人だけだが、べつだん恐怖心は起こらなかったけれども、不思議な物を見たという思いにかられて首をひねるだけだった。

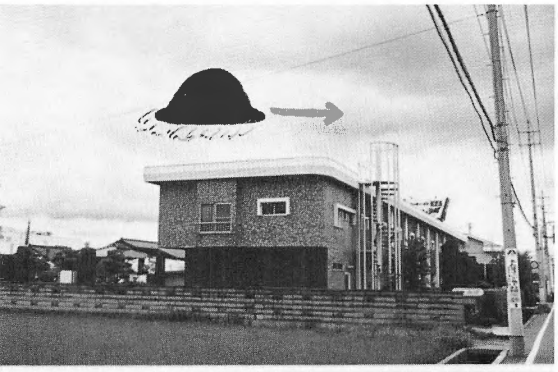
物体は見かけ上、直径二メートル、短い縁が周囲についており、鉄カブトにそっくり。色は茶褐色の金属製。

丹治さんはこの他にも若い頃、自宅から二キロ離れた山中に、夜間、光る物体が二個いるのを見たことがある。あまり動かず、フワフワして浮かんでいるのを五、六秒見た。

また別な山でもオレンジ色の大きな光体が上昇するのを目撃したという。

ずっと以前、阿武隈山系の一部にUFOの基地があるらしいという噂が流れていたと丹治さんは語った。現在どうなのかは不明である。

▼写真上は出現した鉄カブト型円盤を筆者が現地の写真に描き込んだもの。下の写真のように飛んで行った。



The Figure "8" Appears in the Sky

空中に「8」の字が出現

スペース・ピープルからのサイン?

安藤澄雄

昭和六十二年十一月一日に開かれた山形・仙台合同支部大会に出席するため、私は清水正氏（埼玉）の運転する車で、越崎裕子さん（東京）と三人で前日の十月三十一日午後三時頃、山形県米沢市にある清水氏の実家に到着した。今夜はここに泊めていただき、翌日天童市の会場へ向かう計画だ。

清水氏のご両親がニコニコと迎えて下さった。四年前にも妻を連れて伺ったことがあるが、あの時と変わりない誠実で温かみのあるお二人だった。

こたつで一時間ばかり談笑した後、清水氏が米沢市内を案内して下さるというので三人で出かけた。城下町の美しい街並や公園などを見学し、だんだん薄暗くなり始めた五時頃、清水氏が米沢に住んでおられた頃に奥さんと二人で度々UFO観測に訪れたという御成山の裏手の中腹に行ってみた。この山は米沢市の南西部に位置し、以前、天皇陛下がおいでになったのでこの名前がつけられたという。

まず光体が出現

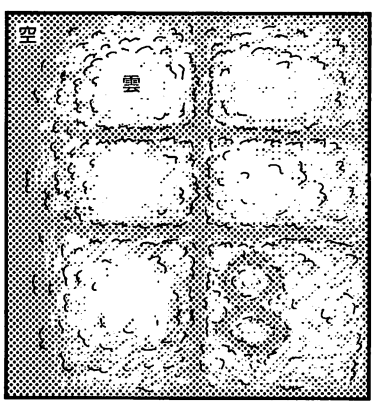
星が輝き始め、東京では見られなかった美しい星空が展開していく。晩秋の米沢の冷気は厳しいが、サンルーフ式の車なので暖房のきいた車内から空を見上げていられる。飛行機が向こうから手前に（東から西に）向かって光を点滅させながら飛んでいる。

突然視界の左（北）にオレンジ色の明るい光体が現れた。飛行機と同じくらいのスピードで右（南）へ向かって移動している。飛行機より少し明るいし、全く点滅していないのでもしかしてUFOでは?とドキドキする。すぐに車から出て小型双眼鏡をのぞいてみるが飛行機ではないようだ。しかしまっすぐ同じスピードで飛んでいるので人工衛星かもしれないと三人で話し合ったがよくわからない。五時半頃であった。

続いて「8」の字が——

このあと家へ戻り、夕食をご馳走になりながら十時過ぎまで談笑していたが、そろそろ風呂に入って寝ようということになった。しかしその前に庭に出て三人で秋の夜空を見上げた。息が白くなるほど寒かったが、魅惑的な星空はそれすら忘れさせてくれる。越崎さんは星の名前をよく知っていて、あれこれと説明してくれる。天の川をこんなにはっきり見るのは何年ぶりだろうか。あそこでもたくさんの人々がいろんな生き方をしているのだろうと思うと自分が宇宙空間のまっただ中にいることを実感する。

ふと振り返って西の空を見上げると不思議な雲があるのに気づいた。図のように縦に一本、横に二本の直線の割れ目が入っていて、バックの暗い空が見えている。三月頃から毎日三十分間ぐらい空を見るのが習慣となっていた私は、これはどうも普通の雲ではないという感じがしたので、後ろの清水氏と越崎さんに「何だか不思議な雲がありますよ」と声をかけた。風も弱く、雲はあまり動かない。清水氏が「本当だ。面白いですね。〝8〟と書いてあるみたいですね」と言う。私は直線部にばかり気をとられて気付かなかったが、右下のほうに確かに8のような線も入っていた。二、三分見ていたが、やがて形が崩れてきたので気になりながらも家の中に戻り、翌日の大会に備えて体を休めることにした。



さて、私は前者のオレンジ色の物体や後者の雲を無理矢理UFOと結びつけて考えようというのではない。むしろ冷静な科学的態度で分析すれば前者は人工衛星の可能性が大きいし、後者の雲にしてみてもあの直線の割れ目は単なる自然現象の一つであると考えるほうが無難かもしれないし、私自身、こんな報告をして〝偏狂的なUFO愛好者〟とみなされるのは歓迎しない。

しかし気になるだけの理由があるのである。一つはこの大会のほぼ一カ月ぐらい前から私と妻は毎晩スペース・ピープルに向かって「山形の大会が素晴らしいものになりますように見守っていて下さい。私たちも頑張ります」と語りかけていたことである。このように送念していたのは私たちだけではないと思うが、とにかくテレパシーの達人である彼らが何も反応を示さないとは考えにくい。加えてもう一つ。実は昭和六十二年八月のGAP海外旅行において私はデザートセンターでUFOを目撃していたことが最近判明したのだが（当時は確信が持てなかったが後に春川氏の確証が得られた）、その時のUFOから得られたフィーリングと米沢の光体と雲の放つフィーリングがよく似ていたのである。結論を急ぐ気はないが、もしかしたらこの二つの出来事が彼らからの〝返事〟だったのかもしれないという気がしている。

American Wonder Lands

アメリカの不思議な土地

重力が変わる場所と超能力が出てくる大地の物語

●水野和彦〈ワイズマン社長〉

重力の方向が変わる場所の地下にUFOが埋められている？　不思議な場所を訪れた筆者が語る興味深い体験と単極磁気のナゾ。

ミステリー・スポット

アメリカ太平洋岸の美しい大都市サンフランシスコからバスで約二時間ほど海岸沿いに南下した海岸町サンタクルーズ市の郊外に、重力が変化する不思議な場所がある。付近は森林に囲まれた静かな保養地で、キャンプ村にもなっている。

この場所が発見された動機は次のとおりである。今から三十年ほど前、現在この土地の地主がこの丘陵地一帯を購入したとき、土地の測量を行なった。すると、丘の斜面のある場所でコンパスの針が異常な動きをするのを発見した。付近には強い磁性を帯びた物や鉄線などは全く見あたらず、また地表の岩石に鉄分が多く含まれているというわけでもなく、地下に鉄鉱石などの鉱脈が存在する地域でもないことから、「なにか変だナ」ということで、その丘を調べているうちに、調査員が「体がある一定の方向に引っぱられる」という異常な報告をしたので、それが丘の重力異常の発見のきっかけとなったのである。

私が現地へ行ったのは昭和六十二年十一月十五日である。前日サンフランシスコの空港へ着いて、翌日早朝に起床、グレイハウンドバスに乗り、七時にターミナルを出発、約二時間少々で現地へ着いた。

サンタクルーズはさほど大きな町ではなく、人口は三万人、こじんまりした町で、大きな建物はなく、のんびりした静かなリゾート地域である。

私の会社の部下であるイギリス人、スティーブ・マリニュー君が同行して二人でタクシーに乗り、丘陵地帯を登って行った。

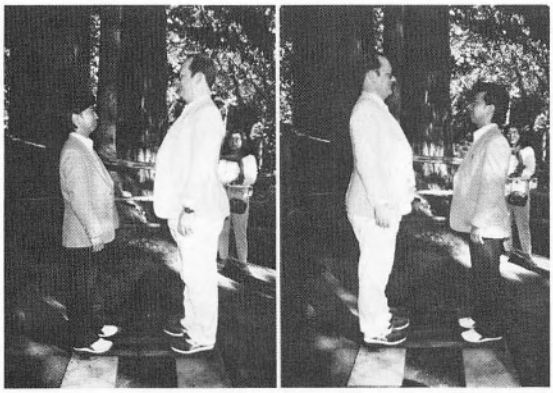
森林のあいだの空き地に「ミステリー・スポット入口」と書いた看板がある。この奥に古びた一軒の小屋が建っており、この入口で入場料一ドルを払って内部へ入るのだが、ここには赤い横縞のシャツを着たガイドさんがいて、見学者に説明をしている。

まず長さ約五十センチの木の板が水平に二枚並べてあり、この上に二人の人間が立ってみる。それ以前にガイドさんが板の上に水準器をおいて、間違いなく水平であることを実証する。

ここは空間がゆがむといわれている場所で、板の上に立った二人の人間が交互に位置を変えて相対し、それを横から写真に撮ると、両人の位置を逆にするたびに身長が異なって写るという異変が生じるのである。

私はスティーブ君と向かい合って立った。両方の身長は二十センチぐらいの差があるけれども、次の**写真**では明らかに差が生じている。左の**写真**（サービス判）を物差しで計ってみると、私が一ミリ縮んでおり、彼が一ミリ伸びていることがわかる。ここがゼロポイントであり、ここを境にしてマイナスとプラスの両方に分かれるので、ここに板をおいたのだとガイドさんが言っていた。つまり縮むほうと伸びるほうがここで分かれるというわけである。

これは写真で見るよりも実際に現地へ行かないと実感できないだろう。二人で相対して向かい合い、次に位置を交替すると、ガクッとして驚く。自分の目の高さが狂ったように感じるからである。これは人間の身長に異変が生じるのではなく、空間中に伸び縮みがするのである。



◀空間がゆがむゼロ地点。右の写真よりも左の写真が二人の身長に差が出たことを示している。

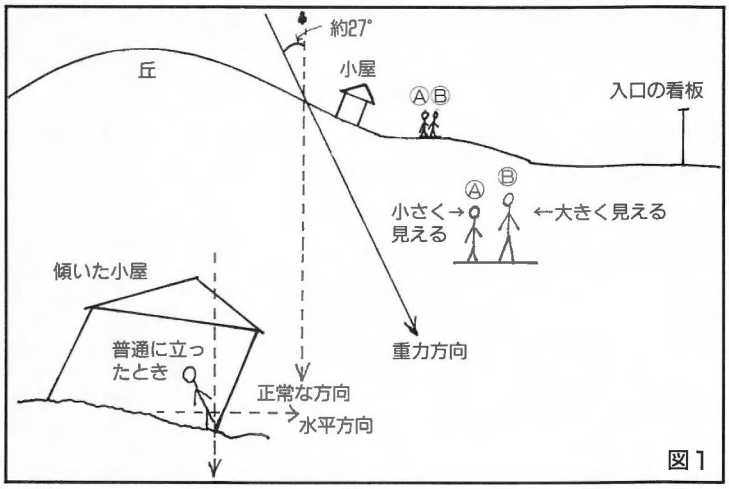


図1

生じるのである。

われわれは相対性理論で空間が曲がっていると書いてあるのを読んで、頭の中ではそれがわかっているつもりでも、実際の空間にはやはりゆがみがあることがなかなか感じられない。空間とは目に見えるとおりの不変のもので、それが絶対だと思っているが、本当はそうではなくて相対的なものだということがここへ来れば実感できるのだ。大きく言えば自然観や世界観が変わるのである。

さて、ここにある小屋は二十数年前に最初はまっすぐに建てられた。それ以前に土地を測量した人々の一人が、「うしろへ引っぱられるような感じがする」と言いだした。それで「ここはおかしい」と気づいて重力の異常が発見されたのである。そして建っていた小屋もしだいにゆがんできた。これは異常な重力によって引っぱられて傾いてきたのだ（**図1**）。

たしかに入口（ゲート）を通って丘の斜面を登って行くと、なにかおかしな感覚にとらわれる。自分が地表面に対して、いつもより前かがみに立っているように感じるのである。

小屋の中に入ると、しばらく頭がクラクラする。まっすぐに立とうとするとグイと丘の頂上方向に引っぱり倒されるような感じがするためだ。

異常重力に対して自然に体をまかせようとすると（心理的に）前にバタッと倒れるような恐怖心に襲われるので、あわてて体を元の位置にもどそうとすると、今度はまた前に倒れそうになる——という具合で、生理的、心理的にこの重力異常に慣れるまで心と体のアンバランスで頭がパンク状態になる。

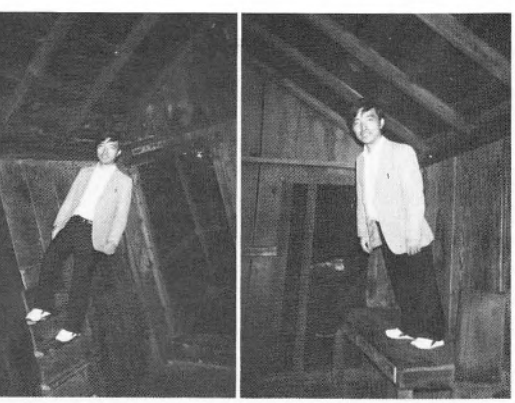
十分間もこの小屋の中にいると首のうしろと背すじが痛くなる。

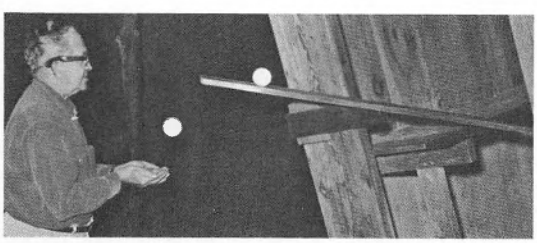
小屋の中に吊り下げてある重り（おも）の角度を測ったら、約二十七度ぐらいあった＝**写真**。その分だけ普通の重力の方向から傾いている。その方向プラス小屋が傾いている方向とでダブルから、前記のように最初入って行ったときに大変なことになる。しばらくして重力の方向がこんなふうに約三十度傾いているのだということに気がついて、頭の中が整理されると落ち着いてくる。次の**写真**は私が立っているのを撮ったものだが、もう慣れてしまったから笑っているのだ。

ゴルフボールがある。これを**写真**のように板の上におくと、見かけ上高い方の端へむかってゴロゴロころがって行き、端から落ちる。なんだかボールが引っぱられて高い方向にころがるように見えるのだ。これも異常重力の影響である。ボールのスピードは早い。

小屋の中にいると奇妙な感覚が続くけれども、生理的な変化は起こらない。べつだん内臓がグルグル踊りだすわけではない。だから異常な重力の強さ自体は変わっていないことになる。

とにかく読者に一度行って体験されることをすすめたい。





▲板の上の右端に置いたボールが左の高い方向へころがって行き，左端から落ちる。

円盤が埋められている？

この地下に円盤（ＵＦＯ）が埋まっていると、アメリカのある透視能力者が言ったという話がある。かなり大き

な機体が長いあいだ地中深く埋まっているというのだ。これが何かのエネルギーを出しているので、通常の重力がそのエネルギーの干渉によって一部分曲がっているのだという。これが正しいかどうかはわからないが、地球の重力場の一部が自然に曲がるとは考えられない。やはりUFO埋没説が妥当のようだ。なぜなら異常重力は入口のゲートから丘の頂上あたりまでの斜面一帯の限られた地域であるからだ。

埋まっているとすると、その機体は傾いていると考えられる。墜落したのか、それとも意図的に埋めたのかはわからないが、いずれにしても斜めに落ちたのではないだろうか。

これはUFOが重力コントロールの方法で飛ぶと考えれば見当がつく。UFOは反重力、つまり地球の重力をゼロにして飛ぶといわれている。そのUFOの下部にマイナスの場を作れば地球に反発して浮かび上がるというのだが、水平方向にむかって垂直に重力をコントロールするエネルギーを出していると仮定すると、図2のようにUFOが斜めになって埋まっているために、重力コントロールのエネルギーが地表に対して傾いて出てくることになる。そこで小屋の中では二十五度傾いた状態で引っぱられることになる。

しかしこれは私の仮説であって断言はできないけれども、直感的にそういう可能性もあるだろうと感じたのである。

UFOがよく出現するのは単極磁気の密度の高い土地の上空であると思われる。そのような土地をヴォーテックス（渦動）が高い場所という。これは超能力者がよく感知する場所でもある。

超能力を出させるセドナの大地

こうした土地の一つにアリゾナ州のセドナがある。私がここを訪れたのは十一月二十三日。フェニックス空港よりセスナ機で行ってみた。北のグランドキャニオンの方向へ四十五分間飛び、その中間地点にある。

ここはミニ・グランドキャニオンというべき巨大な奇岩がつらなった壮大な景観を呈している。もとはインディアンが住んでいた土地で、彼らもこの大自然を崇敬していた。フェニックスから白い大地が広がっているが、セドナへ行くと白い地面が急に赤土に変わる。この赤土が古くからの地層である。

この土地にはエネルギーの強い場所が四個所ある。超能力者や敏感な人がこれらの場所へ沢山来て、瞑想にふけったりする。すると超能力のパワーが強化されるというのだ。

まずエアーポートのすぐ近くにそびえるエアーポートメサという航空母艦を思わせる平らな大岩山。アダムスキー型円盤そっくりのベルロック。ボイントンキャニオン。それにコートロッカーズの四個所である。

私はガイドさんの案内でジープに乗って各場所をまわってみた。同行のスティーブ君によれば、最もエネルギーを強く感じるのはボイントン・キャニオンだという。電磁力が強いというのだ。そこには石を並べたストーンサークルが作ってある。ここへ人々がやってきて瞑想にふけるのだ。ベルロックの下の地面にもやはりストーンサークルが作ってある。

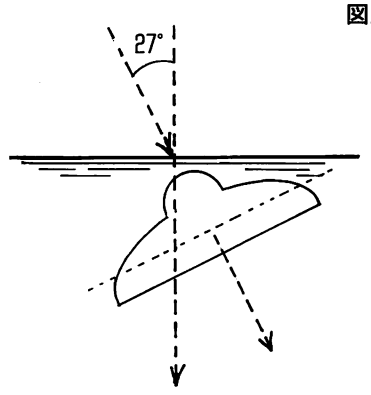
ここへ敏感な人が来るとエネルギーを感じるのだが、鈍感な人は感じない。このストーンサークルは大地のエネルギーを強化する作用があるという。この周囲へ大勢の人が集まって瞑想会を開いたりする。全米から来るし、ヨーロッパからも来るという。

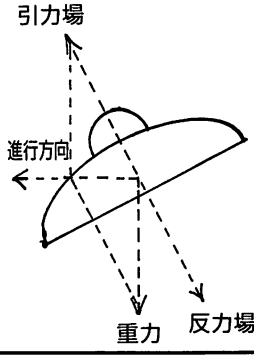
ここへ来た私は、何かの力が体にワッと入ってくるような感じがした。スティーブ君はテレパシックな感覚を持たぬ平均的人間だが、それでもボイン

図2

ミステリー・スポットの地下のUFO▶

水平飛行をして落ちたか，またはわざと埋めたか？この図のように頂上部が垂直方向に対して約27°傾いている。そのために小屋の中にいる人物は普通に立ったつもりでも，そばから見ると傾いて立っているように見える。





◀斜めになって飛ぶ円盤

円盤は重力場を人工的に作り出している。そのため円盤内の人間にも円盤にかかる重力と同じものが働いているので人間は加速度を感じない。これは自転と公転を続ける地球上に住む人間が，惑星の動きを感じないのと同じ原理。円盤の外壁には電磁場シールドが施してある。

トン・キャニオンのストーンサークルへ来たときは、やはり何か異様な感覚が生じたと言っていた。

電気的なものを感じるのはベルロックで、ここには電気石がある。ここは人間を〝目覚めさせる〟ような場所だ。したがってここで瞑想すると超能力が開発できるかもしれない。ビリビリとくるような電気そのものではないが、たしかに〝電気的〟なエネルギーを感じるのである。肉体的にも精神的にも感じるのだ。ここに一年もいたら鈍感な人でもかなりの超能力者になるかもしれない。

いま最も話題になっているのはアダムスキー型円盤に似たベルロック（吊り鐘型岩山）である。なぜかというと、ここへ来て超能力が一挙に出てきた人が多いからだ。

ここはリゾート地でもあり、ロッジやホテルもあるし、安いから、一カ月ぐらい滞在して、毎日ここへ来ては瞑想を続けると、敏感な人なら相当な超能力者になるだろう。私もここに長くいると、かなりの超能力者になるかもしれない。一度ここへ来た人は病みつきになって何度も来るという。空気は澄んで水のおいしい大自然のまっただ中であるから健康にもよい。

電気的なエネルギーを発する場所よりも磁気的エネルギーを出す場所の方が〝やさしい〟感じがする。電気的な方は活力エネルギーを出すのでアメリカ人はこれを好み、日本人は磁気エネルギーの場所を好むらしい。こちらは心を落ち着かせて静寂な境地に入るという日本的なフィーリングを起こす。

結局、ここは単極磁気が作用してそのようなエネルギーを放射するのだと考えられるのである。人間の超能力現象、たとえばテレパシーや遠隔透視なども単極磁気の作用によるものと思われる。

私がここに立って瞑想していたとき、昔のアステカやマヤ文明のようなビジョンが頭の中に浮かんできた。ひとりでに見えてくるのだ。すごく気持がよい。古代の人々が石を積み上げて何かを建造している光景である。まるで立体テレビを見ているようだった。

空間を曲げて距離を短縮？

アインシュタインは一般相対性理論において、重力を「四次元時空間の曲がり」によって引き起こされる力として説明した。これからみて重力や電磁気力は二物体間の距離rの自乗（r^2）に逆比例した大きさを持つことになる。

そこで短時間宇宙旅行の理論として次のようになる。

地球大気圏の宇宙船と金星との距離をrとし、その宇宙船と金星との間に働く重力をgとすると、$g=\frac{1}{r^2}$の関係式が成り立つ。この関係式は絶対不変のものであるから、もし宇宙船内部に特定の天体との重力を制御できる機械を積み込み、金星と宇宙船に働く重力を四倍に増加させるような重力異常を発生させたとすると（ただし宇宙船と金星との正常な重力gを1とすると）、$g=\frac{1}{r_0}$となり、$g=\frac{1}{2}$となる（r_0はその重力異常のもとにおける宇宙船と金星との距離）。つまり重力を四倍にすると二点間の距離は$\frac{1}{2}$になる。

そこで宇宙船と金星の四次元時空間の曲がり率（曲率）が変化し、距離が半分になる。この重力コントロールを八倍、十六倍、三十二倍……というように制御できるとすると、距離はそれに自乗逆比例して縮まってゆく。これがUFOの惑星間飛行の基本原理ではないかと思われるのである。

地球の大気圏内を飛行するときは、地球とUFOとの間に働く重力をゼロにして（反重力制御）スイスイ飛行し、母星へ帰るときは上記の重力制御による母星との四次元時空間の曲率変換による短時間宇宙飛行で帰って行く。

重力制御による四次元時空の曲率変換による宇宙旅行は、地球でも早ければ二十一世紀中に実現する可能性があるだろう。アメリカ政府（NASAまたはペンタゴン）はすでにこの可能性に気がついているにちがいない。そうなると金星人も無関心ではいられなくなるだろう。

しかし重力制御に失敗して重力が無限大になると、その宇宙船はブラックホール化してしまい、その付近の空間が長期間にわたって非常に危険な状態になってくる。その近くを通る物体をのみ込んでしまうからだ。

単極磁気が重要なカギ

重要なのは「どうやって重力制御をするか」という問題である。ここに一つの仮説を持ち出すと、まず重力制御には莫大なエネルギーを必要とするが、それに対しては重力と電磁気力の関係を利用していると思われる。そして重力と電磁気力はモノポール（単極磁気）でつながっているのではないかと考えられるのである。つまり重力にマイナスのモノポールを作用させると電磁気力になり、電磁気力にプラスのモノポールを作用させると重力に変換するという具合である。

たとえば金星からの電磁波（光）を宇宙船内に取り込み、周囲の空間に存在するモノポールを吸収して、その金星からの電磁波に作用させると、その電磁波がモノポールのエネルギーによって重力波（宇宙船と金星の間の）に変換し、その重力波を増幅することにより、宇宙船と金星との空間の曲率を変化させる。これを何回も繰り返していると、宇宙船は動力をあまり使わなくても短時間に金星に到着するだろう。

現在の物理学の理論（大統一理論）では、モノポールは非常に重い質量

（非常に高エネルギー）を持つ、とてつもなく小さい微粒子であるとされている。重い質量を持つということは非常に強い重力がかかっているということになる。この重力エネルギーを〝燃料〟として使っていると考えられるのである。

ミステリー・スポットの頂上方向と地上方向に人が立つと、頂上方向側にいる人が縮んで見え、地上方向側にいる人が拡大して見える。これは重力異常によってミステリー・スポットの丘全体の空間が、頂上側が縮み、地上側が逆に拡大するという形でゆがんでいるからであると思われるのである。これは丘の頂上に近い場所が遠い場所よりも、より強い重力がかかっているからだろう。それを確かめようとして重力計で十グラム（正常な状態で）の物を計量してみたが、変化はなかった。

よく考えてみればこれは当たり前で、十グラムの物自体への重力も変化しているが、同時にハカリそのものにかかる重力も同率で変化していると考えられるので、相対的な重さはやはり十グラムである。

というわけで、空飛ぶ円盤というのは、空間を曲げる作用をして移動すると考えられるから、〝空曲げ円盤〟といってよいかもしれない。

これはただのSF的と一笑に付すべきことではなく、可能性がかなり高いだろう。

とにかく私はUFOというのは重力をコントロールしていることが最重要な基本になっていると思う。以前に何かの本で読んだのだが、UFO（円盤）は飛ぶときに機体が傾くという。とまっているときは水平だが、動き出したら少し前かがみになって飛んで行くという。UFO目撃例でもこの姿勢が多いということだ。

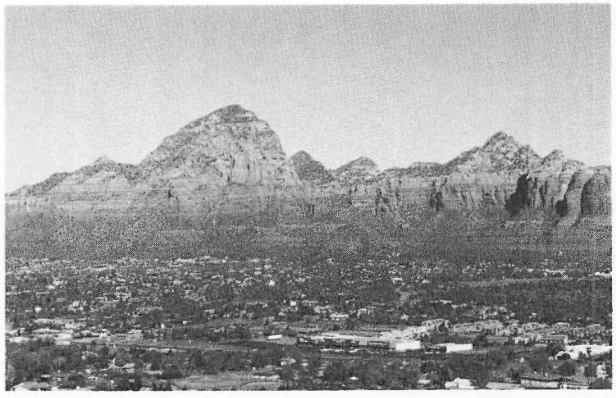
これはやはり重力をコントロールしているのだという説明が出ていた。つまり機体の下部に重力場の制御装置があるので、その部分に反重力場を発生させて、上方には引力場を設けると、機体の方向のベクトルと地球の重力のベクトルの和が作用して、地球の重力の力で前へ押される。これを続けると前方へズーッと飛ぶことになる（図2）。

ところが地球の航空機は尻から火を噴いて力学的な反動によって飛ぶので、その感覚で見るとUFOが不思議に見えるのである。UFOは自然の力を応用しているのだ。機体の下部に反力場、上方に引力場を作るだけで、重力を応用して波に乗ったように飛んで行く。そのときは前述のように機体が傾くのである。

UFOは人工的に重力場を作り出しているというが、これは間違いなく電磁気と関係しているだろう。この電磁気と重力の関係さえわかれば地球でもUFOが出来るということになる。

地球上にはエネルギーの強い地点があちこちにある。古代中国ではこれを竜脈といっていた。エネルギーのグリッド（格子）があって、その交差点が特に強いといわれ、UFOはその場所の上空によく出現するといわれている。

アメリカではアリゾナ州のセドナ、カリフォルニア州北部のシャスタ山がエネルギー波動の強い土地として有名である。こうした場所にはUFOが頻繁に出現する。これはUFOが大地から放射されるエネルギーを利用していると考えてよいだろう。これは単極磁気の密度が高いからで、つまりふんだんに存在しているからだ。



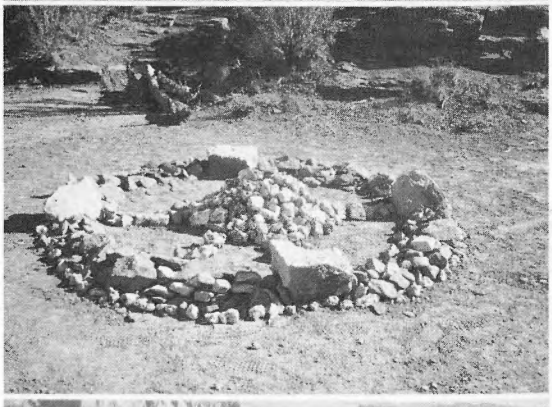
▶セドナの町。有名なリゾートとなっており、安いホテルや民宿が沢山ある。

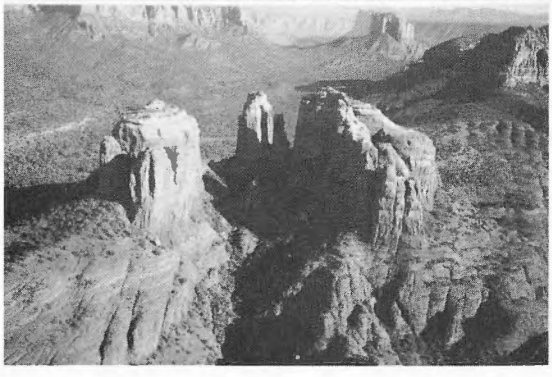
いまの物理学では単極磁気は理論的に存在するとされている。自然はすべて対称性から成っている。電気には正と負があり、人間は男と女、その他、万物も陰と陽からできている。

ところが磁気はプラスとマイナスに分けることはできない。どちらか一方だけを取り出すことはできないのだ。これは対称性の理論にあてはまらない。一九三一年、イギリスの天才物理学者のディラックは、モノポールを磁石の中に求めることはできないが、それは宇宙のどこかに存在する素粒子だと提案したのである。これは陽子の崩壊に要する莫大なエネルギーから、崩壊の際に触媒の役目をするため、存在が理論化されてきたのだが、まだ実際には見つかっていない。

ところで重力というものは、それ自体を取り出すことはできない。これは二つの物体が存在して、その間に働く力である。そこで単極磁気を重力の因子みたいな形で考えると、これは取り出せなくて当たり前だが、存在していることに間違いはない。私は単極磁気と重力、それに電磁力は非常に密接にくっついていると思う。そして単極磁気は重力とほかの三つの力（電磁力、弱い力、強い力）を統一するカギに最終的にはなるだろう。

セドナの不思議な大地





▲写真右上よりセドナの空港に立つ筆者。後方の平たい岩山はエアーポートメサ。その下の写真の中央より右寄りのアダムスキー型円盤に似た岩山がベルロック。その下はセドナの大渓谷。写真左上よりボイントン・キャニオンのストーンサークル。その下はベルロックのストーンサークル。その下はセドナの奇岩群。

〈毎日、読売、朝日各紙に掲載された六十二年十月以降の科学記事を抜粋紹介。各記事末尾の数字は掲載月日を、Mは毎日、Yは読売、Aは朝日を示す〉

ネス湖、一八〇メートルの水中でソナーに強力反応。

〝伝説の怪獣〟ネッシーの正体を突きとめようと、英国スコットランド北部ネス湖で十月九日から始まった英米合同科学調査「ディープ・スキャン」作戦の指揮にあたっている海洋研究家、エードリアン・シャイン氏は同日夜、初日の探索の結果「深さ約百八十㍍の水中でソナー（音波探知機）が強力な反応をキャッチした」と明らかにした。

同調査は英国政府、民間航空会社などの支援により最新型ソナーを搭載した約二十隻の船を動員してネス湖の底をくまなく走査している。反応が得られたのは湖の中部付近にあるウルクハート湾と呼ばれる深い水域で、反応から類推すると「何か長大な物体」である可能性が強いという（10・11M）。

利根川教授にノーベル賞

スエーデンのカロリンスカ研究所は十月十二日、一九八七年度ノーベル医学・生理学賞を利根川進・米国マサチューセッツ工科大学教授（四〇）に授与すると発表した。同教授は、病原体などを迎撃する抗体の多様性について、その遺伝学的病理を発見した業績が認められたもので、価値の高い単独受賞となった。授賞式は十二月十日、ストックホルムで行なわれ、賞金二百十七万五千クローナ（約五千万円）が贈られた。日本人のノーベル賞受賞はこれで七人目（10・13M）。

最高速の記憶素子、富士通が試作

富士通は十月十二日、記憶させた情報を〇・五ナノ秒（一ナノ秒は十億分の一秒）という、世界最高速度で取り出すことのできる記憶素子（メモリー）の試作に成功したと発表した。この素子は同社が発明し、ガリウムひ素半導体と並び次世代ICとして各社が開発を競っているHEMT（高電子移動度トランジスター）の四㌔ビットS・RAM（随時書き込み読み出しメモリー）で、室温での作動。

HEMT・ICの開発は通産省工業技術院が昭和六十四年度を目標に開発をすすめている大型プロジェクト「科学技術用高速計算システム」の研究の一環で行なわれたもの。

従来、室温での反応速度が最も速かったIC（S・RAM）はシリコン、ガリウムひ素を用いた素子共に一ナノ秒で、HEMT（S・RAM）も二年前に富士通が摂氏マイナス百九十六度（液体窒素温度）の環境で三・四ナノ秒を実現していた。今回の試作品は素子の中央の回路部分の長さを〇・五㍉（一㍉は千分の一㍍）とサブミクロン単位に微細加工。富士通はHEMT・ICの研究成果を十月十三日から米国ポートランドで開催された米国電子通信学会で発表した（10・13M）。

東洋一の〝宇宙灯台〟来春電波研に完成

郵政省の電波研究所（東京小金井市）に来春までに東洋一の〝宇宙の灯台〟が完成する。正式名は「宇宙光通信地上センター」。宇宙を飛ぶ人工衛星にレーザー光線を発して灯台の役目を果たすほか、日本一の衛星追尾望遠鏡で外国の軍事衛星もキャッチできるという。

計画によると構内にドーム屋根つき三百五十平方㍍の建物を建設、その中に米国コントラバス社製の天体望遠鏡付き衛星追尾装置などを設置する。五年後に打ち上げられるわが国の技術試験衛星（ETS）Ⅵ号との間で、レーザー光線による光通信などの実験を行なうほか、人工衛星の位置や距離を高精度で測定する研究などを行なう。

その精度は、三万六千㌔㍍の上空を飛行する衛星の位置を前後一㌢・㍍、左右百九十㍍のズレで測定できるという。わが国の追尾天体望遠鏡は海上保安庁、国土地理院、東京天文台にあるが、いずれも口径五〇㌢ほど。口径一・五㍍の電波研の装置が一番高性能になる。

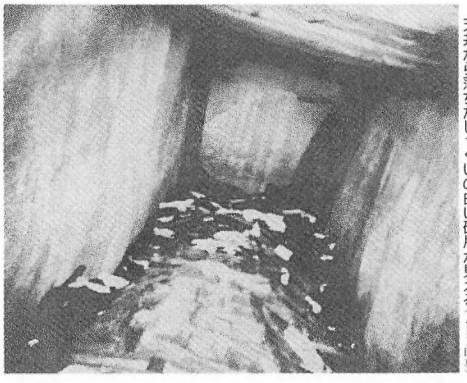
人工衛星は千数百個が全世界で打ち上げられたが、軌道を公表していない軍事衛星も多い。同研の追尾装置を使えば軌道も判明、迷子衛星もキャッチできるという（10・18M）。

大ピラミッドわきにファラオの「太陽の船」もう一隻。米・エジプト調査団確認

四千六百年前に造られたエジプト・カイロ近郊ギザ地区のクフ王の大ピラミッドを調査していた米国・エジプト合同調査団は二十日、これまで発見された「太陽の船」と同様の船が埋まっていることを確認した。太陽の船はファラオが乗って来世に行くと信じられ、「ラー（太陽神）信仰」につながるもので、この発見により考古学の不明部分に新たな光が当たることになる。

エジプト考古庁のカドリ長官らが十月二十日記者会見したところでは、一九五四年にピラミッド南面の東端から発見された全長四十㍍の太陽の船に対し、西端の地下にも空洞があり、何かが埋蔵されていることが今年初めの日本隊の調査でも確認されていた。

今回米国隊は外気の侵入によって空洞内の「環境」を壊さないため、穴を開けても外気が入り込まない特殊なドリル装置を開発。その場所の石灰岩に直径八㌢、深さ一・五㍍の穴を開け、遠隔操作のカメラを差し込んで内部を調査、第二の太陽の船を確認したという。太陽の船は太陽神ラーが天空を駆けるときに利用した船で、日の出から日没まで乗る昼間の船と、地下の世界を西から東に移動する際に乗る夜の船の二隻が必要とされていた。ファラオ（王）は死後、太陽神となると考えられていたため、墓の近くに太陽の船を副葬した例があり、クフ王の大ピラミッドではレバノン杉で造られた太陽の船が発見され、もう一隻の確認が待たれていた（10・21M）。



◀マイクロカメラで撮影されたファラオの船（中央下）。天井から落ちたしっくいの白い破片が見える（AFP時事）

疑似エイズウイルスを開発。ワクチン開発に光。阪大微生物病研グループ

大阪大学微生物病研究所感染病理学部

内の加藤四郎教授と生田和良助手の研究グループは、エイズの発病予防ワクチン開発につながる疑似エイズウイルス作りに世界で初めて成功。十一月六日、京都市で開かれている日本ウイルス学会で発表した。この疑似ウイルスは外面だけはエイズウイルスそっくりだが感染力はなく、人間の正常細胞と融合すると感染者（キャリアー）の体内のエイズウイルスとエイズに感染した細胞を死滅させる「細胞性免疫力」を引き出すことが可能。ワクチン作りが急がれているだけに、エイズ克服への大きな前進になりそうだ。

加藤教授によるとエイズ感染者の血液中にある免疫関連細胞のマクロファージなどにこのウイルス空粒子（疑似エイズウイルス）を細胞融合させれば、新タイプのワクチンを作ることが可能。近く動物実験に取り組む（11・7M）。

ペーパー状電解質、松下などが初開発

松下電器と日本合成ゴムは十一月十一日、紙のように薄くて充電可能な電池（二次電池）などを可能にするペーパー状の固体電解質を世界で初めて開発したと発表した。

電解質とはイオンの移動で電気を運ぶ材料のことで、電池などに使われているが、従来のものは液体がほとんど。

こんど両社で開発した固体電解質は銅を含む材料とゴムを混ぜ、合成樹脂のネットに塗りつけて乾かしたもので厚さは〇・一ミリ。このペーパー状のものの表裏に膜状の電極をつければ電池になる。電圧は〇・六ボルトで、層を重ねれば電圧は上げられる。

しかも、この電池は自動車のバッテリーのように充電できる。これらの特色を生かせば電源内蔵の半導体素子、永久埋め込み型のペースメーカー用二次電池、宇宙用電池からフラット型家庭用ディスプレーなどが将来可能になるという（11・11M）。

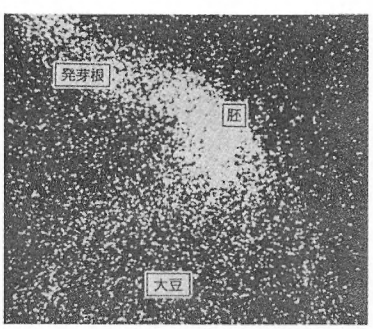
細胞の発光、初撮影。分裂闘争の信号？

新技術開発事業団の「生物フォトン」研究グループ（総括責任者・稲場文男東北大電気通信研究所教授）は、大豆の発芽に伴う生体細胞の微弱な発光現象をカメラでとらえることに成功した。細胞の内部発光を映像でとらえたのは世界で初めて。ガン患者の細胞にはこの発光現象が極端に多いことから、特定細胞の発光現象の映像化成功はガンの診断・治療法の開発にも突破口を開くのではないかと注目されている。

この光は生命現象に密接なかかわりがあり、人間ではガン患者の患部や臓器の細胞や外敵と闘う免疫細胞や血液細胞から、また植物では発芽細胞からたくさん放出されることがわかった。

このため生物フォトン（光子）は生命の最小単位の細胞が分裂して生まれたり、敵と闘うなど、重大な時に出される〝信号〟と考えられるようになった。しかもこの信号を解読できれば「誕生、成長、老化、病気――」など生命現象を幅広く究明できると期待され、同事業団は稲場教授の研究を発展させ、昨年から五年計画の国家プロジェクトで研究を進めてきた。

その最初の課題が「光がどこから発しているか」を探る「二次元の光子放出観測」だった。このため従来の光の強弱の測定だけでなく、発光場所を特定できる特殊な映像装置（光電子増倍管）を開発した。そしてまず実験の容易な豆類から測定に入り、このほど大豆の発芽時の驚くほど鮮明な「生物フォトンの映像」をとらえた（9・21Y）。



▲大豆の発芽に伴う発光現象。発芽根の根元の胚に光が集中している。

老人のガン、新療法成功――手術不要、九割完治。大阪府立成人病センター

大阪府立成人病センター病院（大阪市東成区）第三内科の三村征四郎医長（四九）と同センター研究所第二部の一居誠医師（四三）は、胃、食道ガンの患者に、人の血液からつくったガン組織に集まりやすい物質を投与、そこへレーザー光線を照射してガンをやっつける光化学療法を用い、九割近い治癒成績を収めることに成功した。手術せず口から内視鏡を入れるだけなので、体力のない老人やほかに病気をもったガン患者に最適の治療法と期待されている。

この治療法は、まずヘマトポルフィリンという物質を患者に注射する。この物質は人の血液中のヘモグロビンからつくられ、ガン細胞に吸収されやすい。二、三日後、この物質がガン組織に集まった時点をとらえ、アルゴンダイレーザー光線装置を組み込んだ内視鏡を口から入れ、ガン組織とその周辺に一平方センチ・メートル当たり五分間、レーザー光線を照射。こうするとヘマトポルフィリンは化学反応を起こして活性酸素を発生、ガン細胞を酸化させてしまう。

同センターは六年前からこれまでに、主に七十歳以上で体力が弱かったり、ほかの病気があったりするなどの理由で手術不可能な胃ガン患者二十四人、食道ガン患者四人にこの治療法を実施した。その結果、胃ガン二十四人のうち二十二人、食道ガン四人のうち三人が、一回から数回の治療でガン組織が完全に壊死した。完全に治らなかった三人もガン組織は半分以下に縮小した。現在まで再発した人はいない（10・5Y）。

ネムノキが地震予知？

三年前犠牲者二十九人を出した長野県西部地震（M6・8）をネムノキ（マメ科の落葉高木）が予知していたのではないか、とする研究結果が八日、長野市で開催中の地震学会（会長・宇佐美竜夫信州大教授）秋季大会で報告された。

ネムノキの生体電位の変化と地震の前兆との関連を探ったもので、東京女子大文理学部鳥山美雄教授（植物生理学）らの研究。地震前、震源地の同県王滝村から約六十八キロ離れた松本市の信大理学部生物学教室の庭のネムノキの枝に白金製電極を、地中一メートルに白金ロジウム製の電極をそれぞれ埋め込み、二十四時間体制で電位変化を観測した。

報告によると、地震前の五十九年八月下旬までは、電位波は富士山型（日照の関係で一部くぼみができる）で、ほぼ正常だったが、九月一・二日、五・六日、

十一日から十三日にかけての計三回、大きな「ノコギリ歯状」の異状電位波を示し、十数時間の十四日午前八時四十八分、県西部地震が発生した。

鳥山教授は五十三年の宮城県沖地震（M7）と五十八年の日本海中部地震（M7・7）の発生前にも同様の異常電位を観測しており、「マグニチュード7前後の大規模地震の前兆と密接に関係しているのではないか」としている（10・9Y）。

月面探査機を開発。地中に〝潜行〟観測

月の生い立ちや進化を探るため、人工衛星から月面中に打ち込む砲弾状の観測機器「月ペネトレーター」が、名古屋大学理学部の水谷仁教授（地震学）のグループによって世界で初めて開発された。これまで宇宙の探査機は壊れないようにそっと「軟着陸」させるのが常識だったが、新装置は天体に衝突させて地中深く潜り込ませる「硬着陸型」。地震波など地中の方が有利な観測も多いだけに、一九九〇年代半ばの飛行に期待が集まっている。

月の内部構造を探るには、地震波や放射性元素の発生する熱量を測定することが不可欠だが、これらは地中でないと観測できない。こうした事情から、水谷教授は昨年一年をかけて厚さ一㌢の金属製の容器（長さ七十㌢、直径十二㌢）を製作。そして空気圧を利用した発射装置を用いて月面と同じような砂の層に容器を打ち込み、容器が壊れずに深さ一―二㍍に潜り込むことを確認した。

実際の探査機は月を回る軌道の遠地点で母船から切り離され、月の引力に引っ張られて月へ接近する。月面近くで逆噴射するものの、秒速二百―三百㍍に達する猛スピードで月面に突入するので、その際の衝撃は地球上の重力の一万倍を超える。しかしこの想定実験で搭載機器は無傷のまま作動し、この方法で硬着陸探査機が作れることがわかった。文部省宇宙科学研究所の計画では、このペネトレーターを三台積んだ母船を月軌道に打ち上げ、母船から月の表側に一カ所、裏側に二カ所打ち込んで一年間にわたって月の地震と熱流量の精密な観測を行なうことにしている（10・12Y）。

長方形の超銀河団複合体の存在を確認

われわれのいる地球を含む銀河系は多くの他の銀河を含む「超銀河団」の中にあると見られていたが、ハワイ大学天文学部のブレント・チュリー博士は、この超銀河団をいくつも含む、平らで長方形をした「超銀河団複合体」の存在を確認したと研究のスポンサーの全米科学財団（NSF）が三日発表した。

この〝超銀河団複合体〟は長さ十億光年、幅一億五千万光年という途方もない大きさで、宇宙最大の〝構造〟。長さは現在観測しうる宇宙の直径の十分の一。この発見は今までのいわゆる〝ビッグ・バン〟宇宙生成論にも影響を与えるとみられている。この観測データをチュリー教授はスーパーコンピューターで分析、宇宙全体の中に位置付けしていった。この結果、約六十個の銀河団が一つの巨大な「超銀河団複合体」の構造上に位置していることがわかった（11・4Y）。

ソ連、今年七月に火星へ無人探査機

モスクワ放送によると、ソ連は同国の火星探査計画「フォボス計画」に従って今年七月、二基の無人探査機を火星とその衛星フォボスに向けて打ち上げる。

十月六日の「ソビエツカヤ・ロシア」紙の報道として伝えたもので、ロケットの飛行管制システムは金星・ハレーすい星プロジェクト「ベガ」用に使用されたものと比較すると事実上新しいものとなる。ハレーすい星飛行計画の際には、誘導精度は数百㍍以内で、八十㌔ワットの超短波送信機「ガリバー」が使用されたが、フォボス計画での誘導精度は五㍍以内であることが必要とされるため、今回の打ち上げでは新たに開発された「ゴライアス」と名付けられた極極超短波帯で機能する二百㌔ワットの新世代送信機が使用されるという（10・12A）。

存在するか「第五の力」

これまでにニュートンのリンゴ落下による重力など、宇宙を支配する力は四つと考えられてきたが、最近、ハイパーチャージと呼ばれる「第五の力」が存在する可能性が極めて高いと米国の学者が発表、話題になっている。空気抵抗がなければ物体は重さに関係なく同じ速さで落下するという、かのガリレオがピサの斜塔で確かめた物理学の常識がひっくり返り、軽い羽根の方が鉄球より速く落ちることもあるというのだ。

第五の力の実験データを発表したのは米ワシントン大学のポール・ボイントン教授。ワシントン州インデックス近郊の山中、高さ百メートルの花崗岩の崖下に横穴を掘り、直径八㌢足らずのリングをつるして実験した。リングは半分がアルミニウム、半分はベリリウムで、両方の質量は同じになるように作った。同じ重さの物体には同じ大きさの重力（引力）が作用するから、「第五の力」が存在しなければ、崖の引力でリング全体がわずかに横穴の奥の方に引っ張られるだけと考えられる。

ところが実験してみると、アルミの半分が崖に引き寄せられる一方、ベリリウムの方は反対方向の力を受け、リングはねじれて回転した。つまり四つの力以外の重力に反する力が作用した結果というのだ。

注＝これまで自然界に存在するといわれてきた力の種類は、(1)物体同士が互いに引き合う「重力」、(2)モーターを回したりする「電磁力」、(3)原子核の中で素粒子同士を結びつけている「強い力」、(4)原子核が崩壊する時に作用する「弱い力」の四種類が確認されている。第五の力が作用する範囲は数十㍍から数㌔㍍とみられ、ノーベル物理学賞を受賞した素粒子物理学者のS・L・グラショー米ハーバード大教授もその存在を支持している（10・22A）。

鉄より硬いプラスチックを開発

鉄より硬いプラスチックを合成することに工業技術院の繊維高分子材料研究所（茨城県谷田部町）が成功した。材料の分子を平面状に結びつけた世界で初めての「二次元高分子結晶」で、大きな形の製品ができるようになれば、軽さと強度が求められる航空機用材料などに実用化の道が開かれそうだ。

繊維高分子研の松田宏雄技官らのグループが試作に成功した高強度プラスチックは、まだ直径二㍉、高さ四㍉ほどの小さな円筒形。先のとがったダイヤモンドを押しつける方法で表面の硬さ（ビッカース硬さ）を計ったところ、一平方㍉あたり一八八㌔あり、銅の九四㌔、純鉄の一三二㌔を大幅に上回った。比重は一・一で鉄の七分の一と、軽い（10・24A）。

あのS・ハルパーン博士があなたの頭脳・潜在脳力を全開!!

ついに日本での発売開始

こんなに頭が冴えちゃっていいのかな!?

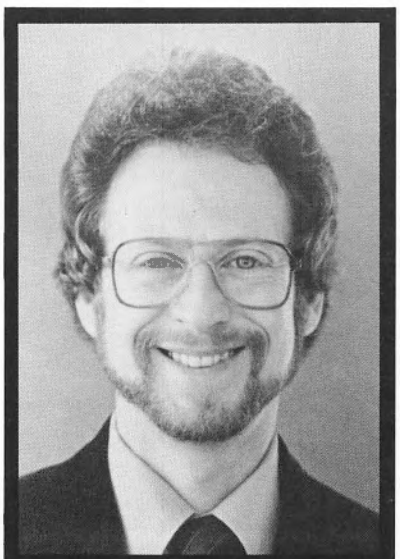
世界的に著名な心理学者であるとともに、潜在意識をゆり動かす　持の瞑想音楽の作曲・演奏家としても全米一の名声と実績を持つスティーヴン・ハルパーン博士。その博士が製作したすごいテープが遂に日本に登場した。あなたの知性・秘められた潜在脳力を100%発揮できるようにしてしまうという恐るべき力を持った"S・ハルパーン・サブリミナルテープ"がそれだ。

瞑想音楽に興味のある方ならよくご存知の、あのスティーヴン・ハルパーン博士があなたのためにすごいテープを制作しました。世界的に著名な心理学者であると同時に、潜在意識を覚醒させる独特の音楽のクリエーターとしても博士の名は余りにも有名です

ハルパーン博士は、音楽の分野だけにとどまらず、潜在意識に効果的な刺激を与える言葉を、耳に聴こえない波長で音楽に同調させる"潜在意識刺激詞テクノロジー"の分野でも全米にその名をとどろかせています。この肯定的メッセージを耳に聴こえない波長に変換して潜在意識へ送り込む技術については30年ほど前から、その理論・技術化について専門家の間で研究が行なわれてきたのですが、非常にデリケートで高度な音響技術を要する、メッセージを効果的に潜在意識に伝達し刻印する手段が見つからない等々の理由で商品化するのは非常に困難なことだとされていました。

それをハルパーン博士の開発した高度な音響技術と潜在意識に効果的に刺激を与える特殊な音楽の力を利用してメッセージを効果的に潜在意識に伝達し刻印するという、長年の研究によって生まれた独自のノウハウにより可能にしてしまったのです。

「この種の耳に聴こえない言葉をうたい文句にしたテープが米国内で他にも何種類か出回っているが、そのほとんどは技術的にも幼稚で、効果の点で問題のあるものが多く、中にはほとんど"雑音"にすぎないテープもある。私の調査・研究によれば、効果の点で信頼が置けるのは、私の製作したテープそれに、私の友人が製作・販売している同種の音楽同調方式のサブリミナルテープ等、数えるほどにすぎない。」という博士の自信に満ちた口調を裏づけるかのように、ニューヨークに本社を置く大手レコード会社から発売されている博士のテープは昨年一年間だけでも五十数万本の販売実績を誇り、数多くの熱狂的ファンを作り、その効果の確かさが証明されています。



●スティーヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音・言葉の潜在意識への作用の研究で世界的にその名を知られる心理学博士。学者であると同時に"瞑想音楽の神様"としても米国はもちろんヨーロッパ各国にその名を知られ、世界中に熱狂的なファンを数多く持っている。博士の音楽は鑑賞用の音楽としても高く評価されているが、博士の長年の研究のエッセンスが凝縮した"音の薬"としての効能も医学・心理・教育関係者の間で高い評価を受け、いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている。カイザー・パーマネント病院をはじめ全米の一流の医療機関では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え、著しい効果を上げている

あなたの知性・潜在能力が一気に全開!!

今回ご紹介する"S・ハルパーン・サブリミナルテープ"スーパー・インテリジェンス・セット"は、あなたの大脳・潜在脳を限りない弛緩状態、あるいは覚醒状態に誘導することによって、あなたの持つ最高の知性を引き出し、秘められた潜在能力を一気に全開させる驚くべき効果を持ったサブリミナルテープのセットです。

もう多くを語る必要もない、ハルパーン博士の作曲になる大脳に一万ボルトの電流を流すほどのインパクトを与える音楽の力と、それに同調した、独自の高度技術で耳に聴こえない波長に変換された、潜在脳を刺激するメッセージ（もちろん日本語）の作用によって、確実にあなたをカミソリのような鋭い切れ味の頭脳の持ち主に変えてゆきます。

●セットの各テープの内容

この"スーパー・インテリジェンス・セット"は次の4本のサブリミナルテープから成り立っています。

〈テープ1〉"ウェイク・アップ"

ぼんやりした頭をクリアにし、大脳を覚醒状態に誘導するテープ。朝、目を覚ました時、会社へ行く前等に聴くと、その日一日の仕事のはかどり方が違ってきます。

〈テープ2〉"リラクセイション"

大脳の緊張をときほぐし、心の奥底にたまったストレスを完全に洗い流し、頭脳を最高のコンディションにもってゆくテープ。イライラした時、勉強の前などに聴くと心が落ちつき、勉強の能率が倍加します。

〈テープ3〉"マッサージ"

頭脳の活発な働きを邪魔する心身の緊張、頭の疲れをやさしくもみほぐし、頭の血のめぐりをよくし、最高の知性と集中力を発揮できるようにしてくれるテープ。会社から帰った時、風呂上がり等に聴くと、一日の疲れがふっとび、頭脳・身体がともにリフレッシュされます。

〈テープ4〉"スリープ"

大脳を完全な弛緩の状態、シーター波優位の完全な休息の状態に誘導するテープ。夜、眠る前に聴くと心地よく眠りにつくことができ、大脳の活性化に欠かせないデルタ波の脳波が出る熟睡状態に容易に到達することができます。不眠症ぎみの方、熟睡できない・朝の寝覚めの悪いという方にも最適のテープです。（この"スリープ"のテープは、車の運転中、危険な作業をしている時等には絶対に聴かないようにくれぐれもご注意下さい）

お申込みは今すぐハガキ・電話で

今ならS・ハルパーン・サブリミナルテープ4本セット『スーパーインテリジェンス・セット』を7日間無料試聴できます。ご希望の方は今すぐ電話・ハガキで左記宛にお申込み下さい。

代金（ご指定払い＝8,000円・分割払＝月4,800円×4回）送料はともに500円）は商品到着後7日以内にお支払下されば結構です。（7日以内の返品は自由）

お電話のお申込みは
東京 03(479)5864
受付時間AM8～PM24
（日・祭日も受付中）

●「スーパーインテリジェンス・セット」試聴希望
●一括・分割の別
●住所
●氏名
●電話番号
●年令
●職業

郵便はがき
〒107
東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社
UF①係

〒107 東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社
電話 東京03(479)5864

This is the Book!

対談形式の素晴らしい——エジプト考古学入門書——

吉村作治 栗本薫 共著『ピラミッド・ミステリーを語る』朝日出版社刊 二〇〇〇円

『ピラミッド・ミステリーを語る』でまず驚いたのは、見開きの各左ページに、写真や図版が掲載してあることだ。全部で膨大な数となり、中には初めて見る珍しいのもあって壮観だ。

本文は、ありきたりの参考書の型を破って対談型式となっており、このために、たいへん読みやすい楽しい本として編集してある。何よりも文章が平易な話し言葉だから、非常に親しみやすい。

「万人に理解できない文章は落第だ」と福沢諭吉は言い、自著の原稿をまずお手伝いさんに読ませて、理解できない箇所があれば書き改めたというが、本書はまさに平易主義の典型ともいえる書物だ。難解な言辞をつらねた抽象的な文章によるエジプト考古学の専門書に首をひねっている編者にとって、快哉を叫びたくなる素晴らしい本である。

内容はSF作家の栗本薫氏と、早稲田大学人間科学部助教授の吉村作治氏の対談で終始し、栗本氏が生徒、吉村氏が先生という立場で、生徒の素朴な質問や意見に対して先生が明快に答えている。

吉村氏は早大ピラミッド調査隊の隊長として多年、現地を発掘調査してきた大ベテランで、日本におけるエジプト考古学の第一人者である。昨年はエジプト考古庁の依頼により、一月から二月にかけて、ギザのクフ王大ピラミッドとスフィンクスにまとを絞り、新鋭電磁波探査機を駆使して、クフ王のピラミッド南面にこれまでに発見された〝太陽の船〟とは別な船が埋まっているとか、スフィンクスの北側の腕部分に隠し所がありそこにブロンズ像が隠されている可能性があるなど、コンピューター解析による驚くべき結果を発表した。さらに、スフィンクスはギザの三大ピラミッドより約百年前に造られたもので、カフラ王の守護神だという定説をくつがえす新説を発表して世界を驚かせた。

吉村氏によると、ギザ地区の三大ピラミッドは、スフィンクスと一体となった各王の死後世界を再現するための都市を、クフ王の側近のヘムオンが計画したというのだ。こうした問題や電磁波探査機、ピラミッドパワーについても、本書にわかりやすく述べてある。

しかし、通俗的な読み捨ての域をはるかに超えた専門解説書であるから、本書はエジプト考古学の絶好の入門書といえるだろう。ピラミッドばかりでなく、王家の谷でツタンカーメンの墓を発見したカーターの偉業にまつわる関係者の呪いの話にしても、じつに面白い実話が展開する。千古の謎を秘めたエジプトの遺跡に夢とロマンを求める日本のヤング層に、ぜひ読んでもらいたい本である。

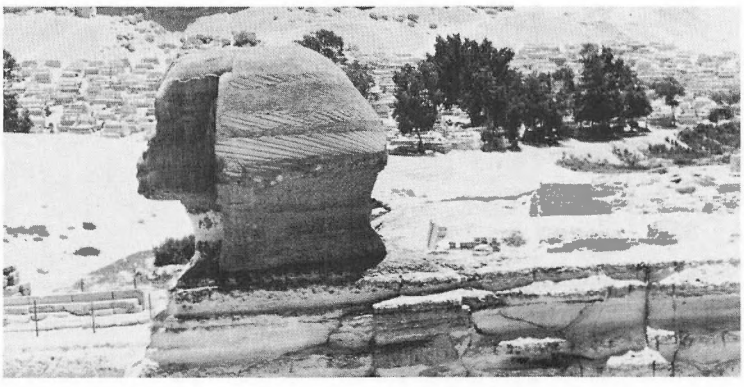
吉村氏は、日本からエジプトの遺跡見学に行く有名無名人の案内役を、気軽に引き受ける方として知られていた。周知のごとく編者は昔から毎年海外旅行団を編成して名高い遺跡の視察を専門にやっているのだが、十年前に最初のエジプト旅行を実施したとき、現地で吉村氏にガイド役をお願いして、懇切丁寧に案内をしていただいた思い出がある。

氏はエジプト考古学にまったくの素人であった旅行団に対して、学者ぶった偉そうな態度を示さず、そこらの八百屋のおじさんみたいに気さくにもてなして下さった。小事にこだわらぬ豪放磊落な性格が印象に残っている。傑出した人物というべきだろう。

ナイル河畔の野外ハト料理店で一杯やりながら、吉村先生から聞いた〝講義〟の一節をお伝えしよう。

「エジプトの遺跡を見学にくる各国人で、もっとも知的なのはフランス人。彼らは参考書と首っぴきで遺跡を見ている。次に知的なのがドイツ人。アメリカ人はダメ。日本人は写真を撮りにくるだけなんです」

（久保田八郎）



◀ギザの大スフィンクス（一九七八年八月、久保田撮影）

GAP短信 GAP NEWS

■六十三年度地方支部大会終了

昨年度最後の地方支部大会は十一月一日に第八回山形・仙台合同支部大会が山形県天童市で開催され、十一月二十二日に第二回長野支部大会が長野市で開かれて、いずれも盛況裡に有終の美を飾った。詳細報告は本号47頁。

■今年度支部大会開催予定地

十二月末現在で次の三箇所が決定済。

●五月三日（祝）仙台市にて仙台・山形合同支部大会

●六月五日（日）秋田市にて秋田・青森合同支部大会

●六月二十六日（日）北海道旭川市にて旭川・札幌合同支部大会

■支部関係変更事項

(1)従来松山支部は奇数月の第四日曜日に広島市で、偶数月の第四日曜日に松山市で交互に月例会を開催していたが、事情により広島市での月例会は昨年十一月を最後として廃止し、十二月より松山市一本に絞って開催を続けることになった。ただし奇数月は第三日曜日、偶数月は第四日曜日とし、会場も従来の松山市民会館より同市港町七丁目五番の「コミュニティーセンター」に変更。詳細は本号51頁「全国月例研究会案内」を参照。

(2)長野支部月例会は本年一月より会場を塩尻市の「塩尻総合文化センター」に統一し、偶数月の松本市の会場を廃止する。詳細は51頁を参照。

(3)沖縄支部月例会は六十二年十一月より毎月第三日曜日を第四土曜日に変更し、時間も夜六時より十時までとした。また会費は積立金を加えて毎月千円に増額。会場は「那覇市民会館」。

■西独のUFO研究誌、日本GAPを絶賛

昨年十一月到着の西ドイツUFO研究会発行「UFOナハリヒテン」誌三〇七号（ヴィースバーデン／カール・ファイト氏主宰）に、日本GAPの紹介記事を大々的に掲載し、特に英文版第三号に載せた春川正一氏の体験記第一部を全文ドイツ語に訳して掲載した。

■春川氏よりの伝言

右の春川正一氏は当初日本GAPを援助する目的で秘話を伝えたのだが、氏の体験談発表が結果的にマイナスとなり、また氏が主宰するグループに出席したGAP会員のなかには氏に対して迷惑な言動をなす人がいたり些細な問題で手紙を出して回答を求める人が多いなどの理由から、今後GAP会員との交流は一切断わりたいと十一月上旬に伝言があった。したがってGAP会員は春川氏のグループへの出席を遠慮されたい。

■GAPテレホンカードを製作頒布

日本GAPはテレホンカードの製作頒布を開始した。アダムスキー撮影の円盤をバックに「With Cosmic Consciousness」「GAP Japan」の文字が入った優美なもの。製作部数が少ないため（百枚）定価は少々割高となり一枚千五百円。送料六十円。注文は日本GAP宛郵便振替で。

■今年度海外研修旅行

今夏八月に実施予定の日本GAP海外研修旅行は企画第十回記念として、「エジプト・イスラエル・イタリアの旅」に決定。十三日間の豪華手作りコース。費用も他社に比べて安く、多数の申込者が予想される。ただし今回は定員三十名に限定。詳細は49頁。

■本年度日本GAP総会

本年度の総会は九月二十五日（日）に東京銀座七丁目の「銀座ガスホール」で、アメリカよりアダムスキーの高弟であったアリス・ポマロイ女史を招待して「ジョージ・アダムスキーの思い出」と題する大講演と質疑応答を行なう。夜は銀座八丁目の「金鶏菜館」にて歓迎大晩餐会を開催。本誌100号発行記念として昼夜とも盛大に実施の予定。大盛況が予想される。詳細は七月発行予定の本誌に掲載。

■日本GAP、またも準支部誕生

日本GAP全国組織網の二十一番目の準支部として鹿児島県に「薩摩（さつま）会」が昨年十二月に発足した。月例会は毎月第四日曜日に鹿児島市与次郎二丁目三一一の「鹿児島市民文化ホール」で午後一時より五時まで開催。連絡先は鶴田清則氏（〇九九三二―五―四三九八）。詳細は51頁。

■各国UFO研究団体との交流活発

現在日本GAPと各国UFO研究団体との主な交流先は次のとおり。アメリカ「エインシェント・スカイズ」、スエーデン「AFU」、スイス「エインシェント・スカイズ」、アメリカ「APRO」、ブレティン（休会中）」、オーストラリア「濠州国際UFO研究会」、イギリス「アクスミンスター・ライト・センター」、ブラジル「ボレティムUFO」、イギリス「イギリスUFO研究会」、ブラジル「CPDV」、アメリカ「エンカウンターズ・センター」、イギリス「フライイングソーサー・レビュー」、アメリカ「ICUFON」、イギリス「イギリスGAP」、イタリア「イル・ジョルナーレ・デイ・ミステリ」、イギリス「イギリスUFO研究協会」、アメリカ「MUFON」、フランス「OVNI・PRESENCE」、イタリア「SHAN」、アメリカ「UFOCCI」、西ドイツ「UFOナハリヒテン」、ノルウェー「UFO・NORGE」、デンマーク「デンマークGAP」、デンマーク「UFO・NYT」、スエーデン「UFOスエーデン」、スエーデン「UFO研究会」、ブラジル「GEPEX」、アメリカ「宇宙科学センター（ロス氏）」、台湾「台湾UFO研究会」その他。

■茨城支部主催UFO写真展

三月二十五日より二十九日まで茨城県勝田市「伊勢甚（いせじん）デパート」一階「ふれあい広場」にて開催。常磐線勝田駅東口下車。徒歩十分。東京上野駅より特急「ひたち」で一時間二十五分。

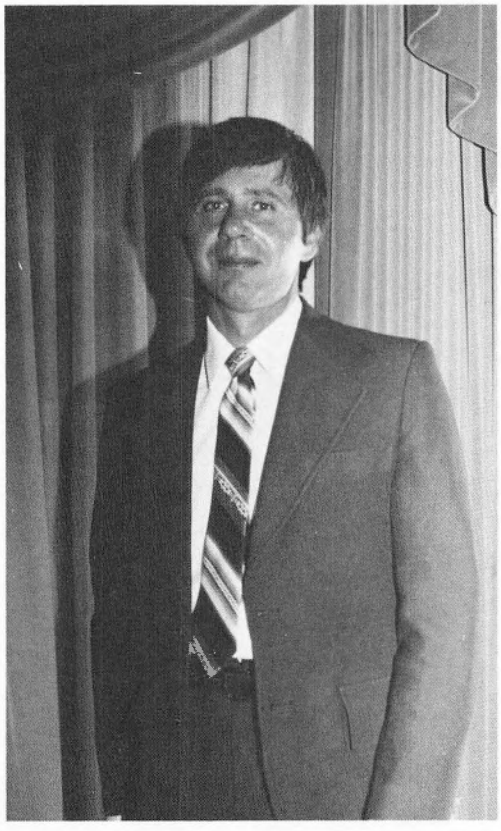
UFOs and the Complet Evidence from Space
By Daniel Ross

UFO——宇宙からの完全な証拠

金星、火星、月に関する真相

●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

連載第3回



◀ダニエル・ロス氏（一九八七年八月五日、ロサンゼルスにて訳者撮影）

UFO（未確認飛行物体）は「危機に瀕した地球を救援するために別な惑星から来る宇宙船だ」という見解のもとに、筆者は米海軍を除隊後、大学で理科系の勉強を続ける一方、多数のUFO関係の文献を収集しながら独自の調査研究を開始。ジョージ・アダムスキーの体験の真実性を宇宙開発の隠された諸発見から立証する。雄大な構想と緻密な調査により、UFOの実体を浮き彫りにした論調が展開。

宇宙船（UFO）は監視を続けた。彼らは、地球が核兵器を貯蔵し、完全破壊の日にむかって各国が武装し続ける限り、常に大挙して地球上空に存在するだろう。この核の絶滅の脅威を防ぎ得る唯一の方法は、地球の経済の基盤を戦争のかわりに宇宙に求めることにある。

これが意味するところは、われわれの太陽系内の他の惑星群がすでにやっているように、「地球の経済を宇宙的文明を持つ方向に転じる」ということだ。各国間に友好関係が生ずれば戦争経済にとってかわるものを必要とするようになるだろう。この変革は社会の集合的意志によって実現するにちがいない。それはわれわれの責任である。スペース・ピープル（友好的な異星人）はその変革を地球人に強制するわけにはゆかないのだ。

地球の宇宙開発が始まる

わが近隣の惑星群は彼らの宇宙船を地球の大気圏内に送り込み、十八年にわたる目撃報告類を通じてその存在を示すことにより、地球人の宇宙開発を刺激した。

一九六五年までに、大体において社会はUFOの背後にひそむ真相を認めてはいなかった。スペース・ピープルはその事実によく気づいていたけれども、今や人間は自分でやれる唯一の他の方法を学びとる時機を迎えていた。そこで地球人は宇宙に関して何かを発見するための自分自身の方法を用い、自分でいわゆる謎を解明するための適当なチャンスを与えられたのである。

スペース・ピープルはもっと早くから自分たちでやれるすべてのことをやっていた。公然たるコンタクトにより、彼らの情報は完全に伝えられていた。彼らはだれなのか、なぜ地球へ来たのかに関する情報である。

だがそれ以来長年月を経たあとで、繰り返しそれを続ける効用はなかった。

人間は宇宙開発によっていまにも直接に情報を得ようとしていたので、それは人間の進歩と理解の方向へむかって科学者が詳細を探り出す絶好の機会となるはずだった。

しかしたまたまなりゆきとして、初期のUFOの謎に対する研究の科学体制側の客観性が欠乏していたために、宇宙の発見事に対する全体的な客観性の欠乏までも引き起こしたのである。そのため人類は建設的な価値のある宇宙的知識の方へむかって前進しなかったのだ。

別な惑星から来る訪問者たちは、地球人の宇宙開発、特に月旅行のすべてを見守っていた。上空に出現する彼らの宇宙船（UFO）の目撃はひんぱんに発生したけれども、公然たる着陸や地球の個人とのコンタクトは事実上中断した。とにかくアメリカはその期間の大部分、特に宇宙へ心を向けなかったが、これは社会の変化と不安、すなわち市民権と人権をめぐる闘争、暗殺をめぐる緊張状態、ベトナム戦争に対する高まる反対などのためである。

しかし一九七〇年代のはじめにわれわれの探査機が火星と金星へむかって打ち上げられたとき、スペース・ピープルは自分たちがまだそこにいることをわれわれに知らせようとして、多くのUFO目撃を可能にした。たしかに一九七三から七四年にわたる世界的な目撃ブームは、報告の数においてそれ以前のUFO活動のすべてを超えていたし、大衆の関心をよみがえらせたのである。

ペルーのアダムスキー型円盤撮影事件

UFO問題に関する議論がまたも始まったし、新刊の本が発行された。意味深長な記録文書としては短いが、推測に長くかかるような内容の書物類である。近い過去に実際に発生した事件を「あれは真実だったのだ」とふたたび断言するかのように、UFOはしばしば写真撮影の範囲内に入ってきた。

その最もよい例の一つが一九七三年十月にペルーのリマ付近で発生した。一人の建築家がわずか四十五メートルの距離から一機のスカウトシップ（円盤）の素晴らしい写真を撮影したのである。

その人、ウーゴ・ベガは宅地を探すためにリマ近郊へ客を案内した。リマ川にそった地域を調べていたとき、ベガと客は谷底に一つの輝く物体があるのを見たのだ。物体はゆっくりと二人の方へ前進してきた。

ベガ氏は急いで自分の車まで走り、ポラロイドカメラを取り出した。数秒後に彼は引き返し、物体が約四十五メートルの距離で地面から十八メートルの高さにきたとき（これは谷底の上方の高台にいた目撃者たちの目の高さによるもの）、彼は写真を撮った。

すると突然、物体は方向を変えて高く張られた電線を避けてからスピードを上げて視界から消えていった。

ベガ氏は言っている。

「その物体は頂上にドームのついた、スープ皿をさかさにしたような形でした。ドームのてっぺんには丸い物があって、一定のスカイブルーの色光を放っていました。ドームの下方には船の丸窓に似た小さな窓が一列に並んでいるのが見えましたね」

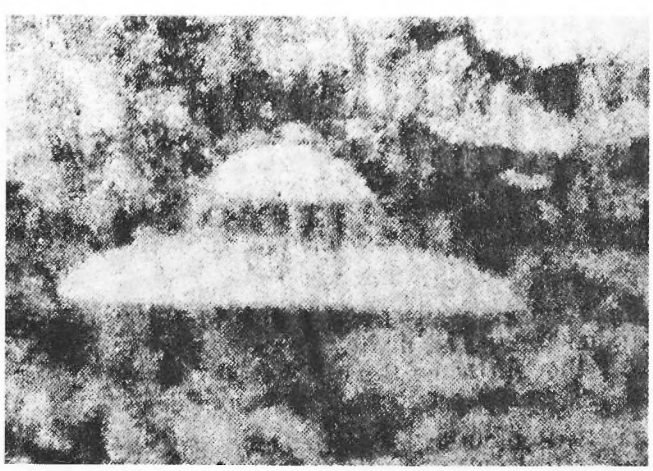
その宇宙船自体はつやのある銀色を帯びていた。まん中のフランジ（スカート状に広がった部分）の下部から赤っぽい光が点滅していたが、それは物体の推進力のためであるように思われた。

また船体支持部の中に〝ダマゴを半分に切ったような突起物〟がいくつかあるのを彼は見た。

二人がその物体を約三十秒間見てからそれは消えていった。

「私が空飛ぶ円盤を見るとは全く思いませんでした。ましてや写真を撮るとは――」とウーゴ・ベガは言う。「世界最高のカメラを使ったとしても、また先週金曜日と同じようなすごい幸運に見舞われるだろうと思います。三インチかける四インチの写真のまん中に空飛ぶ円盤が写っているのを見ることができました。丸窓の列さえ見えますよ。この体験以後、私は空飛ぶ円盤は本当に存在することを確信しています。私のお客さんもそうです」（原著注＝この事件はサンフランシスコ・エグザミナー紙一九七三年十月二十三日号に掲載）。

この写真と記事は世界各地の新聞に掲載された。ベガ氏の写真と説明はアダムスキーの金星のスカウトシップと一致している。

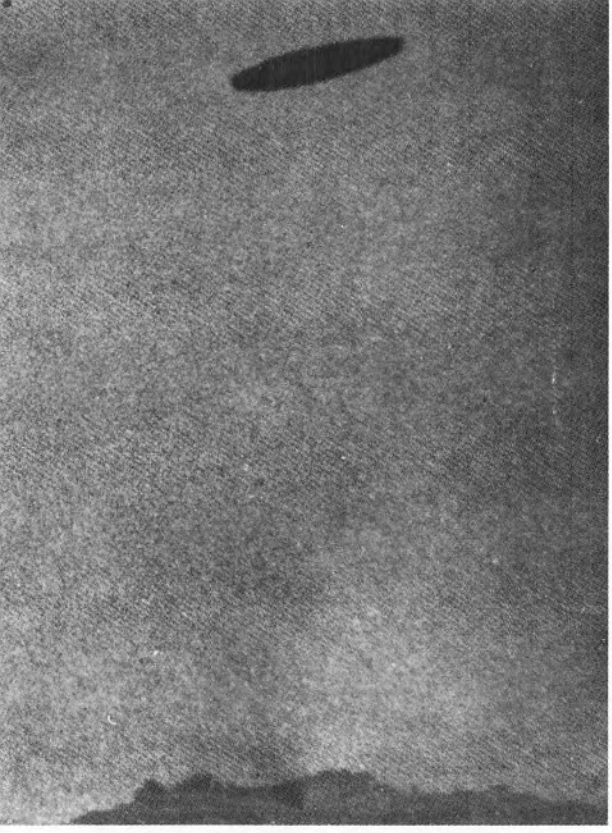


◀ウーゴ・ベガ撮影のアダムスキー型円盤

日本人高校生もアダムスキー型円盤と母船を撮影

日本の一高校生が広島県尾道市の自宅付近を低く飛ぶ宇宙機の写真を撮った。一九七四年十月十一日の朝、藤松和彦少年は自分の寝室の窓から外を見て、巨大な葉巻型物体が北西の方向へ飛ぶのを見た。と同時に吊鐘型円盤が反対の方向から自宅の方へゆっくりと飛んで来た。

目撃者はすぐにカメラをつかんで、宇宙船の写真を数枚撮った。その三枚の写真には近くの住宅地の上空を飛ぶ吊鐘型円盤が鮮明に写っているし、他の二枚には大接近した母船を示している。



▲藤松和彦君が撮影した母船。これが最初に出現して上空を北西の方向へ飛んだ。

ヘリコプターを救出したUFO

ローレンス・コイン大尉はクリーブランド・ホプキンズ国際空港を基地とする第三一六メディバック部隊の隊長だった。

一九七三年十月十八日、彼はクリーブランドへむかって三人の乗員とともに陸軍のヘリコプターに乗って飛んでいた。このヘリコプターが約七百五十メートルの高度で飛んでいたとき、乗員の一人が遠くに赤い光を発見した。そして数秒間以内にその動く色光はヘリコプターめがけてまっすぐにやってくるように見えた。

コイン大尉は戦闘機かと思い、衝突を避けるために急速に機体を降下させたが、五百四十メートルまで降下しても、その物体は衝突のコースからそれようとしないのだ。全員は衝突を恐れて緊張した。

ヘリコプターが四百五十メートルの高度まで降りたとき、接近してきた物体はヘリコプターの上空約百五十メートルの位置で停止して片側に傾いた。

コイン大尉と乗員が外を見ると葉巻型の船体が見えた。鼻先に赤い色光が輝いており、船尾から柔らかいグリーンの光が出ている。

ヘリコプターをなおも下降させながらコイン大尉は計器盤を見てびっくり仰天した。高度計はヘリコプターが

▼母船が去ったあとで反対方向から出現したアダムスキー型円盤。

四百五十メートルから千百メートルまで上昇していたことを示しているのだ。

この突然の上昇は数秒間を要しただけで、乗員たちはヘリコプターが上昇するときに通常経験する〝引っ張り上げられるような感じ〟を起こさなかったのである。

するとヘリコプターは千百メートルの位置でわずかに揺れて停止した。そして乗員たちは別な物体が北東の方へ飛んで行くのを見たが、やがて視界から消えてしまった。

三十分後に基地へ到着してからコイン大尉と乗員たちはすごい飛行体験を報告したのである。

これはたんなるUFO目撃どころではない。UFOの飛行コースが低空で飛ぶヘリコプターの機内で偶然にパニックを起こしたために、UFOが救援行動をとったのだ。危険な急降下からヘリコプターを引っ張り上げて、安全な高度まで持ち上げることによって、UFOは物理的にその可能性の実演をやってみせたのである。

続いて宇宙船の重力場からヘリコプターをそっと解放したあと、宇宙船は飛行を続けたのだ。

宇宙から来た訪問者たちは人間を傷つけたり怖がらせたり、騒動を起こさせたりするために地球へ来るのではない。むしろあらゆる種類の平穏な事件または目撃は、ある意味では地球人に何かを少しばかり考えさせるのに役立っているのである。

無数の正規のUFO目撃報告とともに、こうした直接の情報は、地球と、地球へやってくる宇宙文明とのあいだの密接な関連が存在するという確固たる例を確立している。

UFOはどこから来るのか

しかしあの宇宙船群に乗っている友好的な訪問者たちの故郷はどこなのだろうか？

それは一九四〇年代と五〇年代に初めて大挙して出現して以来、全く変わってはいない。つまり金星と火星が彼らのホーム惑星であるらしいということが広く信じられ、論理的にも受け入れられていたのだが、これは宇宙から来る訪問者たちとの公然と知られた個人的コンタクトがそれ以前にあったにしても同様である。

アダムスキーはカリフォルニアの砂漠に着陸した小型円盤を操縦していた金星人と会見したあと、自分の個人的コンタクトの記事を公開した最初の人物である。

一年半後以内に、今度は火星から来た円盤がスコットランドの海岸に同じような着陸をした。この記事はセドリック・アリンガムによる書物の中に充分に記録してある。

この二人の事件に先立ってUFO問題に関する多くの推測や議論などがあったけれども、この二つの事件は金星と火星に人間が居住することの筋道の通った根拠を確立した。そしてこのいずれのケースも地球へ来る宇宙船の鮮明な、大写しの、日中の写真によって立証されている唯一の〝二件のコンタクトケース〟である。

このタイプの導入による説明は、当時のオーソドックスな科学的学説をひどく刺激したけれども、もっと知的な科学的思考をもつ人々のなかでは、証拠写真類が少なくとも健康な懐疑論と筋の通った議論によって討論されたのである。

年月の経過とともに目撃が増加するにつれて、証拠写真類がもはや無視され得ない状態になり、大体に科学界も次第にUFOを実在する現象として認めるようになった。

しかし来訪する宇宙船の真実性がゆっくりと市民権を得るにつれて、近隣の惑星群の生命の可能性に関する考えのすべては肯定されなくなった。人類は実際には年月の経過につれてますます混乱するようになったのだ。科学団体だけを非難するわけにはゆかない。UFOの飛来の背後にひそむ謎を深めたのは、一九六〇年代と七〇年代に政府機関による〝真実の惑星に関する発見事〟の検閲だったのである。

金星と火星はわれわれの太陽系内の他の惑星群と同様、宇宙船（UFO）のホーム惑星である。もちろんそのことは本書の前提の一つである。これは私がのちの各章で最新の宇宙科学の記録を持ち出しながら、科学的見地から充分に述べることにしよう。

セドリック・アリンガムのコンタクト事件

しかしまずセドリック・アリンガムの体験を詳述することによって、大衆が火星とUFOとの関係について最初の知識をどのようにして得たかを再考してみたい。

彼の著書『火星から来た空飛ぶ円盤』は一九五四年十月にロンドンで刊行され、翌年アメリカ版が出た。

セドリック・アリンガムは文筆家、教育を受けた科学的観察者として、勉強好きな素質を持っていた。彼は十インチ反射望遠鏡を所有し、有能なアマチュア天文家になっていた。

彼は一九四七年に初めて空飛ぶ円盤の報告について聞いたが、それを（別な惑星から来る）宇宙船の証拠としてすぐに受け入れるようなことはしなかった。しかしアリンガムは可能性はあると思っていた。というのは、金星と火星の進歩した人類の存在を否定すべき真実の証拠はないことを、彼自身の専門家としての読書や研究によって知っていたからである。

しかし数年以内に円盤存在の証拠が着実にふえていたし、多くの報告や写真類が世界中で広まっていた。

すると一九五三年にレスリーとアダムスキー共著の『空飛ぶ円盤は着陸した』（邦訳版『宇宙からの訪問者』第一部に収録）が刊行された。この最初のコンタクトに対するアリンガム自身の反応は次のように述べてある。

「ほほう、ついに起こったなあ」

彼は記録されているあらゆる目撃報告があるので、コンタクトは早晩発生するはずだと考えていたのだ。そしてアダムスキーは専門家によるテストに合格した納得のゆく宇宙船（ＵＦＯ）の写真類を撮ったのだとつけ加えている。

しかし一九五四年二月には、セドリック・アリンガムは円盤のことや最近の目撃報告などについて考えてはいなかった。彼は数週間、仕事でロンドンに行っており、ロンドンから離れて充分な休暇をとることを待ち望んでいた。以上がアリンガム氏のその年早くスコットランドをめぐる旅に出ることになった経緯である。

二月十八日の朝、アリンガムはスコットランドの北部海岸を物思いにふけりながら歩いていた。そのとき最初空中に輝く光点を見た。彼は素早く双眼鏡の焦点を合わせたが、続いて日光の中にきらめく金属の宇宙船を目撃したのである。

双眼鏡の高倍率によってアリンガムは船体の丸いドームと球型着陸装置を確認したと思った。それから彼は物体が雲の上へ飛ぶ前にその写真を三枚撮影した。

その場所にとどまって少なくとも三十分間空を探索した後、アリンガムは座り込んで昼食をとってからまた海岸ぞいに歩き続けた。彼はその宇宙船がもう一度見えないものかと熱心に望んでいたので、空を注意し続けていた。

二時間少々たってから、またもチラリと物体を見たが、流れる雲がふたたびその光景を消してしまった。そしてその日の午後初めてアリンガムはちょっとしたコンタクトのチャンスがあると感じたのである。

三時四十五分頃、彼はシューッという音を聞いた。振り向くと円盤が海を越えてやってくるのが見える。着陸するのだなと思ったので、最後の下降をするときに数枚の写真を素早く撮った。

四十五メートルの距離からアリンガムは宇宙船が数秒間空中に停止するのを注目した。金属の船体が柔らかく輝く光を放っている。続いて宇宙船は着陸した。

直径十五メートル、高さ六メートルとアリンガムは推定した。吊鐘型で、ドームと三個の球型着陸装置があり、それに中央部の壁のまわりに少なくとも二群の丸窓が並んでいる。アリンガムは素晴らしい宇宙船の方へ歩み寄った。

引き戸が開いて一人の男が船体から降りてきた。二人は手を振って互いに接近した。アリンガムは相手が完全に人間であったのを見ても驚かなかった。実際彼は、「かりに相手が地球の衣服を着ても、地球人として通用するのに何らの支障はないだろう」と述べている。相手の男は三十二歳ぐらいで、皮膚の色は濃い黄褐色である。

その男は火星から来た

知りたいと思った最初の基本的な問題は、その男がどこから来たのかということだった。エンピツ、手帳、ジェスチャーなどを用いて、アリンガムは相手が地球の軌道の外側の最も近い惑星すなわち火星から来たということを知るのに成功した。アリンガムはこの回答が最重要であると感じ、この答が間違いないことを確証することにも成功した。しかも彼はこの友好的な会見のあいだ、宇宙人が目と唇で楽しそうに微笑しているのに気づいていた。

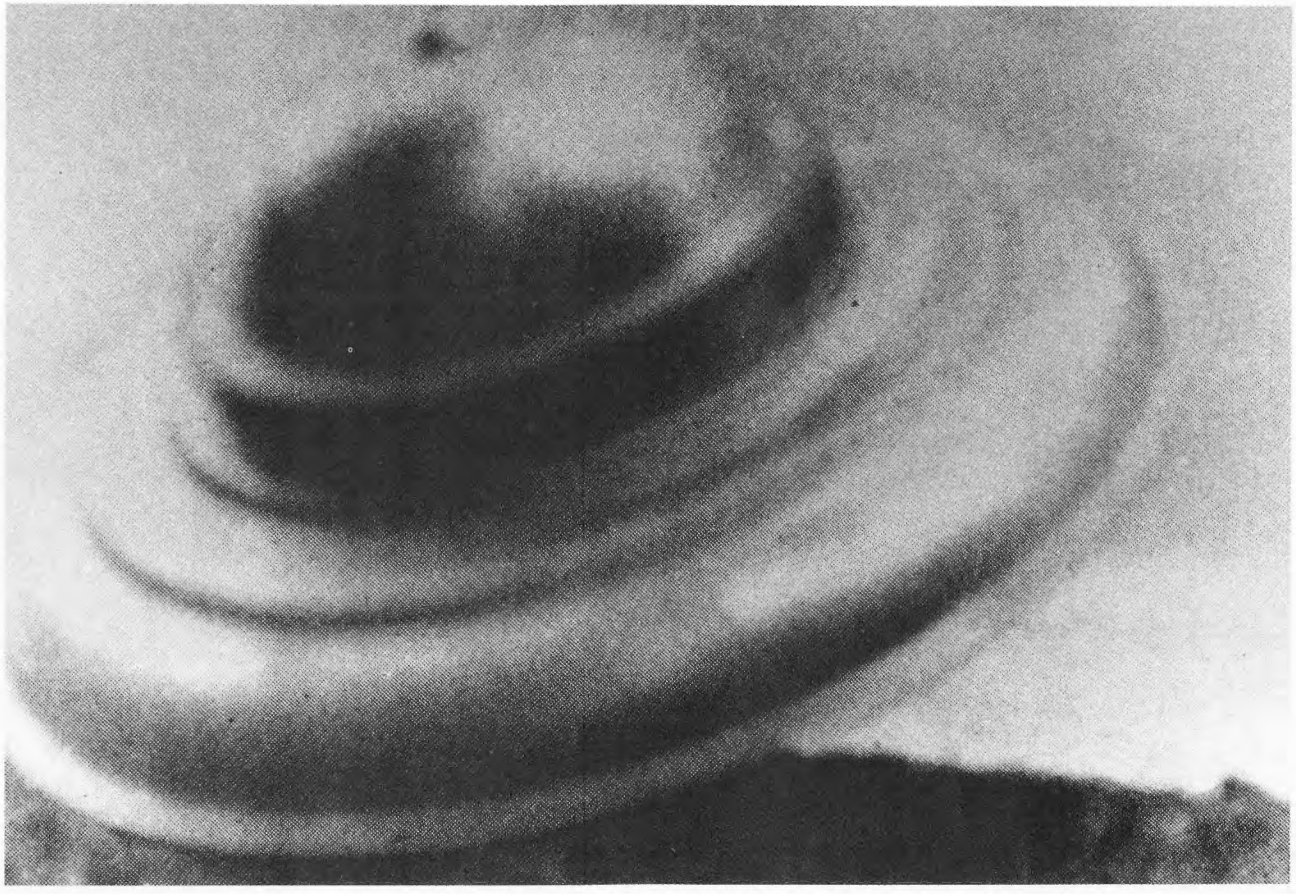
アリンガムは、二人が共通の言語を持たないにもかかわらず、かなりうまく意志の疎通ができた様子について興味深い説明をしている。彼は火星人と金星人が月面に立ち寄ったりしながら宇宙空間の活動において協力し合っていることをうまく確認した。別な質問に対して相手は金星に行ったことがあるとほのめかした。水星に関して同じ質問をすると、相手はノーと答えた。

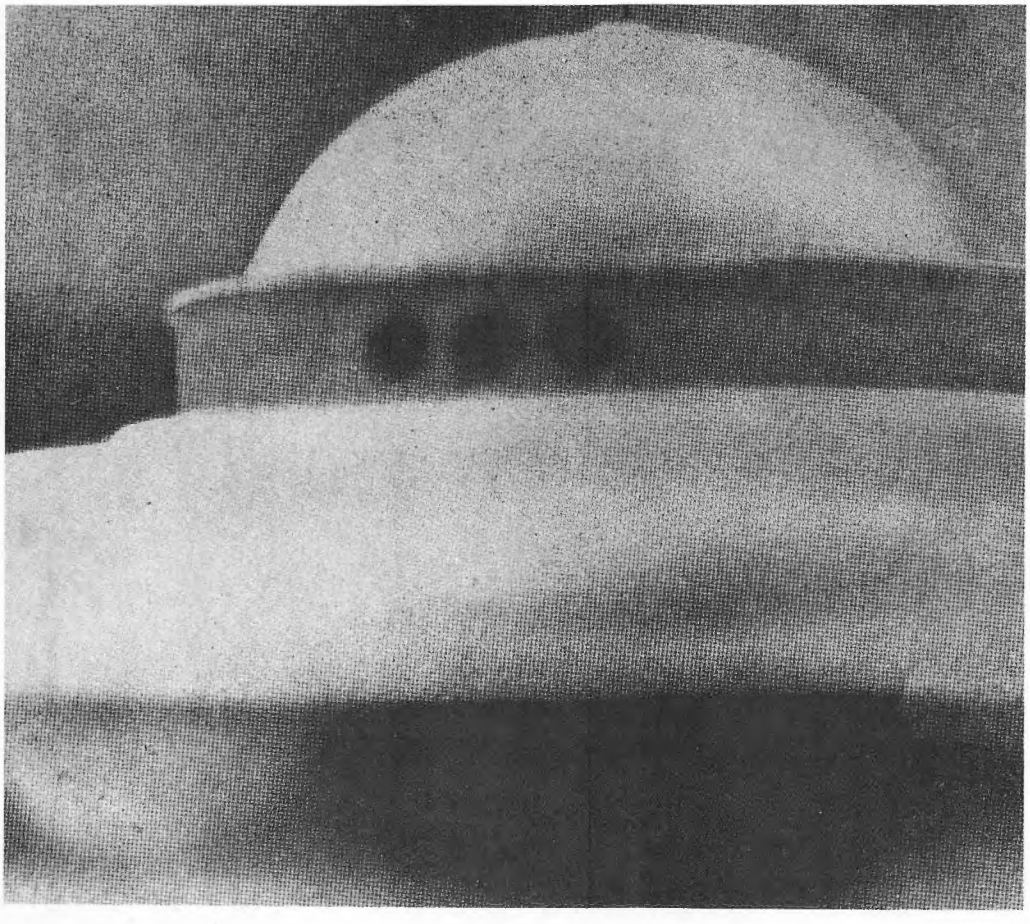
この火星人が水星へ行ったことがないと結論づけるのは筋が通っているように思えるだろうが、アリンガムは相手の回答を「いいえ。その惑星には人間が住んでいないから」ということを意味するのだと不可解な解釈をしている（原著注＝水星の問題については第十一章で論じるつもりである）。

火星から来た男は彼自身の質問を二、三出した。地球人は新たに戦争をやろうとしているのか、月飛行を計画しているのか、それらを知りたいと言うのだ（この会見は一九五四年に行なわれたことを想起されたい）。

アリンガムは最初の質問に答えられなかったが、二番目の質問には確実な回答をした。宇宙人はかなりきびしい顔付きをしたように見えた。地球人が月や他の惑星を訪れるために宇宙飛行を学ぼうというアイデアは、平和に暮らしている宇宙人たちによって熱意をもって迎えられないだろうと、アリンガムは自分に言い聞かせた。地球人は自分たちの惑星を統治する能力がないことを示しているのだから、同じ態度で宇宙へ進出することを彼らは望まないだろうとアリンガムは考えたのだ。おそらく地球人は彼らに悪影響をおよぼすか、あるいはおびやかそうとするだろう。

時間がなくなってきたと火星人が言うので会話を終えねばならなくなった。アリンガムは二人から約十八メートル離れた所に着陸しているスカウトシッ





●セドリック・アリンガム撮影の火星の円盤

上は一九五四年二月十八日午後四時近い頃、スコットランド北部のロシマウスとバッキーの間の海岸に着陸寸前の円盤。下は着陸した円盤。

▲10インチ反射望遠鏡のそばに立つセドリック・アリンガム。

▲火星人が円盤の方へ歩いて引き返す姿を斜め後ろからアリンガムが撮影したという写真。男は鼻に特殊な呼吸装置をつけていた。

プ（円盤）の写真を撮った。そして宇宙人が円盤の方へ歩いて帰ろうとするときに、その男を素早く撮影した。火星人が正面向きの写真撮影を許してくれるとは考えられないので、アリンガムが充分な横顔をなんとか撮れたのは幸運だった。

パイロットは円盤の中へ入った。そしてまもなく柔らかいブーンという音が聞こえて円盤は静かに空中へ浮き上がった。

ゆっくりと円盤は約十二メートルの高度に昇り、それからものすごいスピードで上昇し、アッというまに空の彼方へ消えていった。着陸、会見、離陸に要した時間は三十分にすぎない。

しかし彼が著書に述べた説明は疑い深い世界を驚かせた。アリンガムは、アリストテレスの時代以来ずっと科学者が知ろうとしてきた物事、すなわち近隣の惑星群には進歩した同情心に満ちた人類が住んでいるという証拠をつかんだことを知った。

アリンガムは自分の考えをまとめて、カメラ道具をしまい込んでから町へむかって出発した。自分の特権的な体験を回想しているうちに、彼は一人の土地の漁師に出会ったが、その人も約四百五十メートル離れた距離からアリンガムの会見の最後の数分間を見たし、円盤の離陸も見ていた。彼は署名入りの陳述書で自分の証言をしたのである。

アリンガムは一週間ばかり北スコットランドに滞在してからロンドンへ帰った。フィルムを現像したときに彼は書物を書く必要を感じたが、大急ぎで記事を本にするよりも、もっと多くの調査をやり、正当な科学的方法で完全な事実を提示するべきだと考えた。本当の義務は自分の発見事を永久的な価値のあるかたちで世界に提示する準備ができるまで待つことにあったとアリンガムは説明している。

セドリック・アリンガムの『火星から来た空飛ぶ円盤』は、その事件と時代を考えれば異色の意味深長な記録文書である。この本は一九五四年に書かれたが、それは宇宙時代の始まる数年前だった。彼は自分の異常な体験（自分でも完全な真実であることを知っていた）と、その当時の既知の天文学とをていねいに釣り合わせた（その頃の天文学はまだ幼児期にあり、せいぜい教育による推測にすぎないことも彼は知っていた）。

訓練された科学的観察者としてアリンガムは自分の調査をよくやったが、その結果、明快な理解の容易な本となったのである。彼は自分の事件を簡潔に提示するためにかなりの努力をしたのだ。

アリンガムの本が出てからまもなく、ウェイヴニー・ガーヴァンが次のように書いている。

「『火星から来た空飛ぶ円盤』は科学的意見を持つ人に対して、本当にぞっと

するような刺激を与えている。もしアリンガムが真実を語っているとすれば、アダムスキーの体験公開にすぐ続いて出た彼の体験記は、結局空飛ぶ円盤の存在の最後的な証明になる」

第3章　惑星の探査

愚行を続ける地球人

バードランド・ラッセルはかつて人類の歴史を一行で書いたことがある。「アダムとイヴがリンゴを食べて以来、人間は可能な限りの愚行をやめたことはない。終わり」

（訳注＝ラッセルは一八七〇年に九十八歳で没したイギリスの偉大な哲学者、社会思想家、数学者）。

辞書によれば愚行（folly）という語を、「バカげた、または破壊的な結果をもたらす、高くつく企て」と定義してある。

今日人類の究極の愚行は、核兵器のぼう大な貯蔵にある。自分の無知を守るために人間は常に周囲のあらゆる物を複雑にしようとしてきた。この惑星上の生命の存在そのものまでもおびやかす所まで行きついたのだ。

人間はあらゆる物事をもっと簡単にやれるはずだが、そうはしないのだ。貪欲が人間の思考の中で支配的な力となっている。平和な調和のとれた共存は完全に不可能になったほどだ。ゆえに人間の側の愚行である。

核兵器の狂気に対抗する議論のすべてといえども、ただ一つの物事をも変えてはいない。われわれは依然として毎日のように死の爆弾を製造している。核絶滅に至るこの執拗な思慮のない道を変更し得る唯一の方法は、人々が宇宙に関する真相、太陽系内の進歩した宇宙文明に関する真相を知らされることにある。

そうすれば人々は、偽善的に世界を安全にするために核兵器で世界を武装しようとして、先頭に立って三兆ドルの予算をとりつける指導者たちを選挙で出したり従ったりはしないだろう。

今まで言われてきたことだが、われわれは次のような時代にいるのだ。

「われわれは生きた人間と戦っているのではなく、権力や、この世界の暗黒の支配者、高い地位にいる精神的な邪悪さと戦っているのだ」

われわれはこの頃発生している物事を無視して、しかも自分を知的だと称するわけにはゆかない。

世界の出来事の成り行きを評してアルバート・シュバイツァーは次のように言った。

「われわれは愚行を捨てて真実に直面するための洞察力と勇気を奮い起こさねばならない」

（訳注＝シュバイツァーはフランスの生んだ偉大な神学者、哲学者、音楽家、医師。アフリカ・ガボン共和国のランバレーネで独力で病院を経営し、黒人の医療救済に約五十年間従事して、〝密林の聖者〟と謳われた。一九五二年にノーベル平和賞を与えられている。六五年に九十歳で没した）。

右の言葉と同じ態度をわれわれもいまや宇宙とUFO問題にあてはめねばならない。

無知な状態からのがれよう！

社会はこれまで促進されてきたナンセンスな物事にあまりにも長く自己満足し、スペース・ピープル来訪の背後にひそむ真実に対して無関心でありすぎた。同時に強力な勢力が、利用できるあらゆる手段を用いて宇宙問題で大衆を混乱させ、真実を隠そうとしてUFO問題を複雑にしたのである。

きわめて長いあいだ――長すぎたのだが――真相の隠蔽があると指摘されてきた。今はこの隠蔽を明るみに出し、隠されてきたものが何であるかを正確にする時である。多くの複雑な事よりも複雑でないほうをわれわれは必要とする。われわれは物事を簡単にするように解放されている。真実というものは複雑ではない。それは人間の干渉によってそうなるにすぎないのだ。われわれは干渉を除く必要がある。そうすれば真実はひとりでにだれにも理解されるようになる。

無知は至上の幸福だといわれてきた。だが無知は全然自由ではない。無知は今世紀に人類を間違った方向へ導いた〝屁理屈〟から自由を与えてはくれないのだ。

この戦争だらけの世界のとるにたらぬ戦争、説教、唯物論的な主義のすべてを超えた知識と真実が存在している。しかし人間は（社会も）この知識を知るように努力しなければならない。そうすれば型にはまった唯物論的な主義主張から脱却できるのだ。

世界中の空に出現する惑星間宇宙船（UFO）の目撃例は毎日平均百件あると控え目に見積もられてきた。これらの物体が存在するかどうかについて、疑っている権威者にたずねる必要はない。宇宙船はここにいるのだ。回答を必要とする質問は、宇宙から来るこの証拠物の背後に何がひそんでいるかにかかっている。

UFOとは何か

UFO目撃報告についてある科学的研究をまとめた結果として、一九七三年に『ユーフォロジー・科学と常識からの新しい洞察』が出版された。この本はジェームズ・マキャンベルによって書かれたもので、著者は科学と工学の多彩な業績により『アメリカ科学人名録』と『国際原子紳士録』に加えられている人である。

彼のユーフォロジー（UFO学）に対する有能な研究は正確な納得のゆく証明を与えた。つまり空中や地面に近接したUFOの観察された物理学的な結果は、われわれの現代の科学知識の理解と一致しており、それによって理解できるだろうというのだ。

これが意味するところを簡単な言葉でいえば、UFOとは地球の大気圏内で作動している固体の、三次元の、物理的な宇宙船であるということだ。唯一の相違は、彼らは宇宙空間の自然の電磁エネルギーを動力にして進歩した推進法を応用しているのだが、一方われわれは人工的な方法を用いて引力とたたかっているという点にある。

広範囲にわたる報告されたコンタクト事件についてははっきりしないけれども、マキャンベルによるUFO着陸事件と近接着陸事件の分析によって、彼は飛来するUFOに乗っている人物に二つの明瞭な種類があるという結論に達した。

つまり、われわれ平均的地球人の身長と同じ高さのスペース・ピープルがいるということと、もう一つはわれわれの平均身長よりも三十センチ以上低い人々がいるということである。マキャンベルの観察によれば、この二つの異なるタイプのUFO乗員は、大体において別々に地球のまわりを飛んでいるという。ただし彼らは冒険をやることに協力し合っており、おそらく同じ場所から来るのだとマキャンベルは信じている（私はその場所をわれわれの太陽系と定義している）。

有史以前の小人族

われわれ自身の惑星にも進歩した文化が存在してきた。その地理的に分布した住民は、分離した別々な小さな人々の種族であった。彼らはこの一万年続いた文明の期間以前に世界の異なる地域に存在していた。彼らの石造建築物の考古学的な発見によって、入口、階段、通路、天井などは背の低い成人――一・二メートル以下――の共同社会のために作られていることがわかったのである。

彼らの巨石建造物の扱い方と構造は、彼らが引力を克服するために失われた技術の一つ、すなわち一種のパワーを再発見したことを示している。世界の大洪水に先立って存在した小さな人々に関する多くの伝説が、アジア、ポリネシア、中央アメリカインディアンのあいだにある。

この証拠について非常に詳細な研究がM・K・ジェサップの著書『UFOに対して拡大する問題』で述べてある。右に述べた短い説明は彼の広範囲な独自の研究の断片にすぎない。

彼はこの一千年間、地球上に別々に分離した小人の種族が存在し、そして今日のピグミー人に何らかの関連があるかもしれないことを発見した。近頃の地質学の時代に、この地球上に小さな人々の分離した文化が存在したからには、別な惑星の文明にも現在の住民のあいだに異なる大きさの人間がいるとわれわれは考えてよい、という結論にジェサップは達したのである。これをもっと拡大して考えると、われわれは、同じ場所からやってくる宇宙の訪問者たちもこのような異なる変化を示していると考えてよい。

以上がマキャンベルの指摘する所である。多くの目撃記事は宇宙船を操縦する普通の大きさの人間のことを報告しているが、小さな体格の乗員に言及した報告もある。しかも彼らは同じ惑星文明から来ることもあり得るのだ。

UFOは科学的な観察に来る

ここで述べたいことがある。別な惑星から来る宇宙船が地球を訪れる最大の理由は、純粋に科学的な性質を帯びたものであるということだ。彼らは基本的には地球人を観察するために来るのではない。彼らは地球人の何たるかを知っているのである。

彼らは自分たちの科学的な装置を用いて、地球の大気圏内や惑星のまわりの空間で発生する自然の変化を観察し研究しているのだ。太陽の電磁場の不変の活動との直接の関係における地球の磁極の変化、磁場や重力場などすべての変化の観察である。太陽と太陽系の全惑星群のあいだにはバランスのとれた複雑な関係がある。

また、彼らスペース・ピープルが地球を観察する基本的な重要点は、人間がどのようにして自然の惑星環境を乱してきたかにある。地球大気の手のつけられない汚染、絶えまのない核実験から引き起こされる地殻内の不自然な緊張と圧迫など――。スペース・ピープルはわれわれ地球人の〝進歩〟を絶えず期待している。こうした事実は次の論説に光を放つだろう。

UFO着陸や報告されたコンタクトのほとんどすべての実例は、普通の背丈の人間との会見として述べられている。通常は一・五メートルから一・八五メートルまでの身長である。ただし、たまたま身長一・三五メートルあったサルバドール・ビリャヌエバの宇宙人も含めてよい。

権威者たちは次のことも知っていた。たぶん同じ惑星から来るのだろうが、背の低い別なグループがあり、これも

地球を偵察していたことと、さらにこのグループは明らかに地球人とコンタクトをする計画を持たなかったことなどだ。

彼らの冒険は基本的には科学的な調査と観測活動にあったことと、着陸や、他のグループにとって必要だと思われたコンタクトならすべて、そのグループにまかせたと思われる。

フランク・スカリーの著書『空飛ぶ円盤の内幕』には、この小人グループが地球の科学的調査に関連していたという第一の証拠があげてある。アメリカが大気圏内に核爆発実験を始めた後に、別な惑星から来た人々によって熱心に行なわれた調査である。

墜落した三機の円盤と小人乗員

一九四〇年代後半の各事件のなかに、故障を起こした三機の円盤がアメリカ南西部に落ちたことがあった。どの場合も近くの実験場の米陸軍がただちにその地域に非常線を張り、科学研究で政府と契約しているトップ科学者連を急行させた。

各円盤の乗員は死体となって発見されたが、円盤は地面に撃突したのではなく、明らかに何かの自動誘導装置によって軟着陸していた。磁気研究に従事していた地球物理学の科学者連が調査に派遣され、円盤の分解作業を手伝った。一九四九年に発生したこの墜落事件の完全な内容をスカリーが知ったのは、これらの科学者たちから聞いたからである。

収拾された最初の円盤はニューメキシコ州アズテクから東へ十九キロメートルの牧場へ送られた。八人の専門家の一団が招集され、空軍を援助して、船体を調査して解体し、政府関係の実験所へ送られた。内部へ入る方法を発見した科学者たちは、十六人の小人乗員が乗っていたのを見いだした。

彼らの死体は身長九十センチから一・二メートルまでで、あらゆる点で普通の人間だったが、何かの未知の大激変によって皮膚がひどく焦げていた。この致命的な事故の考えられる要素の一つは、船室内の気圧の突然の減圧であったかもしれない。というのは、円盤の丸窓の一つにエンピツほどの大きさの穴があいていたからだ。死の原因についてはあとでもう少し述べることにしよう。

船内にあったあらゆる機械装置や物品が調査された。船体の外側はアルミニウムのような色を帯びており（訳注＝アルミニウムだったという意味ではない）、外観は巨大な円盤に似ていた。

外部の寸法が注意深く計られたが、船体は「九」の数大系で建造されていた。この円盤は直径が九十九・九フィート（二十九・九七メートル）で、中央の船室は十八フィート（五・四メートル）、高さは七十二インチ（一・八メートル）ある。円盤の底に設置してある船室の縦の寸法は船体の外縁部より二十七インチ（六十七・五センチ）下方へ、四十五インチ（一・一三メートル）上方へ伸びている。

収拾された二番目の円盤はアリゾナ州へ送られた。この船体の状況は一番目のそれと似ていたが、この円盤は直径が七十二フィート（二十一・六メートル）あった。十六人の乗員は、円盤のドアーが開いたままで発見されたときから、わずか数時間前に死んだのである。死因としては大気圧の突然の変化が致命傷だと最初に推測されたが、この事故で皮膚を焼くようなものは何もなかったのだ。

医学的見地からみて、彼らは完全に普通の人間であった。彼らの歯は完全であることがわかった。どの口にも虫歯の穴や充塡材などはない。男たちは白い皮膚をし、通常の肺と血液を持ち、われわれの年齢の標準にしたがえば、三十歳代であると判断された。

無傷で落ちた三番目の円盤は、直径三十六フィート（十・八メートル）の小型機で、二人の乗員によって操縦されていた。これはアダムスキーが撮影した金星の円盤と同じ型である。というのは科学者がスカリーにむかって、三個の球型着陸装置の精巧な機能を説明しているからだ。この円盤はフェニックス市郊外のパラダイス渓谷と呼ばれる地域で収拾され、広範囲に調査されたあと、オハイオ州デイトン市のライトパターソン空軍基地へ送られた。

北極海の円盤墜落事件

スカリーの著書が刊行されてから二年後に、新たな注目すべき事件が発生した。スピッツベルゲン（訳注＝ノルウェーの北方六百キロメートルの北極海にあるノルウェー領の群島）に住む人々が、空中から落下する謎の物体が遠い地域に撃突したのを見たと報告したのである。これは一九五二年のことであった。

ノルウェーの当局はただちに軍を派遣して事故現場を探索させた。すると破壊した円盤が発見されてノルウェーのオスロへ輸送された。オスロでは、この宇宙船は地球で作られたものではないという決定的な線が出た。アメリカとイギリスの専門家が派遣されて、発見物を調査し、ノルウェー政府当局に対して厳重な検閲の必要を説いたのである。

しかし一九五五年五月にこの話は内閣の一高官によってイギリスの新聞社に洩らされたのだ。この高官はロンドンの有名なジャーナリストであるドロシー・キルガレンにむかって、イギリスの科学者連が謎の宇宙船の残骸を調査したと話したのである。この宇宙船の収拾は、こうした空中の物体の目撃が目の錯覚でもなければソ連の発明品

でもなく、別な惑星から来る本物の空飛ぶ円盤なのだと、その高官がしゃべったのだ。

スカリーの本によれば、円盤が墜落したのは地球大気圏内の磁気断層地帯に遭遇したからだと考えられている。こうした大気中の不自然な状態は、核爆発実験の結果ではないかと思われた。三機の収拾された円盤を調査した後、これらの円盤は惑星の周囲や宇宙空間の磁力線から推進パワーを取り入れていたと科学者は確信したのである。

こうした初期の墜落後、スペース・ピープルは地球の乱れた磁場を探り出す方法を学んで、この断層を安全に飛行する方法を解決したらしい。

数百機の円盤が飛来

彼らが三機の円盤を墜落させた初期の失敗の原因を克服したことを誇示するかのように、一九五〇年三月十七日に円盤群が大挙して出現した。ニューメキシコ州ファーミントン市の住民の半分以上が、同市の上空を飛ぶ数百機の宇宙船を目撃したのである。それらは考えられる限りのあらゆる角度で飛んだり、信じられないようなスピードで方向転換をやったりしたし、追いかけっこをしたり、一時間以上も空中にとどまったりした。

その宇宙船群は地球の飛行機よりもはるかにすぐれた機動性を示したし、どんな疑惑をも解消させるために、うんと接近してきたので、観察者たちは銀色の円盤型の宇宙船を容易に見ることができたのである。

翌日の新聞は次のような大見出しを第一面に掲げた。「円盤の大船団、フォーミントンを驚かせる」。近くのラスベガスの新聞は次のような大見出しを載せた。「宇宙船団、センセーションを起こす」

一九四七年から五〇年までの期間に報告された数千件の目撃事件に見られるように、大衆の好奇心は促進されつつあったのだが、今度は全く劇的であった。しかしアメリカ南西部に着陸した円盤の初期の収拾によって、政府の情報機関や軍部は、地球以外の惑星に生命が存在することを知ったし、空飛ぶ円盤が実在することも知ったのである。

唯一の疑問は「彼らはどこの惑星から来るのか？」であった。前記の初期の墜落の調査に関係した人々は、金星または火星、それともこの両方に人間が居住していそうだと推測した。そして実際、これらの惑星は当時、多数の宇宙船を造り出して、円盤目撃報告のすべてを生ぜしめたのだ。

スカリーの著書は正しかった

こうした事実のすべてを知らない少数のずけずけものを言う批判者はスカリーの『空飛ぶ円盤の内幕』を非難し、続いてこの書物をインチキだとするために情報をでっちあげたのである。この書物が議論の的になることを充分に承知していたスカリーは、自分が述べた諸事実は正しいものであると断固たる態度で断言した。

スカリーは関係した科学者の二人を個人的に知っていたし、他の科学者たちにも紹介されていた。彼は墜落した円盤の一機から収拾された二、三の物品を見ていた。それはポケット型の無線装置、小さな道具類、未知の合金で出来た小さな円板類などである。しかもスカリーは地上にむなしく横たわっている円盤の実写映画も見せられていた。この映画は空軍がこの件を機密化をきびしくする前に磁気関係の科学者の一人が撮影したものである。

大型の宇宙船の場合、地球の大気に対して船室が偶然に開いたので急速な減圧が生じて死んだのだというのが、当時の科学者たちの見解であった。一機の円盤は出入り口のドアーが開いたままになっていたし、他の円盤は丸窓の一つに小さな割れ目があった。墜落する前に、円盤（複数）がアメリカの原爆テスト基地付近の空域に観測されたと思われていた。

核爆発が円盤墜落の原因だった

その当時アメリカは大気中で原爆を実験していた。爆発するごとに莫大な量の放射能が大気中の上方へ放射される。時間がたつにつれてこの放射能雲は風によって次第に散らばり、さまざまの量の死の灰が地上に広がる。死の灰の汚染はひどいものだが、テスト基地上空の大気中に数日間とどまった致命的な放射能雲に比べれば、たしかに薄かった。別な惑星から来る宇宙船はこうした不自然な状態に遭遇したのだ。

ジョージ・アダムスキーはフランク・スカリーの『空飛ぶ円盤の内幕』について次のように言っている。

「これはＵＦＯの問題について書かれた最初の書物の一つであり、当時でさえもこのような事実を認めることを恐れた反対派によってひどく否定されたけれども、この書はまだ全く反証されない書として存続している。別な惑星から来る宇宙船と訪問者たちに関して書かれた数百の書物のなかで、これはその問題に関する比較的数少ない真実を扱ったものとなっている」

一九五七年に印刷された小冊子の中で、アダムスキーは異星人とのコンタクトから直接に受けた次のような情報について説明している。

「初期の墜落事件が発生したのは、地球の大気圏内の放射能がわれわれのエアコン装置に似た方法によって彼らの船体内に取り入れられたときである。乗組員は病気になり、船体のコントロールを失い、そのために致命的な墜落

となった。

こうした多くの災禍があった後、別な宇宙船群の乗組員は状況の調査研究と、このような惨事を避けるための方法を追求し始めたのである。現在彼らはそれに成功している。

彼らは、自分たちの宇宙船が地球の大気圏内を飛行中に各乗組員が身につけるための小さな装置を完成させた。もっと大きな規模の類似の装置が彼らの船内の空気を浄化させるために用いられている。この装置を持たないで地球へ来るスペース・ピープルはいない。この機械は地球の大気圏内のみならずわれわれの食物や水の中にも含まれている放射能に耐えるための保護装置なのである」

小型UFOの乗員たちは個々に地球のまわりを飛行したが、自分たちの活動をスペース・ピープルの主なグループと合わせていた。初期の頃にコンタクトの目的で着陸を初めたのはこの主なグループである。ときとしてこのスペース・ピープルのなかには特別に地球へ送られて、われわれの文明の中で一定期間働く人たちもいた。

地球社会に居住する異星人は何をしているか

地球人と外観が異ならないために、彼らは本当の正体を隠したままで容易に世間を渡ることができた。実際彼らは地球人の理解力不足を知っているので、自分の身分や素性を決して洩らさない。多くのスペース・ピープルは必要な書類を（通常の身分証明書も）入手して自分たちの地球上の〝身分〟を一時的に確立する。こんなふうにして彼らの多くは科学技術を含むさまざまの産業界で働くのだが、しかし異星人であることに気づかれないのである。なかには各国で政府の企画にたずさわった人たちもいる。

彼らが地球の社会の中で住むのには非常に高貴な目的があった。そして数千人のスペース・ピープルが、われわれの宇宙志向の社会になろうとする短い推移のあいだに、世界中にこの種の活動に従事したのである。アダムスキーは後にこのことを次のように説明している。

「スペース・ピープルは、人道主義者が関心を持つのと同様に、地球人や地球人の考え方、行動の仕方に関心を持っている。彼らはわれわれが知的に発展してゆくのを助けようと努力している。彼らは自分たちの考えをわれわれに押しつけようとはしないし、われわれに対して優越的な態度をとることもしない。むしろわれわれの想念や行為に関連する諸法則をわれわれが理解していないことに気づいているので、彼らの調和した生き方の実例を示すことによって地球人に同じことをやる欲求を起こさせることを願いながら、われわれのあいだに混ざって住んでいるのである。

彼らは同胞に決してアドバイズしない。そのかわりに他人に想念を伝える不可解な能力を持っており、それによって地球人は自分に伝えられた想念を自分自身の想念であるかのように思うのだ。こうして地球人はその想念を受け入れてそれに従うのも自由であるし、あるいは他のだれかが自分にアドバイズしたのだという考えを起こすことなしにその想念を捨てるのも自由である（原著者注＝これはスペース・ピープルが地球の産業界、政府、科学的開発などにおけるさまざまな地位を通じて進歩を高め得る方法である）。しかもなにげない会話によって彼らは地球人の眠っている心を覚まさせて、生命と宇宙に関する広大な概念を持たせるのである」

誤解してはならないことが一つある。スペース・ピープルは〝あらゆる物事を知っている〟のではないということだ。彼らは、われわれがそうであるように、地球ですごしているあいだでさえも常に学んでいるのである。しかし彼らはわれわれがこれから認めねばならない生命について多くの事を知っているし、人間が文明化された平和な未来にむかって進歩しようとするのならば、どの方面へむかえばよいかを知っているのである

この立場で役立ちながらスペース・ピープルは、産業界、政府、または日日の世間で周囲の少数の人々に友好的な目立つような印象をしばしば与えている。もし正体が洩れても発生してくる干渉によって妨害はされない。当然のことながら、社会はある人々が別な惑星から来たことを薄々感づいたり信じたりはしないだろう。これは社会がこうした線にそって教えられなかったからである。

ところが多数の人は相手の正体に気づくことなしにスペース・ピープルと会い、いろいろとコンタクト（接触）しているのだ。

スペース・ピープルから信頼されたアダムスキー

きわめてまれなことだが、信用のおける一個人にたいして、与えられる知識からより良き目的が生かされるとすれば、その人に正体が洩らされることがある。

一九五二年に着陸した円盤の金星人と最初の対面をした後、ジョージ・アダムスキーはスペース・ピープルと多くのコンタクトをする機会が与えられた。彼は自分の信頼性、同胞に対する関心、最初のコンタクトの後に真相を伝える能力などのあることを証した。

まったく当然のことながら、アダムスキーは、地球へやってくる宇宙文明についてより以上の理解を促進するために信用のおける人物だとスペース・ピープルが感じた人であった。

一九五三年と五四年のあいだ、彼はカリフォルニア地域で働いて住んでいる少数のスペース・ピープルによってもっと直接にコンタクトされた。そして次に都市（ロサンゼルス）から離れた遠い地域へ車で運ばれて、小型のスカウトシップ（円盤）に乗せられ、短時間の飛行をした。

大型の母船に案内されたとき、アダムスキーは宇宙空間、地球の大気、彼らの宇宙船の作動などについて知った。等しく重要なのは、彼がスペース・ピープル自身について知った事柄である。つまり別な惑星群における彼らの生活、進歩した宇宙文明としての彼らの哲学、太陽系に対する彼らの理解力などである。この別な惑星から来た宇宙船に乗っている男女は、地球の近隣の惑星群である金星、火星、土星などから来たのである。

こうした体験は一九五五年に二番目の書物の刊行となった。『宇宙船の内部』（邦訳アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』第二部に収録）は、来訪する宇宙船に関する真相を伝えたものとして多くの人から認められたのである。

大衆は信じなかった

しかし世間の多数の人は空飛ぶ円盤が地球を訪れているという考え方に対してまだ受容的ではなかった。そして大多数の大衆は、太陽系の他の惑星群に生命が存在し得ることを否定した伝統的な科学上の諸説を信じたがっていた。人間は宇宙空間に進出したときに自分自身を発見するだろうということがよくわからなかったし、空飛ぶ円盤を報告したという根拠は人間が理解しているという証明にならなかったのである。

スペース・ピープルはわれわれの世界が原水爆弾頭を開発し始めた頃に来た。この開発は地球上の未来の文明に対して不吉な脅威であった。宇宙空間と地球以外の生命の方へむかえと人類に警告することによって、あと数年たてば人間は自由意志を用いて、古い破壊的な道から別な道に変わるだろうと期待されたのである。

最初人間の好奇心は無数の空飛ぶ円盤目撃報告を疑っていた。これではどうして人間は宇宙について真相を知るようになれるだろう。これは議論によって決まるのではない。というのは、その頃に地球以外の宇宙空間の状態について、たしかに地球人は何も知らなかったからだ。

真実は哲学の中にあった。それはアダムスキーの著書類の中に述べてある。スペース・ピープルの哲学と生命の理解についてだ。アダムスキーが名誉を高めたのは、同胞の理解のためにその知識を書物にする能力があったからである。

アダムスキーの広範囲にわたる情報は、アメリカの数年後に始まった宇宙時代への突入に先行した。したがって当時それは宇宙に対する伝統的な考え方や一般的な態度に対して挑戦となったのだ。それは別な惑星の環境に関するわれわれの現在の一般の理解に対して今もなお挑戦するものである。なぜならそれは（アダムスキーの著書は）来訪する宇宙船に関する真相を充分に伝えているＵＦＯ関係書であるからだ。本書ではアメリカの宇宙開発がいかにして俗世の私欲追求によって先取りされ、他の惑星の生命から離れて地球がみずから孤立化を続けるようになったかを述べたい。

独自の宇宙科学の研究を始める

私が天文学に関して少し読んだのは一九七四年にアダムスキーの本を読んだあとだった。そこで私は宇宙科学のきびしい追求に転じたのである。われわれの諸学説や最近の宇宙の発見事が何にもとづいているかを正確に知ることは絶対に必要だった。宇宙空間に関するあらゆる声明には、真相の探求に際して慎重に疑問を起こすべきだと感じたのだ。

研究は手間どりながらゆっくりと進んでいった。なぜなら当初私は無計画なコースを出発したからである。しかし私はＵＦＯ問題と宇宙科学の分野は本質的に関連があることを知った。片方の真実は他方に含まれているし、その逆もあるだろう。したがって私はあらゆる惑星の調査と宇宙に関係のある種類の書物、雑誌、新聞などを読んだ。宇宙探査機のデータを詳細に載せた文献を集めて調べた。各種の記事と新聞の切抜きを注意深く分類した。わが宇宙時代の開発に関する糸口やパターンを研究調査するのに無意味なものは何もなかった。

最初私は宇宙の発見事に関する公然たる歪曲のすべてに気づかなかった。当時私は宇宙探査機の一つが近隣の惑星群の地球に似た状態を示す信号を電波で送り返すとすぐに、係員がそれを世界中にアナウンスするだろうと素朴に考えていたのだ。

しかし宇宙の発見事に関する多くの〝公式〟発表なるものは、その背後のデータがあまりにも無意味か決定的でないために信頼性に欠けていることをまもなく発見したのである。その公式発表は基本的には専門的なドグマで確立された、現状に対する願望と見解なのだ。ＮＡＳＡ（米航空宇宙局）も多くのもっともらしいでたらめを発表したが、これは正統派の学説の誤った構造と、いわゆる〝国家機密〟を傷つけないようにするためである。

宇宙に関する多くの理論上のナンセンスな説が固く根づくようになっており、疑いももたれずに受け入れられて

いる。自分の確実な地位が政府からの補助金または給料にもとづいている科学者に、公式発表に疑問をさしはさむことは期待できないのだ。

私は自分独自の研究において、あらゆる事に疑問を起こした。私は大衆の考え方に決して同調しなかったし、「これはだれもが考えていることだ」というだけのことで、人生におけるいかなる事も受け入れなかった。私は何かを自分で学び、評価しなければならないのだ。それが私に何かの意味を持つならばだ。

海軍の原子力潜水艦計画において資格を付与し、新しい潜水艦を艦隊に編入するのに近道はなかったように、この分野の探究に近道はないこともわかったのである。しかし私は自分のかつての科学的な素養が、宇宙科学と惑星の発見事の真相をふるい分けて、科学界の時代遅れのドグマからそれを除くのに役立つことを確信した。

過去において多くの研究家が今や政府はUFO機密文書のすべてを国民に公開するときだという声明を出したことがある。これは状況の良い面を確立できるだろうが、やはり多くの推測を残すことになるだろう。

政府は真相を発表せよ

私は言いたい。われわれが本当に望むことは、政府、すなわちNASA、国防省、国家安全保障局などが、諸惑星に関する宇宙的知識の秘密文書を完全に公開し、金星、火星、月などの発見事のすべてを発表することである。

次の各章で宇宙の惑星群から来る訪問者たちのホーム惑星の状態を詳細に説明しよう。最初に火星を論じ、次に月、金星の順となる。また太陽系の残りの部分を説明した一章もある。正しい宇宙の発見事と惑星の状態を確証する一方、本書はUFOの分野に関連した情報を含むはずである。

第4章　火星―望遠鏡による立証

われわれの宇宙探険計画は主として地球に最も近い三個の天体である月、火星、金星に集中された。今日（こんにち）のUFO来訪の背後にある発進地や目的をより良く理解するために、われわれはわが太陽系の他の惑星群とともに右の三つの天体の相対的な位置をよく知らねばならない。

地球とその伴侶である月は太陽から三番目の軌道にある。水星と金星は太陽にもっと近いが、一方、火星の軌道は四番目の位置を占めている。火星のむこう側には次の四個の惑星群があり、引き続いてより大きな距離で軌道を回っている。それは木星、土星、天王星、海王星である。そしてなおも外側には冥王星と別な三個の惑星が存在しており、こうして太陽系の惑星は合計十二個になる（29図）。冥王星の外側の惑星群に関する最近の情報は第11章で述べることにしよう。

本書の目的は宇宙の真相に関する完全な包括的な背景を提供することにある。それで本書を読んだ読者はジョージ・アダムスキーの著書へ直行し、確信をもって読まれたい。彼の情報はこの分野で最重要なままにある。というのは彼は本当に大気圏外への最初の大使であったからだ。そして彼の宇宙の友人たちの信用された代表として、アダムスキーは空飛ぶ円盤の真相を確証したばかりでなく、人間の真相をも確証したのである。

隠蔽策をとる

われわれは、太陽エネルギーが熱と光のかたちで放射されているのではなく、電磁エネルギーの不可視なスペクトルであることを知っている。太陽の電磁エネルギーは、惑星の大気圏を貫通するまではそれ自体を熱と光としてあらわすのではない。しかもこの太陽の放射線は宇宙空間を進行する際にひどく減少しないので、四個の内惑星は各自の軌道において同じような量のエネルギーを受けるのである。

各惑星上の表面の状態は、大気圏や惑星をとりまく重力場、磁場などによってきまるのであって、太陽からの相対的距離できまるのではない。

一九四〇年代後半に宇宙船（UFO）が現れて目撃報告が数千に達し始めた頃、政府や軍当局にアドバイズしていた科学専門家たちは、金星と火星が宇宙船（UFO）の発進地だと信じたのだが、数機の円盤がアメリカの原爆テスト基地の近くに墜落したのを収拾したあと、専門家連はその確信を強めたのである。

しかしそれから厳重な機密保護政策がとられて、地球以外に生命が存在するという当局の証言を隠蔽（いんぺい）することになったのだ。

▲原著者ダニエル・ロス氏（右）と訳者・久保田八郎。1987年8月6日，カリフォルニア州南部の休憩地にて。（撮影　伊藤芳和）

（以下次号）

投稿欄
ユーコン広場

本誌100号の発行を祝う

静岡県　鈴木芳美

UFOコンタクティー100号、おめでとうございます。本誌と私との関係は十年以上になります。シャキッと引きしまった〈巻頭言〉からコクのある内容――読みごたえあります。私にとって本誌との出会いは多くの人との出会いでもあったわけです。

UFOコンタクティーのますますの御発展を願っています。

プラネタリウムでUFO投影

栃木県　渡辺克明〈栃木支部代表〉

私ども栃木支部で実施しておりますテレホンサービス「UFO・宇宙人は存在する!?」は内外共に少なからず反響があり、読売新聞をはじめ地方紙二社、その他タウン紙等に掲載されました。インタビューも二回ほど受けております。

テレホンサービスの利用件数ですが、四回分で五、六六五件の利用がありました。また栃木支部で予定しておりますUFO写真展は今年四月下旬から五月上旬の予定ですすめることになりました。日程がきまり次第ご連絡します。

さて私が担当しております鹿沼市民文化センターの科学館プラネタリウムで四月から六月まで毎回四十分投影のうち、後半二十分間にUFO関係写真類を投影しますが、アダムスキーのUFO写真も加えますから、余裕のある方はぜひご来館下さい。

編集構成はすべて私が行ないます。

●一般投影開始時間＝土曜日午後三時より。日曜祝日は午前十一時からと午後三時よりの二回投影。

●入場料＝小中学生百円、高校生二百円、一般三百円。

●栃木県鹿沼市坂田山二丁目一七〇番地　鹿沼市民文化センター

☎〇二八九―六五―五五八一

高貴な波動を放つユーコン誌

東京　長谷部　賢

久保田先生こんにちは。ユーコン誌99号をお届け下さいまして有難うございます。ユーコン誌が到着した日に日経新聞に興味深い記事が載っていましたのでそのコピーを同封します（編注＝「広がるイメージ訓練法」と題する記事）。

私は現在大学の受験生という立場にいますが、本誌99号の「巻頭言」は耳が痛いというか、目の前の盲点を突かれるような思いがしました。ユーコン誌を見ていて感じることですが、紙の質がよいことです。私は鉄道が好きなので鉄道雑誌をよく読みますが、それよりもユーコン誌のほうが一ランク高いと思うので、よく七〇〇円で他の要素をあわせてもおさまるのが不思議なくらいです。

次に内容を読み進んでゆくうちに楽しいというか高貴な波動なのか、プラスの感じでいっぱいになってしまいます。こんなことは他の書籍ではあまり見られないことです。それでは久保田先生の御活躍を期待いたします。

私は大宇宙そのもの

三重県　松口幸之助

先日はお手紙を有難うございました。九月の東京総会後の大夕食会の時に先生が英語でスピーチされるのを生で聴いたのは初めてで驚きました。堂々としたなかにも落ち着いた流れるような音楽的な柔らかい響きで、マスターの言葉といっても大げさではないと思います。これからもどんどん英語のスピーチをされるようお願いします。

私も自分を変化させようと静岡支部代表の野口さんのレッスンを参考にしてやっています。『生命の科学』を読んで内部からやってくる宇宙の意識からの印象をじっと待っています。時々断片的にやってきます。

バイクに乗っている時とか町を歩いている時に「私は大宇宙と一体である。大宇宙そのものであるから、病気などは存在しない。必ず変わるんだ。楽しいんだ。幸せなんだ。大宇宙は完全であるから私も完全である。（町を通る人々を見て）あなた方も大宇宙の魂の現れです。素晴らしいパワーを持っている。それを発揮することができる」と内部でとなえています。

いろいろとテクニックが必要だと痛切に感じるこの頃です。ご多忙と思いますが、お体に気をつけられてますますご指導下さい。お元気で。

素晴らしかった山形・仙台合同支部大会

青森県　中根久美子

十一月一日の山形・仙台合同支部大会では大変お世話になりました。久保田先生の御講演の内容、また質疑応答は素晴らしいものでした。私は子供の相手をするためにほとんど席をはずし、失礼ばかりしていたのですが、主人がカセットテープに吹き込んでくれましたので、皆様が夕食会と二次会へ出席されているあいだ、ホテルの部屋で子供を寝かしつけ、窓越しに星を見つめながらそのテープを聞かせて頂きました。

なかでも「他人の悪想念から自分を守るには?」との質問に対して、「すべての人が良くなるようにという想念を起こすこと」というのには特に感激しました。因習深い土地で暮らしているとよくこうしたことを考えるのですが、結局表面だけとりつくろって自分を守ってしまうか、相手を気持の上で攻めてしまったりします。

創造主と同じ想念（波動）を起こすことが解決策とは、なんと素晴らしいことかと思います。いつも心をこのようなプラスな状態に癖づけておくことが、まわりと調和する上で最重要なのですね。今まで漠然としていたことが実感として伝わってきました。一番むづかしい事ですが、あとは実行あるのみです。頑張ります。

それからGAPの一会員である私がこんなことを言うのは失礼なのですが、久保田先生はお会いするたびに大らかで温かで、私自身が寛容な心の持主に変化させられ、素晴らしいと思います。変化というより磨きがかかるといったほうがぴったりです。本当に充実した素晴らしい大会を有難うございました。これからもよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。主人からもよろしくとのことです。

素晴らしい雰囲気の東京総会

秋田県　本庄芳則

GAP会員になってから十二年目の今年（六十二年）初めて東京の総会に出席しましたが、予想どおり全国からの高い波動を持った方々の中にいて、言葉では言いきれない素晴らしい体験をすることができました。有難うございました。

青森・秋田合同支部大会と東京総会に参加したことにより、今まで以上にこの私という人間の人生における重要性を考えさせられ、今の自分からGAPを取ったら何も残らない、ただのゴミになってしまいます。「良心なき知」というゴミにです。そんなゴミを絶対に作ってもいけないし食べてもいけないのです。と感じながら終始素晴らしい雰囲気の中で楽しく過ごすことができました。東京GAPの皆さん、本当にお疲れさまでした。

充実した愉快な長野支部大会

千葉県　岡部智成

寒さがひとしお身にしみるようになりました。先日は長野支部大会にて二日間に渡っておつきあい下さり、有難うございました。本大会では非常に充実した愉快な時が過ごせました。

まず第一は上野駅で特急に乗ったら偶然にも清水正さんと乗り合ったことです。私は他の支部大会でも、待ち合わせもしていないのに会員の

方にプラットホームや車内で会うことが度々あり、一人で現地まで行くことはまれでした。今回は発車直前に飛び乗り、空席を探しているうち、「ここ、よろしいでしょうか」と声をかけたら「おやまあ」というわけで、初めは清水さんにも「しらじらしい」とか言われて、偶然であることを信じてもらえませんでした。ともあれ、お蔭で三時間の車中の旅もあっという間でした。

第二に長野支部大会で、支部より大会参加記念として高価な双眼鏡を頂いたことです（編注＝大会後の夕食会で支部から出席者全員に定価一万一千円の双眼鏡を贈った）。実は以前旅行中に愛用の双眼鏡を紛失してしまい、新しく購入すべきかどうかと案じていました。それがこうして思いがけない所から入手できたのは不思議としか思えません。

二次会の後、これを手に取っているうちに明日の観光で良いことが起こりそうな気がしてきました。案の定、当日は快晴となり、**善光寺では静岡のときと同じタイミングではるかな上空に銀色の球体が飛んでいるのが見えました。三重県の河合さんが第一発見者で、私はすぐに双眼鏡でとらえることができました。**あの高度では乱視ぎみな私の裸眼ではまず見えなかったと思います。頂いた双眼鏡が早くも立派に役立ちました。長野支部の方に感謝します。

第三に、これまでになくテレパシー的現象がよく起きたことです。夕食会や翌日の観光の間、いろんな方と話しましたが、東京でもよく会う方といっしょにいるときに、突然ある考えが浮かび、「アレ？」と思っているうちに相手がそのことを話し始めるということが何回もありました。また私が何か言いたくて、その言葉を探しているときや、何かに気をとめているときに隣にいる人が同じことを言い出すということも何度かありました。まるで相手を通じて自分が話しているような感覚でした。これがテレパシーなのでしょうか。同じ現象は家族の者といるときにもよく起こるのですが――。

このように長野支部大会では素晴らしい出来事が度重なって私は非常に高揚しました。今後はこれまで以上に先生にはお世話になりそうな気が致します。どうかお体を大切にされていつまでも私たち会員と、この世界の人々とを善き方向に導いて下さるようお願い申し上げます。

素晴らしい総会に感謝

東京　佐々木八郎

先日は素晴らしい東京総会を開催して頂き、有難うございました。ダニエル・ロスさんの母船の目撃は、テレパシーによるスペース・ピープルとのコンタクトであると思います。またタクシーがすぐ来たのも、超小型円盤によってスペース・ピープルが誘導したからだと思います。

総会後の大夕食会も楽しかったです。ロスさん夫妻が仲よく楽しく歌をうたったのがよかったです。そしてみんなも一緒に歌いました。ダニエル・ロスさんの今後の一層の活躍を期待しています。ロスさんによろしくお伝え下さい。

このごろの私は想念を観察しコントロールすることが前よりできるようになってきていますが、自由自在に充分に深くコントロールできていない自分に気づくことが多いです。宇宙の平和、地球の平和のためにがんばりますので、これからもよろしくお願いいたします。有難うございました。

御挨拶

埼玉県川口市　高橋多け子

久保田先生にはいかがおすごしですか。私共もやっと心のゆとりが出来まして皆様にお手紙を書いております。娘が生前一方ならぬお世話になりましてお礼も申し上げず大変失礼しました。有難うございました。

娘は中学時代より宇宙に関心を持ち、精一杯に自分の道を歩いてきました。「思い込む事は実現する」という言葉をいつも心に信じ、また実行していました。三十歳という若さでしたが充分に納得した生き方でした。今年に入ってからも「自分は宇宙へ（別な惑星へ）行く」と口ぐせのように言っておりました。娘の人生は何も悔のない思い通りの生き方だったと思います。久保田先生をはじめGAPのすばらしい人達にめぐりあい、死にましたときも何ともいえない顔でした。すべて満足したとでもいえるような気がしました。本当に皆様、有難うございました。残された本、その他沢山ありますので、時がたったら市の図書館にでも寄付しようと考えております。これからの若い人達に少しでもお役にたてば娘も喜んでくれることと思います。今後のGAPの御発展を心からお祈りしております。どうぞよろしくお願いいたします。

（編注＝六十二年二月五日に急逝された高橋和美さんのお母様より）

驚くべきUFOの出現

北海道　山崎泰照

秋も深まり霜も降りる季節となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。相変わらずご多忙の日々を過ごしておられるのではなかろうかと思っております。

実は昨年の一月に書いたのですが少々気になることがあり、出すのをやめましたが、そのとき書こうとしたのはテレパシー能力と心のスイッチの事です。お正月に友人とテレパシー練習をしていると、心の底でスイッチがオンになったような感じがして、何か確かなものに触れた感じがしたときは、映像が浮かんでくるわけではないのですが、なんとなくわかり、連続十三回あたりました。十四回目の前にスイッチが切れたような感じがして、その後はあたったりあたらなかったりで、何か心の底にスイッチのようなもの、機能のようなものがあるのかなと思って手紙を書こうとしたのですが、その後春川氏が心のスイッチについていろいろ語られていたので、なるほどと思いました（中略）。

さてUFOの目撃について実は今年もけっこう見ています。特に九月二十二日の晩はすごくて、夜帰宅して車から降りて見上げると、何機か続いて現れたのです。見ているうちに、あんまり続けて現れるので「こりゃ、お祭りだな」と思って、考えてみますと二十日（六十二年九月）の日は東京総会だったんだ、それで現れやすいのかなと思いました。

あとで何回か空を見上げたのですが、その度にすごく現れて、何機かが一度に現れて空のあちらこちらへ飛んで行ったり、結局四十～五十回以上は見ました。

そのあと近くの友達の所へ行って天体望遠鏡で星を見ようと誘って、二人で一緒に確認したのは四～五機でしたが、ほんとうに次から次へと一度に何機も出現してすごい感じでした。

空を見上げてUFO観測をしているとき、ときどき近くを人が通るのですが、ごくたまに気づくことがあるようです。あるときは流れ星のように現れました。普通流れ星ならスーッと消えてしまうのですが、そのときは流れてきて、消えるはずのところで空の一角に、満月ぐらいの大きさで銀色に強く輝いたので「ホーッ」と感心していると、通りがかりの夫婦のご主人の方が気づいて、大きな声で奥さんに「ウワーッ、何だ今のは！　オイ見たか？」と言っているのが聞こえてきました。実際天気のいい日は何機も見るので、それも空一面に渡って大きく曲線を描いたりして飛んでいるのですが、そういうのを見ていると「UFOは見たことない」と言っている人の言葉が逆に信じられないほどです。

グループ結成にご協力を

鳥取・島根・岡山近辺の方々を対象として、月一回アダムスキー哲学を研究する集まりを持ちたいと思っております。まだ具体的なことは何も決めていませんが、協力して下さる方がおられましたら左記宛御連絡下さい。

〒680―04　鳥取県八頭郡郡家町稲荷一九六―五　　上田幸男

第5回 福岡支部大会

●昭和六十二年十月四日（日）
●福岡市　チサンホテル博多
●出席者　三十五名

今回の大会は昨年と同じ会場に設定した。今年も司会進行役は吉岡氏が受け持ち、氏の力強い挨拶で開会となる。

久保田先生の講演は「アダムスキーの真実性と彼の哲学」である。特に講演の中では、アダムスキーの一連の生命科学研究において、形としての成果がすぐに目に見えないため、せっかちな気分ではその真価が得られないこと、また現在行なっている私たちのレッスンの方法に疑問を感じる人もいるが、一つの物事を繰り返すことがいかに大切かが力説され、これを続けることにより必ずある事柄に気づくようになると指摘された。

その他、今私達がいる地球が私達に最もふさわしい最高の場であること等が説明される。いつもながらこの哲学に対する先生の適切なアドバイスがなされて、あらためて新鮮さが湧き起こる感じがする。

一息入れて質疑応答に移る。質問用紙が不足するくらいに各人からの質問が多く寄せられたので、質問数を限定して吉岡氏が読み上げる。今年も一段と熱のこもった内容となった。主なものを挙げると、テレパシー実践時のリラックスの仕方。雑念処理の方法について。その他GAP活動について日常の情報の受け取り方とその選択。心霊問題。スペース・ピープルとのふれ合いについて。サイレンス・グループの問題等、次々に質問が広がる。ついに定刻を二十分オーバーする。本当に生きることへの真剣な方々の集まりという実感があった。

続いて立食パーティーでしばし歓談し、親睦を深める。遠来の客人あり、嬉しくなる。翌日は博多湾に浮かぶ能古島へフェリーで渡り、曇天のためUFO観測は不可能なるも野外バーベキューを楽しんだ。久保田先生と参加者の方々に深謝します。

（喜多正宣）

第8回 山形仙台合同支部大会

●昭和六十二年十一月一日（日）
●天童市　滝の湯ホテル・端鶴の間
●出席者　二十五名

雲一つない秋晴れの空の下、支部設立十周年を記念しての大会が天童市の滝の湯ホテルの端鶴の間で開催された。

久保田会長の御講演は「世界のUFO問題の意義」と題して行なわれた。世界のUFO問題の意義――それはただUFOの歴史的事件などを羅列することではなくて、アダムスキー問題を一つの突破口にして人間一人一人が自分の内部の意識革命を起こし、真に宇宙的な次元に入り込むことを意味すること。そして、常に万物、万人が必ず良くなるんだ！というプラスの想念を持つことの重要性。「マインド空間」から「意識空間」へ移住することだと力説された。

宇宙的な雰囲気の中で、出席者全員が久保田会長の深遠かつ貴重なお話に全身を傾けて聴いていた。アダムスキー哲学の実践の重要性と必要性を今回程痛感したことはない。久保田会長の偉大さ、パワーの強さ、存在の大きさを改めて感じさせられた大会であった。

その後の夕食会では秋田の佐藤春雄氏による民謡、山形支部の本山恒明氏と高野昌子嬢の社交ダンスが披露されたり、空クジなしの福引きがあったりで楽しい夜を過ごした。

翌日は付近の舞鶴山公園を散策した後、天童高原で山形名物のイモ煮会が行なわれた。目を見張るような美しい山々の紅葉が久保田会長と私達をその懐に迎えてくれた。大自然の中でまっ盛りの紅葉を眺めながらのイモ煮も格別な味がして、とてもおいしかった。途中、少々の小雨が降ってきたが、大変楽しい一日を過ごした。

今回の大会はいろいろな意味で非常に有益な学ぶことの多い大会だった。遠くからお越し頂いた久保田会長と御出席頂いた皆様に心から感謝します。どうも有難うございました。

（柴田光明）

第2回 長野支部大会

●昭和六十二年十一月二十二日
●長野市　長野ステーションホテル
●出席者　三十名

今年最後の地方支部大会となった日の朝は、十一月にしては穏やかで暖かい絶好の日和となった。この十一月で四年目を迎える長野支部は、熱心なGAP活動を展開しておられる山梨県の清水南氏の体験講演と、久保田先生による「アダムスキーとUFO問題の重要性について」と題するご講演を頂いた。清水氏はア哲学を実践されることでその素晴らしさを身をもって体験されたということであるが、やはり実践の重要さを強く感じたしだいである。

久保田先生のご講演は時折ユーモアをまじえて非常に熱のこもった気魄に満ちたもので、その力強い講義に一同圧倒される思いで聞きいっていた。特に「人間の運命は、その人なりの想念波動によって決まる」というくだりは自分におきかえて考えさせる所だった。

また「万物と万人が必ず良くなるのだ」という想念を持つことの大切さを春川氏の例をひいて力説され、深い感銘を受けた。続く質疑応答では熱心な方の意見発表もあり、時間をオーバーしての大会終了となった。

翌二十三日は快晴の好天下を期待に胸をはずませ、マイクロバスに十九名が乗って、一路善光寺へ向けて出発。

善光寺境内に入るとすぐに三重県の河合清美氏が上空にUFOを発見。「あっ、あそこを飛んでいる！」という声に一同空を見上げる。近くにいた数名の人が双眼鏡で確認するという幸先のよいスタートとなった。

善光寺をあとにして移動すると、またも左側に光る物体を発見。やはり数名が目撃。興奮が渦巻く。

観光は小布施町でおいしい栗御飯の昼食をとり、秋空のもとでリンゴ園に入ってリンゴ狩りを楽しみ、こうして大会は無事終了した。久保田先生をはじめ清水さん、ご出席の皆さんに心から感謝します。

（博田文喜）

Impressions of the U.S.A. and Mexico
「アメリカ東部西部・メキシコの旅」に参加して（2）

旅ほど人間を成長させるものはない

東京　安藤澄雄

昨年は素晴らしい旅行を企画していただきましてありがとうございました。久保田先生の確固たる信念と、田中氏のきめ細やかなお心配りのおかげで今までにないほど楽しく、有意義な旅行をさせていただきましたことに、心から御礼申し上げます。

さて、私と妻はこれで五回目のGAP海外研修旅行の参加になりましたが、今回は三歳の娘を連れていくという初めての体験になり、病気になりはしないか、騒いで同行の方々に迷惑をおかけしないか、食事は大丈夫だろうかなど、不安な部分が多々ありました。しかし生来図太い性格の娘であったおかげか、熱を出したりすることもなく、飛行機やバスの中でもよく眠り、騒がしくないほどの元気さを保ち、加えて同行の皆さんに大変かわいがっていただきましたおかげで、何の心配もなく十二日間を無事に過ごすことができました。

さて、実際に日本を出てみますと、アメリカは三度目、メキシコは二度目であるということも手伝ってか、確かにあまり外界の現象に私のマインドは惑わされなくなっていました。

パロマーガーデンズの樫の木の下に立ったときには心臓の鼓動が急に高まり出し、これで三度目の訪問だというのにとても新鮮な、そしてとても懐かしいフィーリングに包まれ、いつまでもこの樫の木の下にいたいと思いました。

メキシコはとても楽しく過ごせました。もう貧富の差などにこだわることもなく、それぞれのレベルにそれぞれのレッスンがあることもわかりました。おかげでアクマルの透明な海と明るい太陽の光を、心を自由にしてストレートに楽しむことができました。ここにはあと一週間ぐらいいてもいいなあと思うほどでした。

私が自分自身の変化に一番驚かされたのは、ニューヨークでアリス・ポマロイ女史にお会いしたときでした。メキシコに別れを告げ、夜中にニューヨークのホテルに着いたとき、少し疲れた体でゆっくりとホテルのロビーに入っていくと、久保田先生が銀髪の老婦人と立ち話をしていました。その婦人がこちらを向いたとき、その方はアリス・ポマロイ女史だということに気づきましたが、その直後、思いがけないことが起きたのです。なぜか突然胸が熱くなり、「この人が〝本当の人〟だ」という言葉が浮かび、そして（49頁へ）

日本GAP海外研修旅行10周年記念
——企画第10回——

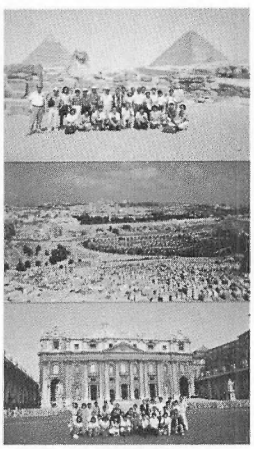
エジプト・イスラエル・イタリアの旅

——地上最大の謎の遺跡と,イエスその他の偉大な先覚者の足跡を訪ねて——

■旅行期間　昭和63年8月3日より15日まで13日間
■参加費用　**¥598,000**（24回分割払い可。変動があるかもしれませんのでお含みおき下さい）
■定　　員　30名

日本GAPは，昭和54年8月に第1回海外研修旅行を実施して以来，世界各地の謎に包まれた古代の遺跡を主体に異国の風物を視察してきましたが，これは宇宙的視野を拡大するにはまず私たちのホーム惑星地球の再発見が必要であるという見地にもとづくもので，すでにエジプトをはじめ中近東，ヨーロッパ各国，インド，北米，中南米各国にわたる壮大なスケールの旅行を毎年敢行し，多大の成果をあげてまいりました。参加人員は延べ500名に達していますが，毎年の旅行で全くトラブルが発生することなく全員無事に帰国しています。63年度は海外研修10周年記念として，下記のようなスケジュールで豪華な旅を企画しました。見学地はすでに何度も現地を訪れたベテランの田中正（ワールドセブントラベル社役員・日本GAP東京本部役員）と久保田八郎（日本GAP会長・毎年旅行団長）の2人が練りに練って立案した最高の手作りのコースです。未経験の方，すでに見学済の方も，家族的雰囲気に満ちた素晴らしいGAPの海外旅行を満喫して下さい。非会員の方も参加できます。

	年月日	曜日	場所	時間	交通機関	摘要
1	1988 8月3日	水	成田発	午後	航空機	一路ローマへ （機内泊）
2	8月4日	木	ローマ着 発 テルアビブ着 発 エルサレム着	午前 午後 夕方 夕方 夜	航空機 専用バス	エルサレム着後ホテルへ （エルサレム泊）
3	8月5日	金	エルサレム滞在	終日	専用バス	エルサレムを終日見学。オリーブ山よりエルサレムの夢のような市街を展望，昇天教会，イエスが祈り続けたゲッセマネ庭園，古代城壁として名高い歎きの壁，イエスが十字架をかついで歩いたビアドロローサ，ゴルゴタの丘跡に建てられた聖墳墓教会その他を見る。 （エルサレム泊）
4	8月6日	土	エルサレム滞在	終日	専用バス	ペテロが泣いた鶏鳴教会，イエスが歩いた石段，最後の晩さんの跡地の二階座敷，イスラエル博物館その他を見学。（エルサレム泊）
5	8月7日	日	エルサレム発 〃 ティベリア着	午前 夕方	専用バス	960名のユダヤ人がローマ軍と戦って全員壮烈な最後をとげたマッツァダの遺跡。死海で海水浴。死海文書が発見されたクムラン洞窟，1万年昔の都市エリコの遺跡その他を見学後，ティベリアへ。（ティベリア泊）
6	8月8日	月	ティベリア発 〃 テルアビブ カイロ着	午前 夕方 夕方	専用バス 航空機	イエスと弟子たちにゆかりの深い風光明媚なガリラヤ湖を船で周遊後，カペナウム，カイザリアの遺跡を見学。夕方はテルアビブからエジプトのカイロへ。（カイロ泊）
7	8月9日	火	カイロ滞在	終日	専用バス	千古の謎を秘めるギザの3大ピラミッド，スフィンクスを見学後，カイロ市内を観光。 （カイロ泊）
8	8月10日	水	カイロ発 アブシンベル ルクソール着	午前 夕方	航空機	アブシンベルの大神殿と小神殿を見学し，空路アスワンへ。着後アスワンハイダム，古代の石切り場などを見学。（ルクソール泊）
9	8月11日	木	ルクソール発 カイロ着	夜 夜	航空機	メムノンの巨像，ハトシェプスト女王葬祭殿，王家の谷，カルナック神殿，ルクソール神殿などを見学。（カイロ泊）
10	8月12日	金	カイロ発 テルアビブ ローマ アッシジ着	午前 午前 午後 午後	航空機 航空機 専用バス	イタリアのアッシジ着後，小鳥とテレパシーで語り合った聖フランチェスコをまつる大寺院その他を見学。 （アッシジ泊）
11	8月13日	土	アッシジ発 ローマ着	午前 夕方	専用バス	ローマ着後，雄大なサン・ピエトロ大寺院，スペイン広場，トレビの泉，コロセウム，フォロ・ロマーノ，その他の遺跡を見学。 （ローマ泊）
12	8月14日	日	ローマ発	午後	航空機	一路帰国の途に。（機内泊）
13	8月15日	月	成田着	午後		着後解散。



写真は上からギザのスフィンクスとピラミッド，エルサレム市街，サンピエトロ大寺院。

■今回は3カ国を回る旅行になります。イタリアのアリタリア航空ジャンボ機でローマ経由，まずイスラエルへ入り，次にエジプト，最後はイタリアという順序になります。特にイタリアはローマ以外に聖フランチェスコのゆかりの美しい町アッシジを訪れます。いずれの国も現地在住の日本人ガイドつき。
■毎日3食付き。24回払いのローンでも行けます（毎月約¥27,000払い）。非GAP会員でも参加可。
■詳細については下記へハガキで案内書をお申し込み下さい。

〒150 東京都渋谷区東3-24-9
サンイーストビル2F
ワールドセブントラベル株式会社　田中正（宛）
☎(03)499-2461
日・祝・夜間は（0474)77-4728（田中自宅）へ。

企画：日本GAP／主催：株式会社日本旅行（運輸大臣登録一般旅行業第2号）／販売：旅行代理店 ワールドセブントラベル株式会社（運輸大臣登録旅行業代理店業1957号）

★EGYPT, ISRAEL & ITALY★

宇宙の広場へ集まろう!

〈予告〉昭和63年度地方支部大会〈その1〉

	第9回 仙台・山形合同支部大会	第2回 秋田・青森合同支部大会	第7回 旭川・札幌合同支部大会
日時	5月3日（祝） 午後1:00→5:00	6月5日（日） 午後1:→5:00	6月26日（日） 午後1:00→5:00
会場と交通	「仙台市農協会館」2F会議室 ☎022-297-5311 仙台市東7番丁122 ※仙台駅東口から徒歩3分。	「秋田県社会福祉会館」9F第4会議室 ☎0188-64-2700 秋田市旭北栄町1-5 ※秋田駅前から中央交通バスまたは市営交通バスで新国道径由，約10分。バス停「山王2丁目」下車，徒歩約2分。	「旭川ターミナルホテル」6F ☎0166-24-0111 北海道旭川市宮下通り7丁目 ※旭川駅直結。
会費	¥2,000(希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。カラーグランドキャビネ判。送料共)	左に同じ。	左に同じ。
プログラム	司会　柴田文子 1:00　支部代表挨拶　笠原弘可 柴田光明 1:15　講演「ＵＦＯ問題と偉大なアダムスキー哲学」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 2:30　全員記念撮影・休憩 3:00　全員自己紹介・意見発表・質疑応答 5:00　閉会 ※今年は杜の都仙台の新緑に包まれた清新な雰囲気の中で高次元な大会を開催致します。久保田先生を囲んで話し合いに徹する予定です。珍しい話も出そうですから，多数ご来場下さい。	司会　菅原正人 1:00　支部代表挨拶　伊藤正治 田村嘉彦 1:15　会員体験講演「ＵＦＯとの出会い」坂本茂子 1:35　休憩 1:40　講演「アダムスキー哲学の生かし方」日本GAP会長・久保田八郎先生 3:00　全員記念撮影・休憩 3:30　全員自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※会員一同大変張り切っております。青森支部との合同ですのでパワーもアップ！全員でイメージしております。どうかよろしくお願いします。	司会　氏家(旧姓山内)裕里子 1:00　支部代表挨拶　川上三秀 高野省志 1:15　支部会員体験講演 伊藤重信 1:45　講演「アダムスキーが今世紀最大の偉人である理由」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 3:00　全員自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※初夏の旭川の光り輝く太陽の生命の息吹き溢れる中で久保田先生より大宇宙の真理を学びとろうではありませんか。シンプルなセミナーを目指します。両支部一同心からお待ち致しております。
夕食会	大会終了後6:00より8:00まで下記の場所で開催します。 会費¥5,500 会場＝「仙台第2ワシントンホテル」 2F「オリーブの間」 仙台市大町2丁目3-1 ☎022-222-2111 ※仙台駅前青葉通りをまっすぐ下って徒歩15分，車で5分。仙台市農協会館からは徒歩20分，車で5分。 ※2次会＝ワシントンホテル内の「三十三間堂」という居酒屋で¥2,000程度の会費で開きます。	大会終了後6:00より希望者による夕食会を下記の場所で開催します。 会費¥5,000程度 会場＝「アキタパークホテル」 秋田市山王4-5-10 ☎0188-62-1515	大会終了後6:00より希望者による夕食会を同じホテルの別の間で開催します。 会費¥5,000
宿舎	「仙台第1ワシントンホテル」(夕食会場の隣のホテル)を斡旋します。 仙台市大町2丁目3-1 ☎022-222-2111 シングル　¥ 5,750（税サ込） ツ イ ン　¥11,500（　〃　）	「アキタパークホテル」を斡旋します。 シングル　¥5,200（税サ込）20室 ツ イ ン　¥9,500（　〃　）5室	「ワシントンホテル」を斡旋します。 ※会場より3分。 シングル　¥5,000（税サ込） ツ イ ン　¥8,200（　〃　）
申込	大会，夕食会，宿舎，観光の申込はハガキにいずれかを記して5月2日までに下記へお申込下さい(電話でも可)。 ただし宿舎申込は4月25日まで。 〒983仙台市五輪1丁目16-14-306 笠原弘可 ☎022-295-0725	大会，夕食会，宿舎，観光の申込は電話かハガキで4月末日までに下記へ。 〒010秋田市山王新町15-4 伊藤正治 ☎0188-62-2831	大会，夕食会，宿舎，観光の申込はハガキにいずれかを記して6月25日までに下記へお申込下さい(電話でも可)。 〒070北海道旭川市神楽6条8丁目432-22 川上三秀 ☎0166-61-0044
観光	大会翌日は中型観光バスをチャーターして「青葉の蔵王エコーライン周遊」を実施し，蔵王山へ登り，有名なおカマを見ます。 参加費¥2,000程度（昼食代別）	大会翌日は希望者で「涙を流すマリア様」を見学して，仁別国民の森で名物キリタンポを食べながら森林浴を行ないます（午前9:00→午後3:00)。 参加費¥500	大会翌日は希望者で上川アイヌ記念館，嵐山北方野草園，わが国最北の旭山動物園の見学を予定しています。出発9:00→解散2:00（旭川駅)。 参加費¥3,000（昼食代共）
備考	5月は支部大会のため両支部共月例会を中止。	6月の月例会は両支部共予定通り実施。	6月は支部大会のため，旭川支部月例会は中止。札幌支部は月例会を開催。

(47頁より)眼から涙があふれ出したのです。私にはその理由がわかりませんでしたが，とにかくポマロイ女史を見ていると，いくらこらえようとしても涙が次々に流れてきてどうすることもできないのです。あわててティッシュペーパーで涙を吸い取ったり，鼻をかんだりして周囲の人に気づかれないようにしましたが，結局ポマロイ女史と別れて部屋に入るまで涙は止まりませんでした。

そのあとの二日間は今回の旅行のしめくくりとして実に素晴らしいものになりました。バスの中では久保田先生とポマロイ女史のすぐ後ろの席に座ることができ，お二人の素晴らしい波動を感じながらのニューヨーク観光をすることができました。またアーリントン墓地でアダムスキー氏の墓を見たときには，デザートセンターやパロマーガーデンズで感じたのと同じフィーリングを感じることができ，アダムスキー氏がますます身近に感じられました。

旅行中，久保田先生は「旅ほど人間を成長させるものはない」とおっしゃっていましたが，私の半生を振り返ってみましても一九八〇年に初めて海外に出かけてからの変化が著しいことなどから考えて，全く先生のおっしゃる通りだと思います。またチャンスを作って，ＧＡＰの旅行に参加させていただきたいと思いますが，そのときどのくらい成長できるか，今から楽しみです。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳　全8巻　B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必読の名著です。

1 宇宙からの訪問者

三三八頁　二五〇〇円

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。一九五二年十一月二十日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第Ⅰ部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第Ⅱ部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2 UFO問題の真相

二六二頁　二五〇〇円

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第Ⅱ部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの妨害が克明に描写されている。

3 UFOとアダムスキー

三五〇頁　二五〇〇円

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第Ⅰ部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第Ⅱ部とした。

4 宇宙哲学

一四八頁　一三〇〇円

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5 テレパシー開発法

一九〇頁　一八〇〇円

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6 生命の科学

二〇五頁　一八〇〇円

アダムスキーが他界する数年前に出した Science of Life と題する十二分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7 アダムスキー論説集

三七〇頁　二五〇〇円

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第Ⅱ部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

8 質疑応答集

二一六頁　二〇〇〇円

アダムスキーは一九五八年に質疑応答集を自費出版で頒布した。五分冊から成る小冊子で、全部で百問の質問と回答が収録してある。内容は現在の混迷した世界のUFO研究界に的確な解答と示唆を与えるものとして驚くほど新鮮である。これで本全集はア氏の重要な文献すべてを網羅した。

発行所宛直接注文の場合に限り、左記のように定価・送料をサービスいたします。（郵便振替または現金書留でご注文下さい）

☆一冊注文……送料無料。書籍代のみご送金下さい。
☆第一巻より第四巻まで一括注文（正価八八〇〇円）特別セット価格八〇〇〇円（送料共）
☆第五巻より第八巻まで一括注文（正価八一〇〇円）特別セット価格七三〇〇円（送料共）
☆第一巻より第八巻まで一括注文（正価一六九〇〇円）全巻セット価格一四七〇〇円（送料共）

文久書林　〒113 東京都文京区西片1-19-10　西片ハウス2F　☎(03)813-9561　振替/東京4-2521

英文版「UFOcontactee」第4号刊行中

■わが国最大のUFO研究団体「日本GAP」はかねてから英文版Uコンを発行しているが，今年1月に第4号が出た。日本語版Uコン第93号に撮載した春川正一氏の「私は別な惑星へ行ってきた！」の英訳連載第1回分は英文版第3号に掲載されたが，これは海外のUFO研究界で大反響を起こし，特に西ドイツUFO研究会（カール・ファイト氏主宰）は機関誌「UFOナハリヒテン」307号（昨年11月発行）に，Uコンの英文版第3号の記事を全文独訳して掲載，ヨーロッパUFO研究界で大旋風をまき起こしている。

■第4号も「私は別な惑星へ行ってきた！」の日本語版94号に掲載した記事を久保田会長が英訳し，教養の高い米人インフォーマントが監修した格調高い英文。会長みずからプロ用大型電子英文タイプライターを駆使して版下を作成。1字1句に至るまで会長が情熱を傾けて作った国際的文献。他の有益な記事も撮載。英語学習用にも好適。発行部数が少ないため少々割高なるも稀少価値の高い資料。

B5版　12頁　上質紙使用　￥400（送料￥170，3冊まで￥240，10冊まで￥350）注文は郵便振替で日本GAP宛にどうぞ（振替・東京4—35912）。切手代用も歓迎。その場合は￥200以下の切手をご使用下さい。

A Young Japanese Man Visits Other Planets [Part 2]

by Hachiro Kubota

(Continued from No.3 issue)

Kubota: To become a regular contactee, do we have to be a psychic such as a telepathist or clairvoyant? or a man who has a power of seeing aura?

Harukawa: Well, it is said that the fate of an ascetic devotee is inclined to be unhappy. So a telepathist has to take care because his telepathy sometimes goes wrong and he becomes insane. When Earthmen living on a planet with such low frequencies have too strong a power of telepathy, they are unable to bear the burden. I met some Japanese contactees who complained that they could not live their daily lives easily.

Generally speaking, you have to train hard in order to become an excellent telepathist. Some unfortunate psychics are sometimes killed in automobile accidents or by medicinal poisoning. They die from malignant diseases, and even kill themselves. Therefore, in order to develop telepathy, I thought there might be a method to acquire the ability without all the burdens.

I have been trying to find a good method by studying the ancient Japanese Shinto, Cabala, primitive Christianity, Zoroastrianism, Taoism, and so on. Space People have helped me with it, too. I finally found a basic method to develop the power of mental telepathy to a certain extent. But there is an important point. Although it is easy for you to develop the ability of telepathy, it is important for you to have a high-performance switch in your mind. If your power of telepathy becomes too strong, the switch will not work. Then you will eventually be mad.

To Contact Space People is Hard Work

There are two types of UFO researchers. The first type is a man who contacts Space People, and the other a man who does not contact them. To contact them requires hard work. What is more, the contactee will begin to have some trouble mentally. Because the planets have a tremendous civilization beyond description, he will have a very strong sense of emptiness after he has returned to Earth. Space People know the situation well and encourage the contactee by saying "Go to it! You must live on Earth!" Few of the contactees taken aboard their mother ship became good for nothing after such an extreme experience.

Now, I will return to the story of man's preter-natural power. A man who can see aura or possess the memories of his own past lives has a kind of strong animal instinct. So, if he goes in the wrong direction he is liable to lose his reason. Therefore, the man needs to be guided by others. This could also be said for a contactee, and this is why contactees sometimes work together in order to protect themselves against failing. I think a contactee is a person of skeptical disposition at heart. Space People emphasized it and said, "If you did not see our ships to such an extent, you would not have believed them. That is why we had to show you our space ships [scout ships and mother ships]."

But first a man must develop the power of mental telepathy. Anyone should be able to have enough power of telepathy or clairvoyance by having a good feeling or emotion. You should always have a positive way of thinking as much as possible and ignore the negative ones. The positive way of thinking means that "I am sure everything is going well with me", and the negative one

昭和63年度

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日　午後1:00→6:00 **※2月のみは第3土曜日の20日に変更。**	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。ＪＲ「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP　☎03-651-0958	会場費¥500 セミナー受講料¥1000 計¥1500	1:30→2:10 会員による体験講演。 2:15→3:30 久保田会長による「テレパシー開発法」「アダムスキー論説集」講義。 テレパシー練習、近況報告、自己紹介、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。ＪＲまたは阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	長岡市今朝白1丁目「けさじろ荘」 ☎0258-33-7400。長岡駅東口より徒歩5分。無料駐車場あり。 連絡先＝星 富治夫　☎02579-2-5562	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3Ｆ国際会議控室 連絡先＝喜多正宣　☎092-863-5438	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日　午後1:00→4:30 **※1月24日は市民会館第1会議室、2月7日，3月13日，4月3日は国際センタービル第2会議室。**	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141㈹。 ＪＲ東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先＝林　国宣　☎0586-45-6468	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日　午後1:10→4:20	仙台市1番町4丁目「141(イチヨンイチ)ビル内5Fエル・パーク仙台セミナー室」 ☎022-268-8300。仙台駅よりバスで県庁市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
山形支部	毎月第1日曜日　午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日　午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821 連絡先＝高野省志　☎011-822-8260	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
静岡支部	**毎月第1日曜日 午前10:30→5:00** **※午前中は「生命の科学」の研究会。テキスト持参。**	静岡市黒金町「静岡労政会館」5階会議室。 ☎0542-21-6280。静岡駅北口より徒歩5分。 連絡先＝野口敏治　☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2Ｆ小会議室。 ☎0166-26-1304。 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
松山支部	奇数月-第3日曜日 偶数月-第4日曜日　午後1:00→5:00 **※広島での月例会は廃止。**	松山市港町7丁目5番「コミュニティーセンター」2F ☎0899-21-8222 連絡先＝伊藤達夫　☎0898-22-3060	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長と講義録音テープを公開。質疑応答・座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3Ｆ。 連絡先＝久保寺信一　店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表等。
沖縄支部	毎月第4土曜日 午後6:00→10:00	那覇市寄宮1-2-1「那覇市民会館」1Ｆ　A会議室。 ☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝新里義雄　☎0988-54-1623	¥1000 (積立金共)	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想念観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」4階4号室。☎044-222-4416。ＪＲ京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝大崎孝典　☎0492-65-0389	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	水戸市梅香1-2「水戸市中央公民館」4Ｆ小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日　午後1:00→4:30	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1Ｆ相談室。☎0735-21-2760。ＪＲ西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
栃木支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市(市役所裏)「御殿山会館」1Ｆ小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5㎞。東武新鹿沼駅から北へ1.5㎞,市内行きのバスに乗り天神町下車,徒歩5分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長崎支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	長崎市魚の町5番1号「長崎市民会館」 ☎0958-25-1400。公会堂電停前。 連絡先＝元木和雄　☎0958-22-5521	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
薩摩会	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111 連絡先＝鶴田清則　☎09932-5-4398	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。

★本誌バックナンバー（旧号）★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.96 主要記事「私のオーラ透視とテレパシー現象」清水南／「京都市上空にUFO５回出現」久保田八郎／「想念放射、透視、UFO目撃」遠藤昭則／「UFOと心霊は無関係」G.アダムスキー／「私は別な惑星へ行ってきた./（連載第3回」春川正一

No.97 主要記事「驚異の『生命の科学』と円盤大接近」伊藤達夫／「八王子市でUFOを撮影」降旗和彦／「別な惑星の偉大な人類と文明」G.アダムスキー／「私は別な惑星へ行ってきた./（連載第4回）春川正一

No.98 主要記事「木星の衛星イオに古代都市跡を発見./」「UFO-宇宙からの完全な証拠」(1)ダニエル・ロス／「静岡市上空にUFO頻繁に出現」遠藤昭則／「太陽系惑星にまだ仲間がいる?」「連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤」片岡豊／「万物の実体と想念の重要性」知念清邦／「私は別な惑星へ行ってきた./（最終回）春川正一

No.99 主要記事「UFO-宇宙からの完全な証拠」(2)ダニエル・ロス／「山中湖畔で空中を飛んだ自動車./」清水南／「富士山にUFOが大挙出現」清水敏恵／「<写真>大分市上空のUFO」／「アダムスキーの大地とマヤの国へ」久保田八郎

各¥700　バックナンバーに限り送料は不要

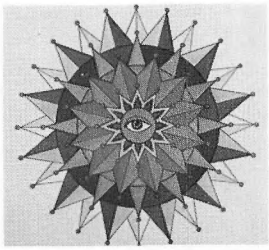
「テレパシー開発法」と「アダムスキー論説集」解説講義録音テープ

昭和62年２月より毎月開催東京月例研究会で日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生が新鮮雄大な構想のもとにアダムスキーの名著を解説する録音テープ。テレパシーを主体に人間を救う能力開発法を説いた名講義。ＧＡＰ会員必聴の重要資料。月例会における近況報告も録音。

テープ１本（120分）　￥1300　送料￥200

※このテープは日本ＧＡＰでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい（２月分より在庫）。

〒430 静岡県浜松市三島町577-1　小島国弘
☎0534-42-3507　振替＝名古屋7-51065



①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。（キャビネ判・カラー写真）上半身写真もあり。定価¥600

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド（心）の発達状態をあらわしている。（サービス判・カラー写真）

上記２点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本ＧＡＰ宛直接に振替でどうぞ。

①¥600 送料¥120 ②¥300 送料¥60 一括注文の場合送料¥120

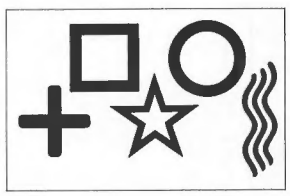
③ゼナーカード

テレパシー練習用

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。５種１組のカードを１箱に５組、計25枚収納。美麗箱入り。

¥600 送料¥120

①+②+③の場合送料¥170



会員募集

日本ＧＡＰはＵＦＯ研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のＵＦＯと宇宙哲学の研究大集団／多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう／入会案内書をハガキで日本ＧＡＰへ申し込もう／

――日本GAP――

GAPテレホンカード

日本GAPは本誌100号発行記念としてテレホンカードを製作しました。アダムスキー撮影の円盤写真をバックに WITH COSMIC CONSCIOUSNESS と GAP-JAPAN の文字が金色に浮かぶ優美な図柄は会長みずからデザインしたものです。少部数につき早目に振替でご注文下さい。

¥1,500　送料10枚まで¥60

会員バッジ

実物大

ジョージ・アダムスキーが金星人から与えられた唯一のバッジと形、色共全く同様に複製した径18㎜の丸い優美なバッジです。薄青色地に金色のシンボルマークが浮彫りされており、縁も金色です。表面には透明樹脂がかけてありますからキズがつかず、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏側が心棒ネジどめ式、女性用は裏側が安全ピン式です。ぜひお求め下さい。ご注文のさいは男性用・女性用の別を明記して郵便振替で日本GAPへご送金下さい。（無断複製を禁じます）

１個 ￥2000　送料４個まで ￥120

編集後記

★本誌は百号達成記念特大号として四頁分ふやし、総頁を五十二頁としました。充実した読みごたえある記事に楽しいひとときをおすごし下さい。ただし次号からは従来どおり四十八頁にもどします。

★「私はこうして超能力を開発した」は坂本氏の堅忍不抜の精神と努力の成果を示すものです。個人差はありますが、だれでも坂本氏のようになれる潜在能力を持っていると考えられます。要は練習の如何にかかっているといえるでしょう。

★「アメリカの不思議な土地」を訪れた筆者・水野和彦氏は一種の超能力者で、それゆえにあのような興味深い記事が書けたわけです。敏感な人は一度アリゾナ州のセドナへ行ってみるとよいでしょう。

★「UFO-宇宙からの完全な証拠」も今号で一般論を終えて、次号より火星観測時の発見事にまつわる秘話が展開します。ご期待下さい。

★UFO目撃報告、UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学・宇宙科学研究等の原稿を募集します。採用分には薄謝を呈します。ただし心霊的な内容のものはご遠慮下さい。

★本誌は約百名のボランティアにより全国主要書店に卸されています。この奉仕活動に参加を希望される方はハガキでお申込下さい。説明書をお送りします。

★本誌は七年間定価七百円を維持してきましたが昨今の物価高には抗しがたく、本号より九百円に改訂しました。ご了承下さい。

★**東京月例会は本年二月に限り第二十曜日を第三土曜日（二十日）に変更しますので、ご注意下さい。会場は東京文化会館です。**（K）

日本GAP機関誌・季刊　春季号
UFO contactee　100号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-651-0958
振替 東京4-35912
昭和六十三年一月二十五日発行
定価九〇〇円・送料200円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

潜在脳力を開発し、願望実現を早める奇跡の音楽

●●アメリカで話題騒然の●●

●●●スピリチュアル音楽ライブラリーついに日本でも独占販売開始●●●

願望この音楽を聴き実現だしてから……が次々に実現し始めた

アメリカで各界から熱狂的注目を浴びる常識を超えた奇跡の音楽

「スピリチュアル・ミュージック」、「ニューエイジ・ミュージック」と呼ばれる不思議な音楽が遂に日本へも上陸しました。このスピリチュアル音楽に関しては、日本でもニューサイエンス関係の書籍や一般の雑誌・新聞でしばしば紹介されているので既にご存知の方も多いことでしょう。今から十数年前にウェストコースト（米国西海岸）で湧き起こった、意識と物質を同一の次元でとらえようとするニューサイエンス運動、エコロジー思想等のニューエイジ革命の嵐の中から生まれ出たスピリチュアル音楽――。

この音楽の特徴をまとめると、

●作曲家、演奏者達が皆、30代前半から半ばと若く、瞑想愛好家の上、幽体離脱や超常現象を日常的に経験するなど、きわめて霊的意識が高い。

●今までの音楽のように単に曲を聴いて楽めるという点だけではなく（もちろん音楽的に非常に魅力に富んだ曲が多く充分に楽しめるが）意識を高め、潜在意識を刺激するという、「意識・無意識への作用」という事に重点をおいて曲がつくられている。

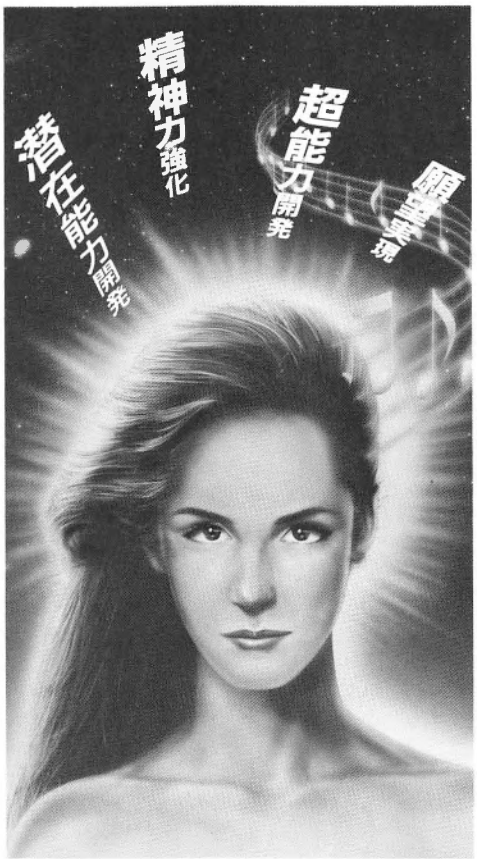
●記憶力・集中力・創造力などの潜在能力が曲を聴くことにより自然に開発される。

●一～二年の長期にわたって、これらの曲を愛好していると、超能力者・ヒーラー（心霊治療家）の典型的脳波であるアルファー波とシーター波の同時高レベル波形とよく似た脳波があらわれるようになり、その結果、鋭い直観力――これがさらに高まると未来予知や読心力などの超能力への持主になる。

●夜、寝る前に聴くと熟睡でき、疲れが翌日にあまり残らず、朝の目ざめがとてもさわやかになる。又、小さな事にクヨクヨしなくなる、包容力がつく、他人に寛容になり対人関係がスムーズにゆくようになる等々の人格向上効果が見られる。

●潜在意識が活性化されることにより、円滑現象（願望がスムーズに実現される、自分の思い通りの方向へ物事が進んでゆく等の現象）が起きるようになる。

これだけでは、まだとても説明しきれないくらいの驚くべき効能を持ったスピリチュアル音楽は、その多様な効能が、早くからアメリカの教育会・医学会・宗教界・実業界などの各界から熱い注目を浴び、数々の実験、科学的基礎研究が今日まで行なわれています。



アメリカでは能力開発に、願望実現にと幅広く活用されている

アメリカでは、これらのスピリチュアル音楽の科学的研究、神秘主義的側面からの経験データに基づいて、応用面での研究・実験もさかんに行なわれています。現在のところ最も利用が進んでいるのは教育の分野で、サジェストペディア（超高速学習法）のバックミュージックとしてさかんにこのスピリチュアル音楽が利用されています。又、能力開発、霊性開発を目的とした瞑想教室では、スピリチュアル音楽はもう空気同然の必需品で、大脳の潜在脳力をめざめさせるのに著しい効果のあることが何千人の生徒達を使った実験でも実証されています。

又、成功を夢みるビジネス界のエリートの間でもスピリチュアル音楽はたいへんな人気で、脳力開発に、ストレスコントロールに、又、願望の早期実現のためにと、いろいろな使い方をされています。

アメリカンライブラリー社では今アメリカで最も人気の高いスピリチュアル音楽のヒット曲、48曲（テープ24巻）の独占販売権を獲得し、「スピリチュアル・ヒットUSA」として日本の皆様に頒布会方式で通信販売いたしております。

「スピリチュアル・ヒットUSA」の頒布システムを説明しますと、初回から12ヶ月にわたって、毎月カセットテープ2巻が届けられ、支払いは毎月五、六〇〇円の送料三〇〇円。初回二回目以降を問わず、商品到着後5日間の無料試聴期間がありますから、万一、曲が気に入らなければ自由に返品できます。（二巻のうち一巻のみの購入の考方は代金は半額の二、八〇〇円プラス送料）又、途中で購入をストップしたい場合は、所定のハガキ又は電話で通知すれば、その時点で購入を止められます。この「スピリチュアル・ヒットUSA」各巻には、瞑想ガイダンス、願望実現マニュアル、脳力開発マニュアルがついていますので、それぞれの目的に応じてこれらのマニュアルをご利用下さい。第一回目の試聴のお申込みは、

〒107 東京都港区南青山1―26―4
アメリカンライブラリー社UF①係
電話 東京03(479)5864 まで

ハガキか電話で住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上、「スピリチュアル・ヒットUSA」試聴希望とお申込み下さい。

「スピリチュアル・ヒットUSA」◇ライブラリーの中の1曲ご紹介◇

曲　名：TEMPLE IN THE FOREST
作曲演奏：DAVID NAEGELE
曲の内容：アコースティックピアノ、シンセサイザー、エレクトリックピアノ、自然音で潜在意識の波動をあらわす森のリズムが形づくられる中を、"オーム"の神聖なマントラのバイブレーションが限りなく広がってゆく様をみごとに表現している。
瞑想用に、又直視力・創造力開発に最適の曲の一つ。

米国のスピリチュアル音楽ベストヒット48曲・24巻を一堂に集大成

お急ぎの方はお電話で
東京 03(479)5864
受付時間 AM8～PM10(日・祭日も受付中)

想像以上の効果にびっくり!!

はじめのころは「何かおもしろい音楽だナっていう感じで、でも聞いていると心が落ちついてくるし、まあBGMとしちゃあ静かでいい曲―くらいの印象しかなかったのですが、しばらくして色んな異常に気づきはじめました。低血圧で朝は二万手だったのが、すっと寝ざめがよくなって午前中の仕事のノリがよくなったとか、仕事上の判断が正確になり前みたくドジをやらなくなったとか。それにいちばんの異常は、女の女、特に美人と話をするとどうも変なところで緊張してしまって話が上すべりしたりして、どうも恋下手だったんですが、それが最近じゃ前みたく変なふうに気負いがなくなり、ほんとに気楽にストレートに話ができるようになったことです。おかげで、会社の女の子がみんなボクナ恋人に見えちゃうほど。何か会社へ行くのが楽しくなりました。ほんと。もちろん例の音楽は毎日かかさず聞いてます。次のテープが楽しみです。埼玉県 山口浩和

最近、人とのつきあいが信じられないくらいうまくゆきます。

広島県 船越照政

こうなったらいいなあと思っていたことがもう立続けに二度も現実のものになってしまいました。

東京都 高見隆幸

UFO contactee 100号
昭和63年1月25日発行
発行所 日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511 振替 東京4-35912
定価九〇〇円・送料二〇〇円

★ちょっと異次元体験してみませんか?★

あなたを「宇宙人」にする宇宙波動音楽

宇宙波動を生み出す音の魔術師IASOSがあなたを大宇宙へご招待します!

今、アメリカで最も注目されている新時代音楽のクリエーターのひとりIASOS。——彼の〝異次元宇宙音楽〟の宇宙波動が、悩みや不幸の誘因である地球の低い波動の呪縛から、あなたを解放します。「ヤソス」の宇宙波動に乗って、あなたも「意識の宇宙遊泳」「宇宙人気分」を楽しんでみませんか?

あなたを変える宇宙波動音楽

聴いているだけで、思わず「宇宙船で月面旅行しているような」「UFOに乗せてもらっているような」気分になってしまう、とても不思議でファンタスティックな音楽が、アメリカからやってきました。〝ギリシャ生まれの宇宙人〟こと、アクエリアスサウンド界の異才「ヤソス」の作曲になる宇宙波動音楽がそれ。

人間の意識の波動を高め、ひいては、この地球自体の波動をも高めてしまおうという遠大な意図をもって作られた宇宙波動音楽。非常に宇宙的な響きを持っていると同時に、光速を超えた世界(すなわち異次元世界)の波動を聴く人の意識の中で起こさせるこの音楽は、まるでUFOから発射された光線のような神秘的な力を持っています。

アメリカでも、瞑想愛好家、アクエリアンエイジの若者を始め〝本物〟を理解できる多くの人々に親しまれています。一般の人々はもとより、NASA(アメリカ航空宇宙局)の教育センター、百科事典でおなじみのブリタニカ社、そして先駆的医療を先取りする全米の医療機関などでも、この音楽の持つ不思議な力が評価され公式採用されています。

あなたの部屋が宇宙波動で満たされる

アポロ宇宙船に乗り込み大気圏外・月面を遊泳した宇宙飛行士が何人もロケに「神を見た」「本当の自分と出会った」と言い残して、退役後に牧師になったり、平和活動家になってしまった——この話は余りにも有名です。宇宙飛行士達が地球の大気圏を離れたとたん(つまり地磁気の波動の影響下から離れた時)〝神を見た〟と感じるような高い波動を感じたということは、今の地球大気圏内の波動レベルがいかに低いものであるかを、はからずも証明したということに外なりません。

実は、あなた自身、この地球のきわめて低い波動の影響下にあり、この低い波動に共振する意識の部分しか目醒めていないため、種々の不自由さ・悩み・不幸をかかえてしまっているのです。この地球の低い波動レベルの影響から意識を解放するため、古来からヨガを始めとする色々な行法そして瞑想法が開発されてきました。

ヤソスの宇宙波動音楽も同じように、この地球の低い波動から意識を解放し、〝悩み・不安〟などとは無縁の、人間本来の自由自在な至福に満ちた意識レベルを実現するために作られたものです。

うっとりとして音楽に心を合わせる、瞑想導入音楽として聴く、夜空をながめながら〝宇宙人気分〟で聴く、自分に合った方法でこの音楽に心を合わせることにより、あなたの部屋は宇宙波動で満たされ、あなたの意識は徐々に今までの束縛から解放され、自由と喜びに満たされたものになってゆきます。

▼ヤソス宇宙波動音楽ライブラリー

アルバム名
①WAVEI
②WAVE#2 ELIXIR
③ANGELIC MUSIC
④JEWELD SPACE

★IASOS(ヤソス)のプロフィール★

1947年ギリシヤ生まれ。4才の時に両親とアメリカに渡る。コーネル大学で文化人類学を専攻するが、大学在学中におけるTM(超越瞑想)体験および各種の神秘体験を経て宇宙意識にめざめ、宇宙意識の波動を持った音楽の創造をライフワークとすることを決意。現在も親交を温めているS.ハルパーンらの知己を得、宇宙波動を想起させる音楽的にも最高度に完成された"INTER-DIMENSIONAL MUSIC"(次元を超えた音楽)を創作し発表。一躍、全米で有名となる。

宇宙波動音楽アルバム(テープ4巻)を特別頒布中!!

今アメリカで話題のヤソス作曲の「宇宙波動音楽ライブラリー」のカセットテープアルバム(テープ4巻)を頒布会方式で特別頒布いたしております。

お申込み後、初回から4ヶ月にわたって毎月カセットテープ一巻が届けられ、お支払いは毎月テープ到着後に、3,500円の送料300円。

初回二回目以降を問わず、テープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、万一、一曲が気に入らなければその時点で返品できます。又、途中でご購入を止めるのも自由です。

■一括購入もできます。

テープ4巻を一度に購入したいという場合は「一括購入希望」と明記の上お申込み下さい。テープ4巻をまとめてお届けし、お支払いは13,500円の送料500円、(5日間無料試聴できます。一括購入申込みの場合は、4巻まとめてご購入あるいはご返品願います)

お申込みは今すぐハガキ・電話で!!

お電話のお申込みは
03(479)6576
受付時間AM10～PM20

●「宇宙波動音楽ライブラリー」試聴申込
●頒布会・一括の別
●住所
●氏名
●電話番号
●年令
●職業

郵便はがき
〒107
東京都港区赤坂9-6-27
日本ニューエイジセンター
UFO①係

〒107 東京都港区赤坂9-6-27
日本ニューエイジセンター
電話 東京03(479)6576

当センターは「ヤソス」の音楽の日本における独占販売権を取得し、現在国内普及に努めております。「卸売り」「販売代理店」をご希望の方は右記までご一報下さい。